

No. 1117/2114



廣瀨桂次郎
原田十八
共譯

診斷學

第三

朝香屋書店發兌



愛氏診斷學第三

目次

| | |
|---------------|-----|
| 第五節 咯痰診查 | 七二九 |
| (イ) 上皮細胞 | 七五二 |
| (ロ) 粘液球及膿球 | 七六〇 |
| (ハ) 赤血球 | 七六三 |
| (ニ) 微菌 | 七六五 |
| (ホ) 滴蟲 | 七八〇 |
| (ヘ) 結晶體 | 七八二 |
| (ト) 纖維性氣管枝凝固物 | 七九五 |
| (チ) 氣管枝螺旋狀體 | 八〇二 |
| (リ) 細菌性氣管枝栓子 | 八〇六 |

(ヌ) 澱粉體 八〇九

(ル) 「エヒノコツクケン」胞 八一〇

(ヲ) 氣道ノ實質成分 八一五

(ワ) 腫瘍片 八二一

(カ) 肺凝結物 八二三

(ヨ) 異物 八二四

(タ) 痰ノ偶在混合物 八三〇

痰ノ種類 八三一

第六節 呼吸器諸病ノ理學的診査 八四一

(イ) 氣管枝諸病 八四三

(ロ) 肺臟諸病 八四九

(ハ) 肋膜諸病 八五九

第七節 喉頭ノ診査 八六七

(イ) 喉頭ノ觸診 八六九

(ロ) 喉頭ノ視診 八七四

色澤ノ變化 九一九

實質缺損 九二二

腫瘍 九二二

狹窄 九二三

異物 九二五

移動性 九二五

第八節 鼻ノ診査 九四一

(イ) 鼻ノ觸診 九四二

(ロ) 鼻腔ノ視診 九四六

第九節 胸腺ノ診査……………九六一

以上

愛氏診斷學第三

獨逸 ヘルマン、アイヒホルスト 著

廣 瀬 桂 次 郎

原 田 八 十 八

共譯

第五節 咯痰診査

Untersuchung des Auswurfes.

咯痰トハ咳嗽若クハ、驚咳ニ由リ氣道ヨリ咯出セラレタル排泄物ニシテ、
内ニ口腔、咽頭及後鼻腔ノ成分ヲ混スルヲ常トス故ニ咯痰ノ成分ハ之
ヲ固有ノ呼吸器ニ屬スルモノト偶然ノ混合物トニ別タサルヘカラスニ
抑モ咯痰ノ検査ハ古來診斷上ニ貴重セシモノニシテ古人ノ咯痰ヲ精論
セシハ今日ニ於テモ猶驚クニ堪ヘタリ是レ古人ノ肺患ヲ診斷セント
スルヤ專ラ咯痰ノ検査ニ據リシヲ思ハ、容易ニ之ヲ解スルヲ得ルナ
リ

然レモ聽診及打診ノ發見セラル、ニ及ヒ肺患ノ診斷ハ大ニ精確トナ
 レリ是レ近世醫學ノ誇稱スヘキ所ニメ遂ニ咯痰ノ検査ハ單ニ爾他診
 查法ニ由テ得タル成績ヲ確ムルモノタルニ過キサルニ至レリ然レモ
 呼吸器疾患ハ咯痰検査ヲ缺クモ之ヲ診定シ得ルモノトナスハ不可ナ
 リ何トナレハ聽診及打診今日ノ如ク全成ノ域ニ達セシニ係ハラス猶
 實地上肺實質ノ或ル疾患ハ痰ノ變化ニ據ルニアラサレハ之ヲ知ルヘ
 カラサルモノアレハナリ是レ二三ノ例ニ由リテ直ニ證明シ得ヘシ例
 之肺ノ病竈中心性ナルキ即チ厚キ含氣肺質ヨリ圍繞セラル、キハ打
 槌及聽胸器ヲ以テスルモ概シ其成績ヲ見ル能ハス故ニ獨リ咯痰ノ檢
 查ニ據テ之ヲ診スヘキノミ又時トノ解剖上相異ナレル二種ノ病機其
 理學的變化ヲ同フスルヲアリ斯ノ如キニ於テモ其疾患ノ何レニ屬ス
 ルヤハ唯咯痰ノ性狀ニ由テ之ヲ決スルヲ得ルノミ是レ肺壞疽及腐敗

性氣管枝炎ニ於テ見ル所ニ其肺壞疽ナルト然ラサルトハ獨リ痰中
 肺壞疽片ノ存否ニ依ルハ皆人ノ知ル所ナリ加之時トノ肺ノ疾患打診
 上及聽診上未ダ證明スルヲ得サルニ當リ咯痰ニ著明ナル變化ヲ呈ハ
 ストアリ例之世人ノ知ル如ク爾他理學的診查法ヲ以テスルキハ肺實
 質猶健全ナルノ觀ヲナスモ痰中結核、バチル、ス、及彈力纖維ノ存スル
 アルキハ其疾患ノ肺癆タルヲ確診シ得ルヲ稀ナラサルカ如シ故ニ咯
 痰ハ診斷上及治療上益、喫緊ナルヲ認ムヘシ
 咯痰若シ氣道ノ最上部即チ喉頭ヨリ發生スルキハ屢單一ノ聲咳ニ由
 リテ之ヲ咯出スルヲ得ヘキモ之ニ反シ深部ニ堆積セル液質ヲ外泄セ
 ントスルキハ強劇ニシ且持長セル咳嗽ヲ要ス蓋咯痰ハ異物ニ等シク
 氣管枝ノ粘液膜ヲ刺戟シ反射的咳嗽ヲ促スモノニシテ亦氣道ヲ開通セ
 シムル一種ノ自助機轉ト云フヘシ而シテ此反射作用ハ迷走神經ノ作用

ニ由リテ成ルモノニシテ該神經ハ實ニ全呼吸器ノ粘液膜ニ知覺纖維ヲ分與スルモノナリ

試験的検査ニ據ルニ健全ナル動物ニ於テハ氣管枝粘液膜ノ刺衝機諸部同様ナラスノ氣管枝分岐部近傍ノ粘液膜刺戟ハ殊ニ咳嗽ヲ喚起シ易シ然レモ之ヲ人類ニ於ケル經驗ニ徵スルニ發炎セル氣管枝粘液膜ハ其部位ヲ問ハス輕微ノ刺戟ニ由リテ咳嗽ヲ起スモノニシテ氣管枝ノ發炎部ハ咳嗽性知覺過敏トナルヲ見ル

「ローゼンタール」氏ハ喉頭粘液膜ニ於テハ上喉頭神經咳嗽ヲ主宰スルモノニシテ該部ノ知覺ハ一ニ此神經ノ管スル所ナルヲ示セリ然レモ茲ニ於テモ亦咳嗽ノ刺衝機ハ全喉頭上同様ニ分配セララルモノニアラス「ノートナーゲル」氏ハ健全ナル犬ニ就テ獨リ下聲帶及下聲帶ト環狀軟骨ニ到ル喉頭粘液膜ノ器械的刺戟ノミ咳嗽

ヲ喚起スルヲ論シ「エルマイエル」氏ハ人類ニ於テモ此說ノ正確ナルヲ發見セリ而シテ此等ノ試験ニ據レハ最モ過敏ナルハ兩披裂軟骨間ノ部位ナリト又「マイエル」氏ノ檢索ニ據レハ固有咳嗽部ノ刺戟ニ由リテ一回咳嗽ヲ發スルキハ屢々咳嗽ノ刺戟機ヲ有セサル部ノ刺戟亦咳嗽ヲ促スニ足ルト云フ

「ノートナーゲル」氏ニ從ヘハ氣管粘液膜ノ刺戟ハ其部位ヲ問ハス咳嗽ヲ起スト雖モ上記ノ喉頭部及氣管枝分岐部ニ比スレハ其刺戟強劇ナルヲ要スト

固有肺實質即チ肺胞ハ咳嗽ヲ喚起スルヲナシ是ヲ以テ其分泌物ハ漸次堆積シ導通セル氣管枝ノ粘液膜ニ達スルニ及ヒ始テ咳嗽ヲ起スナリ

肋膜咳 *Pleurahusten.* ノ存否ニ就テハ諸說紛々トシ未タ一定セス加

之諸實驗家ノ報告相撞着スルヲ見ル例之ノ一トナゲル氏ハ器械的ニ犬ノ肋膜ヲ刺戟セシモ咳嗽ヲ起サシムルヲ得サリシト云ヒ「コーツ」氏ハ之ニ反シ肋骨肋膜ヲ刺戟セルキ之ヲ發セシト云ヘリ又「マイエル」氏ハ人類ニ就テ肋膜ノ炎症若シ他ニ合併症ナク殊ニ其經過中氣管枝加答兒ヲ缺クキハ咳嗽ヲ伴ハサルヲ證セントセリ然レモ余ノ經驗ニ據レハ到底斯說ニ同意ヲ表スルヲ得ス余嘗テ膿胸ノ爲メニ手術セシ人ニ於テ微細ナル消息子ヲ以テ肋骨肋膜ヲ器械的ニ刺戟セシニ頗ル劇シキ咳嗽ヲ發セシヲ見シ「屢」之アリ又漿液性滲出物ヲ穿刺スルノ際發炎セル肋膜ノ兩葉漸々近接スルニ從ヒ甚シキ咳嗽ノ起ル「アル」ハ人ノ屢見ル所ナリ又乾性肋膜炎ニ罹レル患者ニ於テ輕ク患部ヲ壓スルキハ患者チソ咳嗽ヲ發セシムルニ足ル「敢」テ稀ナラス但此際各人ノ特性ハ之

ニ關係アルカ如シ故ニ全ク健全ナル人ニ於テモ往々肋間腔殊ニ其下位ヲ輕壓スルキハ一種笑癢性ノ咳嗽刺戟及咳嗽ヲ喚起スルヲ得ヘシ是レ壓力ノ傳達ニ由リテ氣管枝粘液膜器械的ニ刺戟セラレタルモノト爲スヲ得サルナリ
呼吸器ニ關係ナク却テ迷走神經知覺纖維ヲ受有セル他ノ臟器ヨリ反射的ニ咳嗽ノ喚起セラル「アル」ヲ知ルハ頗ル興味アル「ニ」ノ既ニ往時「ロンベルグ」及「トインベ」ノ兩氏ハ外聽道ノ刺戟ハ咳嗽ヲ促スヲ唱ヘリ「フォクス」氏ハ近世斯說ヲ試驗セル人ニ「ノ」氏ノ發見ニ從ヘハ八十六人中十五人故ニ殆ト十七%以上ハ外聽道ノ刺戟ニヨリ咳嗽セリト云フ蓋試驗ノ効ヲ奏スルト否ヲサルトハ大ニ知覺ノ銳鈍ニ關スルモノトス
「コーツ」氏ノ試驗的檢索ニ據レハ咽頭及食道ノ刺戟モ亦咳嗽ヲ起

コノモノトセサルヘカラス
 胃咳 *Magenhusten.* ノ存否ハ世ノ屢爭フ所ナリ然レモ胃粘液膜刺戟
 ノ爲メニ咳嗽ヲ起スヲアルノ説ハ屢誇張ニ流レシハ亦掩フヘカ
 ラスノ其首要ナル謬源ハ醱酵ニ由テ屢出スル刺戟性瓦斯喉頭ニ
 達シ茲ニ始テ咳嗽刺戟及咳嗽ヲ起スヲ誤リシニ在リ然レモ胃咳
 ノ發現ヲ全ク否難スルハ亦大早計タルヲ免レス何トナレハ胃部
 ヲ壓迫スルハ健康體ニ於テモ時トシテ咳嗽刺戟及咳嗽ノ現ハル
 ルヲ見レハナリ又健全ナル人氷片ヲ喫スルノ後咳嗽スルヲ稀ナ
 ラス是レ胃粘液膜ノ寒冷刺戟ニ由ルモノトナスノ他説明シ能ハ
 サルナリ

輒近ナウニシ氏ハ古説ヲ再起シ肝臟若クハ脾臟ノ肥大ヲ有スル
 患者ニ於テ患器ニ抵觸スルハ直チニ咳嗽ヲ發スルヲ往々之ア
 ルヲ注目セリ故ニ亦肝咳及脾咳 *Leber-und Milzhusten* ノ稱ヲ設クル
 ヲ得ヘシ往々其咳嗽ヲ喚起シ得ルノ部一部ニ局スルヲアリ又殊
 ニ注目スヘキハ持長シテ刺戟スルハ咳嗽ノ受衝機漸次ニ遲鈍
 トナリ暫時ヲ經ルノ後現象更ニ活潑トナルヲ是ナリ

其他「コーツ」氏ノ檢案ニ據レハ中樞性咳嗽 *Centralen Husten.* アルカ
 如シ何トナレハ氏ハ犬ニ於テ直接ニ延髓ヲ刺戟シテ咳嗽ヲ起ス
 ヲ得タレハナリ又「ワングワツキ」氏ハ「ギッデル」及「ノートナーゲル」
 氏ニ反シ犬ニ於テ切斷セル上喉頭神經及氣管神經ノ中心端ヲ刺
 戟セシニ亦咳嗽ヲ發セシヲ見タリト云フ

咳嗽ノ由テ起ル關係ハ上記ノ如ク多々之アリト雖モ實際ニ於テハ其
 原因頗ル單一ニシテ殆ト常ニ氣管枝粘液膜ノ器械的刺戟ニ緣由ス又小
 兒及老人ハ咳嗽スルモ通常痰液ヲ咯出セスノ却テ嚥下スルハ實地上

尋常成分ニ屬スルカ如シ「ヤッフエ」氏ハ肺壞疽及腐敗性氣管枝炎ノ痰ニ於テ揮發性脂酸殊ニ酪酸及「バルドリアン」酸ノ他猶「ロイチン」、「チロシン」及「グリセリン」ノ痕跡ヲ發見シ又腐敗痰中ニ存在セル「栓子」ヨリ柔軟ニ分解シ易ク試ニ沃度ヲ加フルニ青色ニ變スルモ澱粉ニアラス亦「プロテイン」質ニモアラサル一種ノ物質ヲ檢出スルヲ得タリト又「フライシエル」氏ハ肺水腫ニ由テ斃レタル腎臟病患者ニ於テ其痰中ニ尿素ヲ證明シタリ其他往時ノ報告ニ據レハ糖尿病患者ノ痰中糖分ヲ含有セシ「アリス」ト云フ痰ノ無機成分ニシテ殆ト常ニ痰中ニ證明セラル、ハ左ノ諸種ナリトス即チ格魯兒那篤留母、格魯兒加留母、格魯兒麻留涅叟、磷酸那篤倫、磷酸石灰、磷酸麻留涅矢亞、硫酸那篤倫、硫酸石灰、炭酸那篤倫、炭酸石灰、炭酸麻留涅矢亞、酸化鐵鹽及硅酸抱合物是ナリ

水分、有機及無機成分ノ定量上ノ關係ハ甚タ差異アルモノニシテ定ノ肺患ニ對スル正確ナル規則ヲ發見スル能ハス近時ノ説ニ從ヘハ其最高數ト最低數トハ左ノ數量ノ間ニ往來スト云フ

| | |
|-----|---------------|
| 水分 | 八七三〇七七乃至九八三〇 |
| 固形分 | 一二六九二三乃至一七〇 |
| 有機質 | 一一七 乃至一一五、八八一 |
| 無機質 | 四、五七四乃至一五、七八二 |

若シ「ペーカー」氏ノ説ニ正確ナラシメハ游離脂肪ハ高度ノ肺癆ノ痰中ニ最モ多量ニシテ氣管枝加答兒ノ痰中ニハ之ニ反シ又纖維素性肺炎ノ痰ハ殊ニ「コレステアリン」ニ富ミ高度ノ肺癆ハ僅ニ之ヲ含ムノミ「レチ、ン」、「スクライン」及「恐クハ又「グリコーゲン」ハ咯痰

膿球ニ富ムルハ愈々多量ナリトス
 痰ノ完全ナル理學的検査ハ其肉眼的并顯微鏡的性質ニ注意スルニ在
 リ其際痰ハ可及的變化ヲ被ラシメサル様貯フルヲ要トス故ニ痰ハ清
 潔ナル硝子器ニ採取シ能ク之ヲ覆ヒ以テ異物ノ竄入ニ由リ不潔トナ
 ルヲ防キ且烈シキ蒸發ヲ避クヘシ殊ニ炎夏ノ候ニ於テハ之ヲ冷處ニ
 貯フルヲ要ス又痰ヲ水中ニ採取スルハ稱用スヘキモノコアラサルカ
 如シ何トナレハ水ハ有形元質ヲ其細胞ノ遺構ヲ甚シク變化セシム
 ル物質ナレハナリ但或ル目的ニ向テハ攝集セル痰ニ水ヲ注キテ攪拌
 スルハ大ニ利アリ殊ニ不溶解性ニ其重量ノ爲メニ器底ニ沈澱セル
 成分例之纖維素性ノ凝塊ヲ検査セントスルハ然リ
 咯痰ノ肉眼的検査ニ於テハ其量、色澤、透否、濃淡、形狀、含有空氣層重ノ成
 否、臭味、反應及異重ニ注目スルヲ要ス而シテ此般ノ肉眼的性狀ハ顯微鏡

的成分ニ親密ノ關係ヲ有スルカ故ニ重複ヲ避ケン爲ニ二者ハ完ク之
 ヲ分テ論スルヲ得ス
 咯痰ノ量ハ解剖上同一ナル肺患ニ於テモ甚々著明ナル差異ヲ呈ス然
 レモ例規トシテ呼吸器炎症性疾患ノ初期及末期ニ於テハ炎症ノ亢進期
 ニ比スレハ其咯出量饒多ナリ就中肺ニ腔洞ヲ有スル者ニ於テハ其量
 顯著ナルヲ常ニ「ランチック」氏ハ既ニ増進セル肺癆ニ於テハ痰ノ一
 日量全半胸ヲ充タスニ足ルヲ示セリ然レトモ氣管枝變廣、壞疽性ノ腔
 洞及肺膿瘍ニ於テモ亦其量二十四時間内一〇〇〇立方センチメーテ
 ル及其以上ニ達スルコト稀ナラス故ニ咯痰ハ體液ノ亡失ヲ招クモノ
 ニ其持續スル久シキニ瀕ルハ全身ノ衰弱ヲ來ス「アルヤ」明カナ
 リ
 屢々痰ノ色澤ヨリ其顯微鏡的成分ヲ測知シ得ル「アリ」即チ咯痰若シ主

トノ粘液ヨリ成レルキハ硝子様ニシテ水様色ヲナシ之ニ反シ膿球ヲ含有スル多量ナルキハ不透明トナリテ膿球ヲ含有スル部ハ帶綠黃色及膿様色ヲ帶フ又赤血球ヲ含ムキハ赤色ヲ得ルニ至ルモノニシテ其濃淡及廣狹ハ混合セル血球ノ量ニ從テ變化アルハ素ヨリナリトス又純粹ナル血痰モ往々見ル所ニシテ其色ハ通常鮮明即チ動脈性ナリトス又ヘマトイヂンノ變化ニ由リ痰ノ帶褐紅色帶紅褐色黃色及時トノ綠色ヲナスコアリ例之纖維素性肺炎ノ紅色變肝期ニ於テ見ル鏽色痰是ナリトラウベ氏ハ痰ト血液トヲ單ニ混和シ以テ人爲ニ之ヲ摸セントセシモ其効ナカリシ是レ鏽色痰ハ痰中ニ混セル赤血球内血色素ノ變化ニ關スレハナリ又疾患融解期ニ向フキハ鏽色痰變シテ枸橼黃色若シハ洎芙蘭黃色痰 Sputum crocum. トナリ之ニ反シ不幸ニシテ肺水腫ニ轉スルキハ其痰深暗赤色ヲナシ梅汁様色トナル

急性粟粒結核ニ於ケル痰色ハ時トノ頗ル纖維素性肺炎ノ鏽色痰ニ類似セルコアリ然レハ粟粒結核ニ於テハ褐色一層濃厚ナルヲ常トス是レ心臟病患者ノ出血性肺梗塞ニ於テモ亦同キ所トス時トノ肺膿瘍ニ於テ小麥褐色ノ痰ヲ咯出スルコアリ其色ハヘマトイヂン結晶ノ多量ニ痰中ニ混和セルニ基因スルナリ又肝膿瘍ノ肺及氣道内ニ破潰セル症ニ於テハ褐黃シヨコラーヂ様加之鮮カルミン紅色ノ痰ヲ見ルコアリ此痰ハ往々破潰症候ニ先チテ之ヲ發ス又腐敗性氣管枝炎及肺壞疽ニ於テハ其痰粘土色ヲ呈スノートナーゲル及トラウベ氏ハ散渙ヲ以テ終レル纖維素性肺炎ニ於テ綠色痰ヲ經驗セリト云フ
草綠痰ハ亦纖維素性肺炎ニ於テ疾病ノ極期ニ當リ黃疸ヲ合併スル片之ヲ見ル然レハ斯ノ如キ状態ニ於テハ單純ナル氣管枝加答兒ニ於テモ

其痰綠色ノ觀ヲナスニ至ル然レモ此般ノ現象ハ常ニ見ルモノニアラ
 スノ且痰ノ綠色ヲ得ルヤ黃疸一定ノ強度ヲ要スルカ如シ又「レーマン」
 氏ハ纖維索性肺炎ノ草綠痰中ニ膽汁酸ヲ證明スルヲ得タリト云フ但「グ
 メリン」氏ノ不純ナル硝酸ニ由ル膽色素ノ試験ハ設令綠色ノ色輪ヲ呈
 スルモ以テ色素ノ存在ヲ徵スルニ足ラス何トナレハ尋常ノ痰亦此種
 ノ反應ヲ呈スレハナリ
 肺癌ニ於テハ其痰綠色ヲナシ或ハ暗紅色ニシテ恰モ覆盆子汁ノ觀ヲ爲
 ス然レモ「ダローレル」氏ハ二人ノ肺癆患者ニ於テモ同様ノ痰ヲ經驗セ
 リト云フ又氣管枝喘息ニ於テモ綠色痰ヲ咯出セルヲアリト其他肺炎
 ノ肺膿瘍ニ轉スルモ亦其痰綠色ヲナス
 時トシテ蔓延性若クハ斑點狀ニ黑色ヲ呈スル痰ヲ見ルヲアリ是レ曾テ
 多量ニ吸入シタル炭粉ニ基因スルカ或ハ腐敗性氣管枝炎若クハ肺壞

疽ニ於テ混合セル血色素ノ變化ニ由リテ發スルモノナリ
 又時トシテ痰中許多ノ鐵抱合物ヲ混シ爲メニ略痰、赭黃色ヲナシ或ハ「ウ
 ルトラマリ」ニ由リテ青色ヲ呈スルヲアリ
 一種ノ色素「バクテリア」ノ發生ハ痰色ヲ偶然變化セシムルヲアリ「レ
 ウエル」氏ハ「トラウベ」氏ノ「クリニツク」ニ於テ炎夏ニ當リ痰ノ泡沫層上
 ニ分裂菌(恐ラクハ「レプト」ト「リツキ」ス「ブツカーリス」)發生シテ一種ノ黃
 色ヲ呈シ而シテ其黃色ハ咯出セラレタル痰塊無色ナルモ殊ニ著明ナル
 ノ經驗ヲ記載セリ又「オ、ローゼンバツ」氏ハ痰ニ發生セル微菌ヲ他ノ
 痰ニ移植セシニ亦其綠色ヲ顯ハスヲ見タリト云フ余カ助手「フリツク」
 氏ハ此微菌ヲ精檢シ其「バチル」スナルヲ確定セリ
 痰ノ透明性ハ其構造ニ關スルモノニシテ細胞愈々僅少ナルモ亦愈々透明
 ナリトス故ニ純粹ナル粘液痰若クハ主トシテ粘液ヨリ成レル略痰ハ硝

子様透明ナルモ細胞ニ富饒ナル膿痰ハ不透明ナリ又後文詳論セント
 スル漿液痰ハ甚シク水分ニ富メルヲ以テ一層透明ナリトス其他纖維
 性肺炎ノ粘稠ニ多量ノ「ムチン」ヲ含メル鏽色痰ニ於ケルモ亦然リ又
 炎症性疾患ニ於テハ初期ニハ其痰多クハ透明ナルモ後ニ至レハ饒多
 ノ細胞ヲ混シテ濁濁ス是レ上文記載セル所ニ依レハ容易ニ解シ得ヘ
 シ
 痰ノ濃淡ハ時トノ豫後上并治療上ニ價值ナキニアラス例之纖維素性肺
 炎ノ經過中其痰卒然例規ニ反シテ稀液狀トナリ同時ニ饒多トナルハ
 ハ疾患肺水腫ニ轉スルノ恐アルカ如シ要スルニ凡テ痰ハ粘液ニ富饒
 ナルニ從ヒ愈粘稠トナルモノニ之ニ反シ膿痰及甚シク水分ヲ含メ
 ル痰ハ稀薄ナリ此理ニ由リ呼吸器ノ炎症疾患ニ於テハ發病ノ初期ニ
 於ケル痰ハ快復期ノモノヨリ粘稠ナルヲ常トス

痰ハ殊異ナル形狀ヲ具フルヲアリ例之貨幣狀痰及球狀痰ノ如キ是ナ
 リ其詳細ハ後文之ヲ論セントス
 痰中ノ空氣ハ痰ノ種類ニ從テ同シカラス就中粘液痰水様痰及純粹ナ
 ル血痰ハ甚シク氣泡ヲ混スルヲ常トス
 痰ノ層重ヲ成スハ往々見ル所ニ純粹ナル膿痰ヲ暫時間靜置スルニ
 饒多ノ膿球碎片狀ヲナシテ器底ニ沈澱シ膿漿ハ其上際ニ在テ液層ヲ
 成スヲ多シ又腐敗性氣管枝炎及肺壞疽ノ惡臭痰ハ著明ナル層ヲ呈ハ
 スモノニ其最下層ハ膨脹或ハ破壞セル膿球ヨリ成レル顆粒狀ノ沈
 澱ニノ漿液性ノ液層ハ其上際ニ位シ粘液及膿球ヲ混セル層之ニ次キ
 其最上層ハ泡沫ヨリ成ル
 痰ハ或ハ完ク無臭ナルカ或ハ微臭ヲ帶ヒ又氣道内ニ鬱滯セルモノハ
 惡臭ヲ放ツ此理ニ由リ肺癆患者ノ死ニ近ツクヤ其痰惡臭ヲ帶フルヲ

稀ナラス又肺膿瘍及膿性肋膜炎滲出物ノ氣管枝内ニ破壊セル片見ル如キ純膿痰ハ往々輕キ牛酪様ノ酸臭ヲ放ツコアリ又臭氣ノ殊ニ甚シキハ腐敗性氣管枝炎及肺壞疽ノ痰ニ於テ見ルモノニ其臭氣暫時ニ全室ニ瀰蔓シ爲メニ其近傍ニ居ル者不快ニ耐ヘサルコアリ然レモ稀ニハ少時ノ後痰其惡臭ヲ亡失スルコアリ是レ病機亢進セル症ニ於テモ時トノ見ル所ニ爲メニ其痰無臭ナルカ如キ感ヲ起サシム然レモ通常其近傍ニ居ル者ノ新鮮ナル痰ノ蒸散ニ由リテ惱メルノ狀ハ醫ヲ其臭氣ニ注意セシムルナリ又斯ノ如キ際ニハ患者ニ咳嗽ヲ命シ咯出物ノ臭氣ヲ直チニ檢スルヲ適當トス其他痰ヲ振盪シ或ハ之ヲ他器ニ移スキハ通常再ヒ惡臭ヲ放ツ

痰ノ味覺ニ關シテハ患者ノ訴フル所ニ依ルヘキノミ而シテ通常鹽味若クハ甘味アルヲ告ク然レモ痰味ノ如何ハ診斷上特殊ノ要アルモノニ

アラス

痰ノ反應ハ多クハ亞爾加里性ナリトス

痰ノ顯微鏡的検査ヲ爲スニ當テハ通規トシテ其小片ヲ白色若クハ「アス」アル漆ヲ以テ黒色トナセル皿上ニ薄ク展布シ鋸子若クハ「ブレバ」ト針ヲ以テ檢セントスル部ヲ撮取シ物體硝子上ニ移スヲ要ス然レモ痰塊細小ナルキハ其一小部ヲ取ルハ多クハ困難ナリトス

顯微鏡検査ニ用ユル擴大力ハ之ヲ概論スル能ハサレモ多クハ四百倍乃至五百倍ノモノヲ要ス然レモ顆粒狀ノ殘塊ヨリ分裂菌ヲ檢出セントスルカ如キハ擴大力ノ最モ強キモノ殊ニ「アッベ」氏ノ照輝器ヲ具ヘタル油浸置ヲ應用セサルヘカテス往時ハ實地醫家ニ在テハ二百倍乃至三百倍ノ擴大力ヲ以テ足ルノ説行ハレシモ近世傳染病學ノ啓發セルヤ斯ノ如キ意見ヲ抱ク者ハ世ノ嗤笑ヲ免レス

時トノ顯微鏡的標本ニ加フルニ反應藥ヲ以テスルヲ要スルヲアリ其目的及反應藥ノ性質ニ就テハ後文適當ナル部位ニ於テ之ヲ記載セントス但反應藥ノ痰塊ニ混スルハ甚タ緩徐ニシテ其反應ヲ呈スルニ至ルハ常ニ久時ヲ要スルモノナルハ宜シク之ヲ銘心スヘシ痰ノ有形成分ハ左ノ如シ

(イ) 上皮細胞 *Epithelzellen.*

氣道ノ内部及直ニ之ニ連續セル腔洞即チ口腔咽頭及後鼻腔ニ於テハ二種ノ上皮アリテ存ス一ハ磚狀上皮ニシテ一ハ頭毛上皮ナリ而シテ頭毛上皮ハ氣道ノ大部分ヲ被覆スルニ係ハラヌ其痰中ニ呈ハルハヤ非常ニ稀有ナリトス但シ「ヘンレ」氏カ既ニ數年前ニ示セシ如ク鼻粘液膜

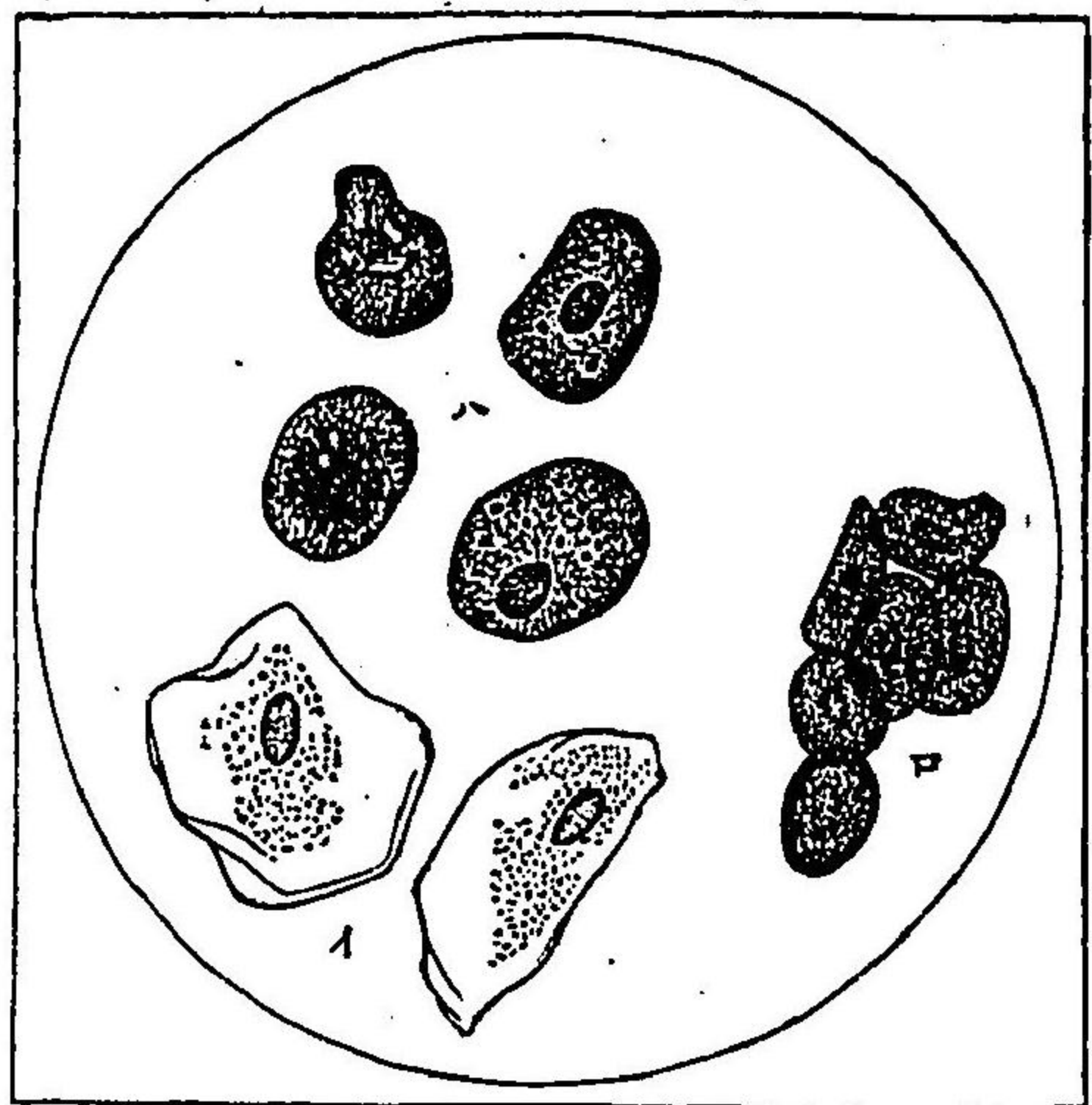
ノ急性加答兒ニ於テハ屢之ヲ見ルヲアリト雖モ是レ上文記載セル如ク痰ノ本質成分ニアラスノ寧ロ偶在成分ト見做サ、ルヘカラス而シテ氣管枝粘液膜ニ於テハ炎症蔓延性ニシテ且劇甚ナルモ頭毛上皮ノ剝脱シ來ルヲアルハ稀ナリ加之氣管枝粘液膜上ノ纖維性沈着物ニ於テモ頭毛上皮毀損セラル、トナクノ義膜下ニ存スルヲ稀ナラス輒近エ、レツセル「氏」ハ食道癌ノ右肺ニ破潰セルカ爲メニ發生セル肺壞疽ニ於テ其痰中著明ナル核及往々分裂セル基礎突起ヲ有スル無數ノ健全ナル頭毛上皮ヲ混セシノ經驗ヲ記載セリ

口腔ノ磚狀上皮ハ通常咯痰中ニ存在スルモノニシテ若シ上皮層ノ表面ヨリ來リタルモ其大サニ由テ容易ニ之ヲ知ルヲ得ヘシ即チ多角形ニシテ多クハ二三ノ稜ヲ呈シ〇〇三五乃至〇〇八五「ミルリメーテル」直徑ヲ有スル大細胞ニシテ其中央ニ光輝アル楕圓形ノ核ヲ含ミ核中仁

ヲ見ル(第八十三圖イ)其細胞内容ハ微細顆粒狀ニシテトシハ顆粒、核ノ周圍ニ堆積ス又深層ヨリ來レル上皮ハ表層ノモノヨリ小ニシテ稍圓形ヲナシ僅ニ顆粒狀ヲ呈ス(第八十三圖ロ)故ニ若シ箇々點在スルハ之ヲ肺胞ノ上皮或ハ氣管枝粘液膜腺ノ上皮ヨリ區別スルヲ大ニ難シトス要スルニ其状態ノ如何ヲ問ハス口腔ノ上皮ハ痰ノ診斷的關係ニ於テ價値アルモノニアラス何トナレハ痰ノ偶在成分ナルヤ素ヨリ論ヲ要セサレハナリ

痰中ニ在ル肺胞上皮ハ常ニ圓形若クハ長楕圓形ヲナシテ〇、〇一五乃至〇、〇四「ミルリメーテル」ノ直徑ヲ有シ細胞體ハ往々細顆粒狀ニシテ種ノ弱キ光輝ヲ放ツ而シテ多クハ其内部ニ粗大ノ顆粒狀ヲナシ從テ暗色ヲ呈スル卵圓形ノ細胞核ヲ有ス(第八十三圖ハ)又細胞内ニ於テハ顆粒狀圓形若クハ桿狀ニシテ黑色或ハ褐色ノ色素分子ヲ含有スルヲ常ト

第三十八圖



痰中ヨリ採取セル上皮細胞
 (イ)口腔最上層ノ扁平上皮細胞(ロ)同深層ノ
 モノ(ハ)肺胞ノ上皮ニシテ色素顆粒ヲ含有シ
 左上方ノ一個ハ出血性硬塞ノ痰中ニ在リシ
 モノニシテ「ヘマトイザン」結晶ヲ有ス、二百
 七十五倍(余カ實驗)

ス而シテ其分子或ハ散在シ或ハ甚シク密接シテ大ナル色素塊ヲナシ細胞腔ノ大部ヲ充スヲアリ

肺胞ノ上皮ニ二種アリ一ハ大ニシテ扁平ニシテ一ハ小ニシテ圓形ヲナス「ピツゼロ」氏ノ説ニ從ヘハ咯痰中ニ現ハルハ獨リ乙ノミナリト云フ其形狀ハ上文記載セルモノ是ナリ

若シ肺胞中ニ溢血アルハ其上皮滲透性ノ黄色ヲ現ハスヲ稀ナラス是レ血色素ノ吸收ニ歸スヘキモノ

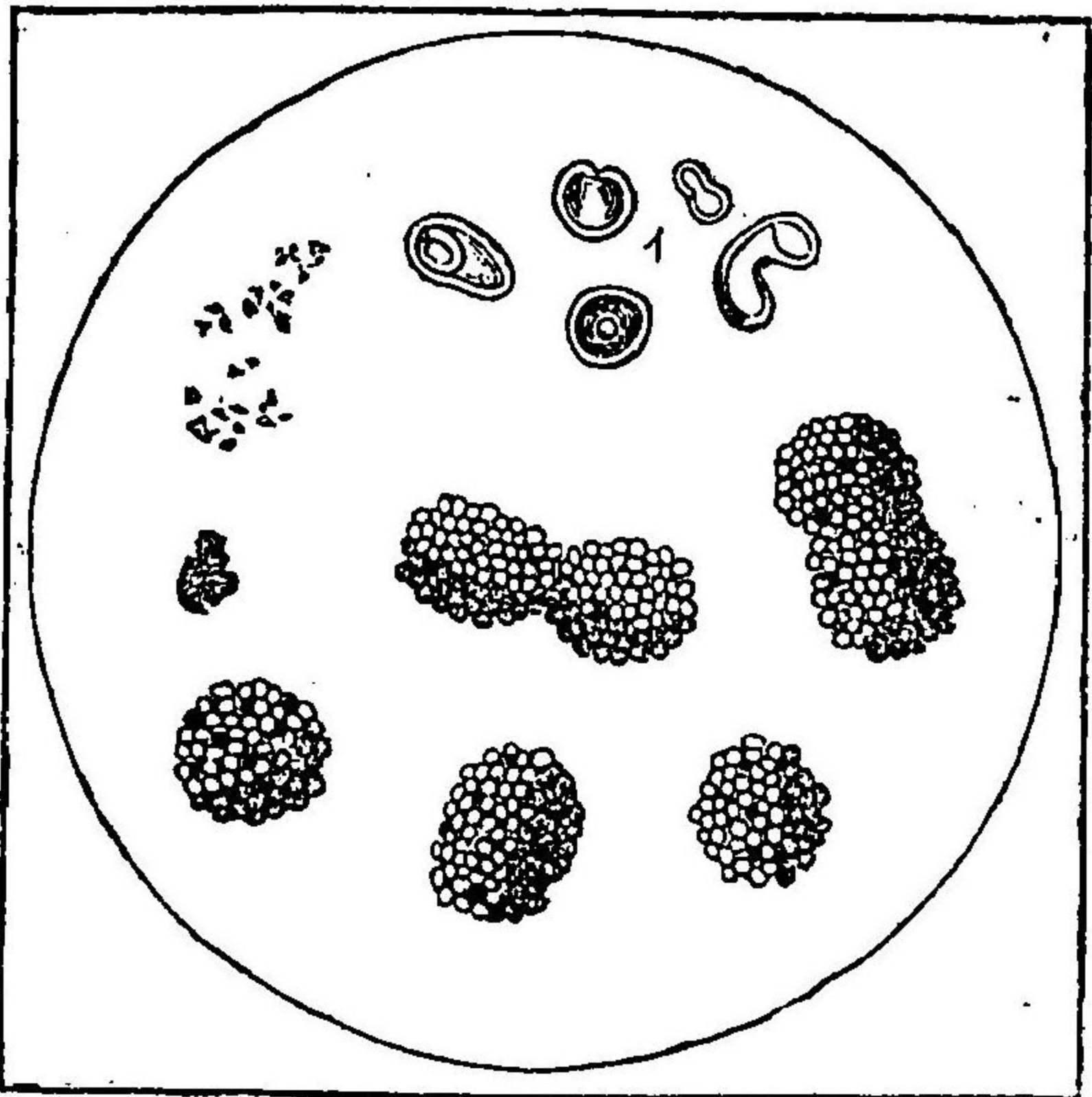
ニシテ往々其色素暫時ノ後上皮内ニ於テ顆粒狀トナリ從テ上皮饒多ノ褐色素ヲ以テ充タサル、ニ至ルコアリ而シテ其一部ハ無形顆粒一部ハ細桿狀又一部ハ方形ノ小板ヲナス此發現ハ屢見ルモノニアラサレモ出血性梗塞ニ於テハ殊ニ特有ナルカ如シ
 結晶セル血色素ヲ有スル肺胞上皮ハ吸入セル鐵粉ノ沈着ニ由リテ同様ノ觀ヲ呈スルモノト誤ラサルヲ要ス「ツェンケル」氏ハ始テ此實驗ヲ記載セル人ニシテ此般ノ肺實質變化ヲ鐵工肺患 *Siderosis s. Pneumonosis siderotica*. ト名ケタリ然レモ是レ既往症ノ他顯微鏡的化學ノ反應ヲ以テスルキハ其疾病ニアラサルヲ知ルヘシ即チ鐵ハ硫酸安母尼亞ヲ加フルニ黒綠色トナリ黃色血滲鹽及鹽酸ヲ加フレハ青色ニ變ス肺胞ノ上皮ハ咯痰中常ニ之ヲ見ルモノニアラサルハ素ヨリ論ヲ俟タヌ又之ニ反シ獨リ病體ニ於テ現ハル、ノミナラス健體ニ於テモ三十歳以上

ノ人ニ在テハ其痰中之ヲ雜ユルコアリ是レ上皮時々生理的ノ剝脱ヲ起スニ由ルナリ但其甚タ許多ナルキハ上皮ノ劇甚ナル剝離ニ關係アル肺實質ノ刺戟状態ニ由ルモノトセサルヲ得ス然レモ其状態ノ如何ヲ問ハス豫後上之ニ重キヲ置クハ宜シク避ケサルヘカラス何トナレハ肺實質諸般ノ急性炎症ニ於テハ一時痰中頗ル饒多ノ上皮ヲ混スルコアリハナリ而シテ甚タ著明ナル肺胞上皮ノ剝離殊ニ其慢性ナルモノハ結核性肺患ノ初期ニ見ハル、コト稀ナラス
 痰中ノ類敗セル肺胞上皮ハ往々不全或ハ全成セル脂肪變性ヲ呈スルコアリ而シテ上記ノ脱皮性肺炎ニ於テハ痰中脂化セル上皮ヲ混スルハ甚タ固有トス又急性肺炎ノ初期ニ於テモ通常脂化セル肺胞上皮一時多量ニ現ハル、ヲ見ル而シテ脂化ノ初期ニ於テハ微細ナル脂肪顆粒或ハ全細胞内ニ滲蔓シ或ハ細胞ノ周縁ニ堆積シ多少廣縁ヲナス其高度

ノモノニ至テハ箇々ノ脂肪顆粒増大シ全細胞ヲ充タシ其核ヲ隱蔽ス
 (第八十四圖)又脂肪顆粒間ニ黑色素ノ散在スルヲ往々之アリ其他細胞
 ハ通常脂肪變性ニ由リテ其大サヲ増加スルモノトス
 細胞脂化スルキハ其凝收性ヲ失フハ理ノ靚易キ所ナリ是ヲ以テ痰中
 一部ハ其形狀ヲ保存シ一部ハ將ニ溶解セントセル脂化上皮ヨリ成レ
 ル脂肪性ノ分解產物ヲ見ルヲ屢之アリ
 又時トシ痰中ニ於テ脂化セル肺胞上皮ヨリ所謂「ミエリン」體ノ形成セ
 ラル、トアリ其發現ハ「ウヰルヒヨウ」氏ノ始メテ注意セシ所ニシテ或ハ
 圓形若クハ卵圓形ヲナシ或ハ梨子狀ニ延長シ又往々絞約セラレタル
 弱キ光輝性ノ體ヲナシ著明ナル複線ヲ呈ハシ其狀全ク神經髓ノ「ミエ
 リン」滴ニ異ナラス(第八十四圖イ)加之其化學的造構ヨリ之ヲ看ルモ「ミ
 エリン」滴及脂肪ニ近似ス何トナレハ過阿斯密鳥母酸ニ逢フキハ黑色

第八十四圖

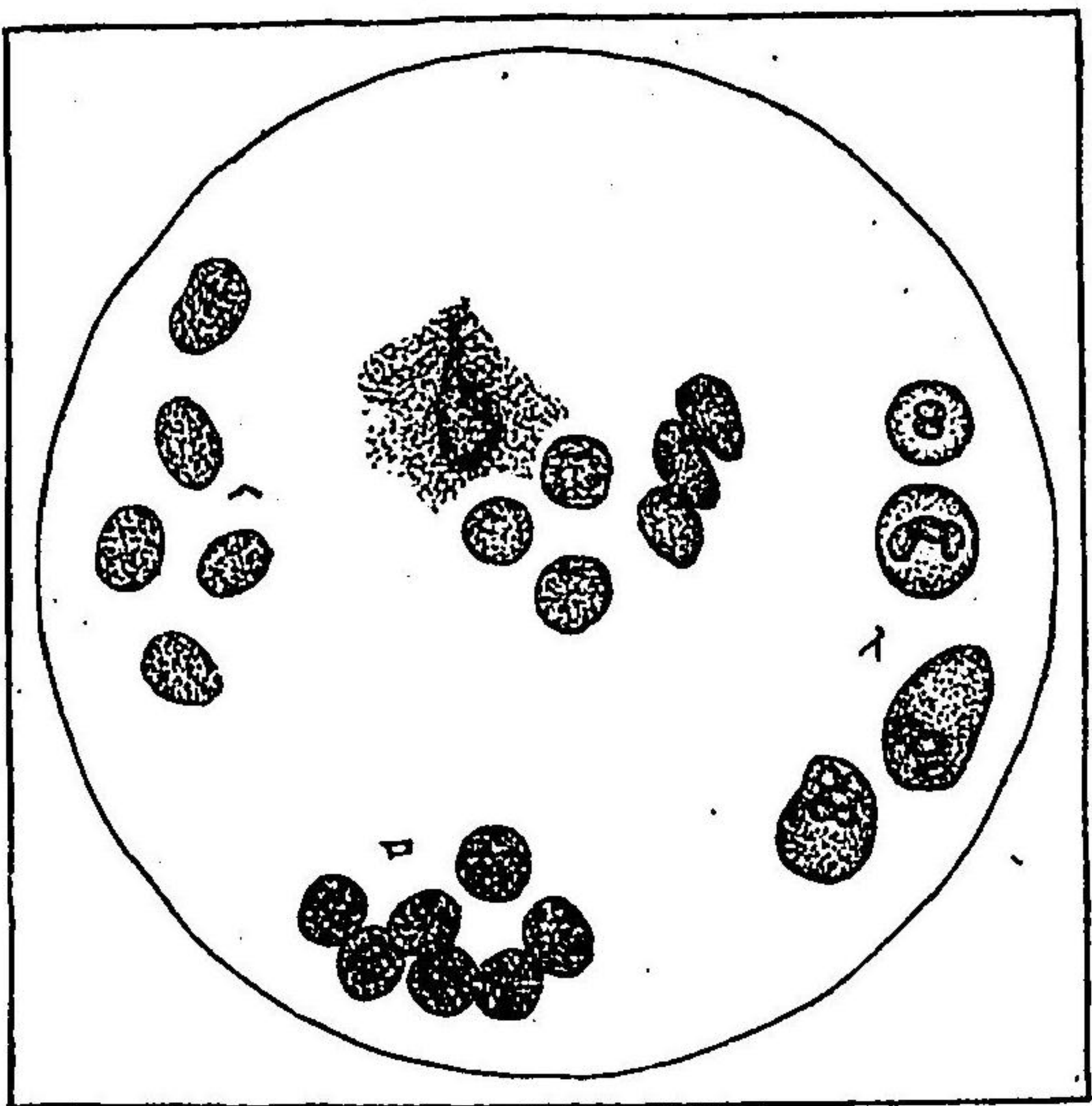
脂化セル肺胞上皮
 「イ」ミエリン體、其左方ニ在リテ
 遊離セル黑色素ハ肺ヨリ來リシ
 ノ、二百七十五倍(余カ實驗)



ヲ呈スレハナリ
 終ニ臨ミ一種ノ腺細胞ヲ記載セン
 トス是レ氣道ノ炎症ニ於テ喉頭、氣
 管及氣管枝ノ粘液膜腺ヨリ脫離シ
 饒多ニ痰中ニ混スル所ノモノニシ
 即チ喉頭ノ磚狀上皮及氣管氣管枝
 ノ圓柱狀上皮是ナリ其大サハ口腔
 上皮ト肺胞上皮トノ中間ニ位ス然
 レモ其根處ハ毎回之ヲ確定シ得ヘ
 カラス

圖五十八第

粘液球及膿球
〔イ〕醋酸ヲ加ヘシモノ
〔ロ〕炭分子ヲ含ムモノ
〔ハ〕脂化細胞
二百七十五倍(余カ實驗)



(ロ) 粘液球及膿球

Schleim-und Eiterkörperchen.

痰中ニハ常ニ小圓形若クハ交互ノ
壓迫ニ由リテ稍扁平トナレル細胞
ヲ見ル其直徑ハ〇、〇〇五乃至〇、〇
一「ミルリメートル」ノ間ニ在リテ全
體ハ細顆粒狀ヲナシ其内部ニハ核
ヲ見サルヲ屢之アリ然レモ顯微鏡
的標本ニ稀醋酸ヲ加フルキハ細胞
少シク膨大シ顆粒ヲ失ヒテ透明ト
ナリ判然核ヲ認メ得ルニ至ル(第八

十五圖(イ)而ノ各細胞ハ多クハ數核ヲ有シ且屢「ビスケット」狀ノ絞窄ヲ
呈シ往々其周圍銳縁ヲ爲シ恰モ膜様ノ觀ヲナス「ア」是レ往時學者
ノ之ヲ以テ眞ノ細胞膜トナセシ所以ナリ此小顆粒狀圓形細胞ヲ名テ
粘液球又膿球ト云フ

痰中膿球ノ數ハ原病ノ性質及其病機増進ノ度ニ從ヒ種々ニ純粘液
痰ニ於テハ其量比較的ニ僅少ニ膿狀ニ近ツクニ從ヒ其數愈増加ス
而ノ膿球甚タ饒多ナルキハ痰該部ニ於テ不透明トナリ綠色膿狀ノ觀
ヲ呈スルヲ以テ既ニ肉眼上之ヲ知ルヲ得ルナリ

往時ハ甚タ複雑ナル外徴ニ據リテ粘液球ト膿球トヲ區別セント
セリ然レトモ已ニ「ヘンレー」氏頻リニ之ヲ分ツノ非ナルヲ唱へ後
「フリーレル」氏及殊ニ「コンハイム」氏ノ發見世ニ出ツルニ及ヒ兩球ハ
畢竟遊走セル白血球ニ外ナラスノ其形狀ノ差異ハ實際存在スル

モノニアラサルヲ知ルニ至レリ
 屢粘液球及膿球ニ第二期性ノ變化ヲ認ムルヲアリ即チ甚シク水分ニ
 富ムカ或ハ久時大氣中ニ放置セル痰中ニ於テハ細胞往々光輝アル空
 隙ヲ作り其大サ細胞腔ノ大部分ヲ占ムルヲアリ又脂肪變性ハ粘液球
 ニ於テ屢見ル所ニシテ全細胞脂肪細胞ニ變スルヲ往々之アリ又塵埃多
 キ大氣中ニ棲息セル患者ニ於テハ氣道ノ最深部ニ竄入セル異物アメ
 ハ運動ヲ有スル粘液及膿球ノ攝取スル所トナリ是ト共ニ咯出セラル
 ルヲ稀ナラス而シテ細胞内塵埃ノ性質ハ狀態ニ從ヒ同シカラスノ或ハ
 微細ナル炭粉ノ顆粒ナルヲアリ(第八十五圖(ロ)或ハ赭黃色ナル鐵粉ノ
 分子ナルヲアリ又時トシテハ「ウルトラマリン」等ノ青キ色素顆粒ヲ含有
 シ又往々粘液球及膿球ノ萎縮ヲ起スヲアリ殊ニ腐敗痰中ニ屢之ヲ見
 ル其際細胞ハ縮少シ小多角形ニシテ僅ニ顆粒狀ヲナセル細胞塊ニ變ス

時トシテ細胞溶崩シテ顆粒狀ノ分解産物トナリ唯核ノミヲ殘スヲアリ

(ハ) 赤血球

Rothe Blutkörperchen.

略痰ハ顯微鏡ヲ以テ精密ニ之ヲ檢索スルハ其中ニ箇々ノ赤血球ヲ
 見サルヲアル蓋稀ナリ是レ滲透機ニ由リテ血管ヨリ滲出シ痰ニ混セ
 シモノナルヤ明カナリ故ニ痰中ニ於ケル赤血球ハ唯其饒多ナルハ豫
 後上并ニ診斷上要用ナリトス而シテ其量ハ非常ニ變化アルモノニシテ純
 粹ナル血痰ニ於テハ赤血球獨リ痰中ノ細胞成分ヲナス
 赤血球ノ顯微鏡的診斷ハ其色及形狀ノ特異ナルニ由リ容易ナリ而シ
 此兩性ハ痰中ニ於テ久時存在スルヲ常トス是レ痰ノ鹽分ヲ含ムヤ通
 常其量血漿ト大差ナケレハナリ然レモ痰中ノ赤血球ハ其面ヲ以テ互

ニ粘着シテ縞錢狀柱ヲ爲ス。殆ト之ナシ是レ既ニ往時實驗家ノ奇トセシ所ナリ而シテ通常或ハ散在シ或ハ攢簇シ其縁ヲ以テ互ニ觸接シ屢相互ノ壓迫ニ由テ壓扁セラレ隅角ヲ形成スルニ至ル但純血痰中ニ在テハ赤血球柱狀ニ重疊スルヲアルハ敢テ恠ムニ足ラストス蓋赤血球ノ痰中ニ於テ縞錢狀ヲ爲サ、ルノ理ハ往時學者ノ屢論争セル所ナリト雖モ赤血球ノ血液中ニ在テ縞錢狀ヲナズノ原因發見セラレサル間ハ其辯論寧ロ早計タルヲ免レサルカ如シ

許多ノ狀態就中稀液狀ニシテ水分ニ富メル痰中ニ在テハ赤血球其複凹形ヲ失シ却テ膨脹ニ由リテ複凸形或ハレンス狀形稀ニハ球形ニ變シ同時ニ其直徑短小トナル是レ學理上容易ニ解シ得ル所ナリ稀ニハ球形トナレル赤血球細小ニシテ稍結節狀ヲナセル許多ノ突起ヲ生シ爲メニ赤血球所謂曼陀羅華形、桑實形若クハ明星形ヲ得ルニ至ル若シ赤血

球ノ膨脹十分ナラサル片ハ往々其内部ニ一二ノ細小ニシテ光輝アル點ヲ現ハシ恰モ該部穿孔セルカ如キノ看チナス

時トシテ血色素赤血球ヲ謝スルヲアリ然ル片ハ血球無色ニシテ且屢視野ノ境界部ニ於テ一扁圓形ノ體ニ變ス又久時肺胞内ニ停滯セル漏血内ニ於テハ血球直ニ頽壞スルヲアルカ如シ

(二) 微菌 *Phae.*

痰中微菌ノ現出ハ狀況ニ從ヒ其關係等シカラス何トナレハ屢其存在ハ全ク偶然ニ屬シ略出ノ際若クハ其後ニ痰中ニ混セシニ過キサルトアルモ亦之ニ反シ其原因上ノ關係甚タ重大ナルヲアレハナリ

略痰ノ微菌中最モ重要ナルハ結核、パチルレンニシテ一千八百八十一年

「コッホ」氏始テ其結核毒ノ運搬者ナルコトヲ認知セリ此微菌ハ疾患ノ初期ニ既ニ痰中ニ存在スルカ故ニ診斷上甚タ樞要ナリトス加之後來往々肺癆ヲ誘發スル血痰中ニ於テ已ニ之ヲ證明スルヲ得タリ蓋肺癆ノ痰中結核「バチルレン」連綿缺如スル「アール」ハ極メテ稀有ニシテ其之ヲ缺ク「アール」ハ病機ノ殊異ナルニアラスノ只偶結核性病竈ノ成分痰中ニ混シ能ハサルカ故ナリ

結核「バチルレン」ハ鉛直或ハ稍彎曲セル小桿ニシテ其長サハ赤血球直徑ノ半ハニ等シク「 $0.5 \sim 1.5$ 」乃至「 $0.3 \sim 0.5$ 」ミルリ「 $1 \sim 2$ 」ミルリノ間ニ在リ其數及聚落ハ一樣ナラスノ或ハ殆ト平等ニ散在シ或ハ攪糝シ(第八十六圖)又屢其内ニ無色ノ顆粒ヲ認ムル「アール」然レモ決ノ常ニ存在スルモノニアラス是レ蓋毫モ色素ヲ攝取セサル芽胞ニ他ナラサルヘシ

結核「バチルレン」ヲ檢スルニハ左ノ法ヲ以テスルヲ稱用ス即チ先

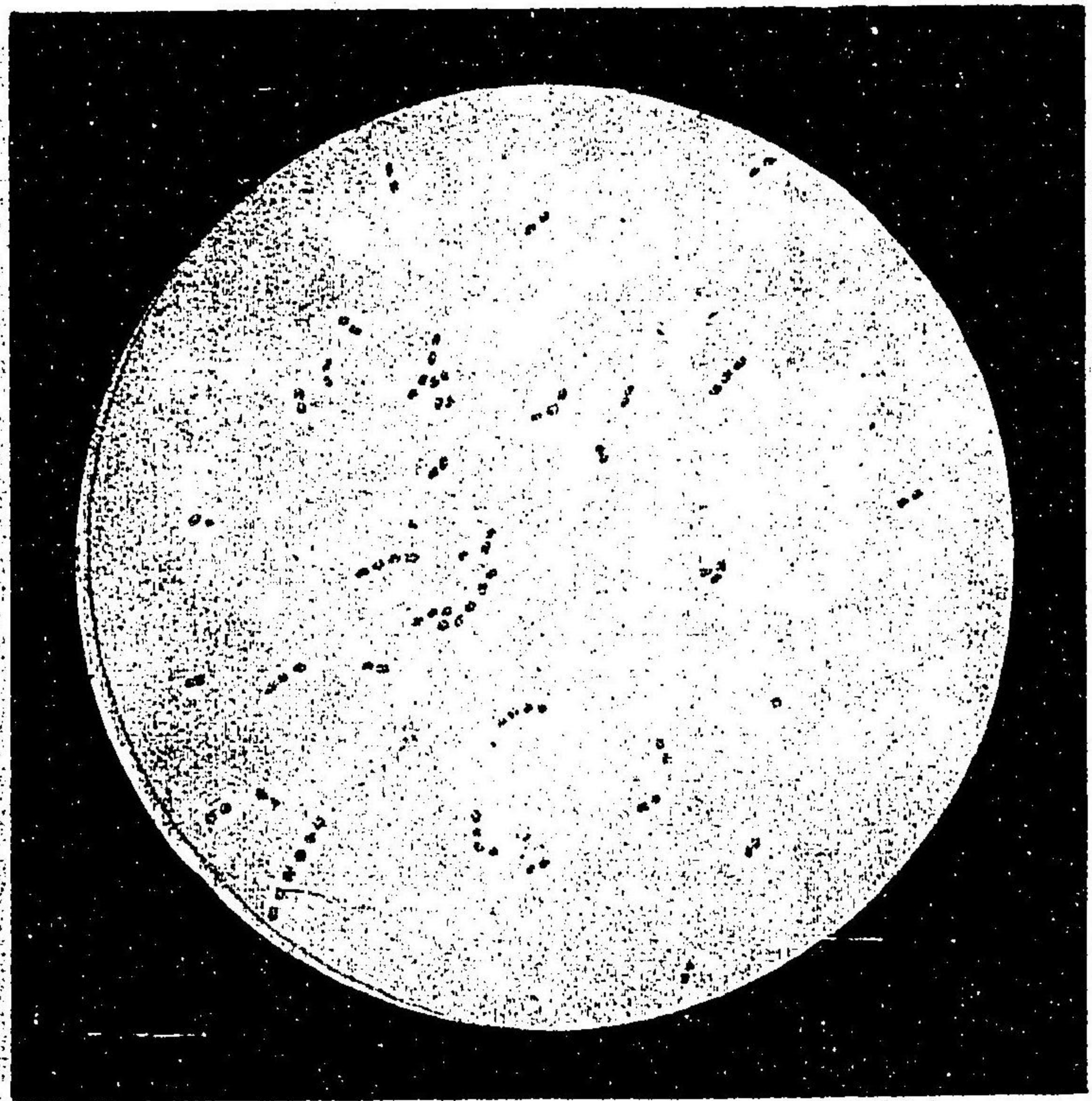
圖六十八第

芽胞ヲ有スル結核「バチルレン」
「フタシン」ニテ着色シ「マラヒート」ヲ以テ復色セルモノ、油浸法
七百三十倍
(余カ實驗)



圖七十八第

慢性肺炎患者ノ痰ヨリ得タルコト
ノイロニコック
ン、グラーム氏
法ニ據ル、油浸法
七百三十倍
(余カ實驗)



ツ略痰ヨリ帽針頭大ノ小部分ヲ撮取シ清淨ナル覆硝子板上ニ展
布シ他ノ覆硝子ヲ以テ之ヲ覆ヒ兩者ヲ互ニ壓平シ以テ略痰ヲ
可及的薄層ヲ爲サシメ次テ兩覆蓋硝子ヲ互ニ離隔スヘシ今各覆
蓋硝子ヲ拇指及示指間ニ保持シ痰ノ付着面ヲ上方ニ向テ速カニ
亞爾箇保兒或ハ瓦斯炎火中ヲ通過セシメ痰層ノ乾燥スルニ至リ
テ止ム是ニ於テ純即チ水明ノ亞尼林油ヲ試験管ノ底部ニ充テ更
ニ管ノ四分三部ニ至ル迄蒸餾水ヲ追加シ拇指ヲ以テ管口ヲ鎖シ
凡ソ半分時間之ヲ振盪シ次テ此混合物ヲ時辰硝子内ニ濾瀉シ其
濾液ニ五乃至十滴ノ濃亞爾箇保兒性フクシン溶液ヲ加フヘシ而
シ今兩覆硝子ヲ取り痰層面ヲ下向セシメ此色素溶液上ニ浮カヘ
二十四時間之ヲ放置シ次テフクシン溶液中ヨリ撮出シ二滴ノ純
藥用硝酸ヲ滴加シタル純亞爾箇保兒ヲ盛レル他ノ時辰硝子ニ移

シ其紅色ノ消褪スルニ及ヒ之ヲ水中ニ洗滌シ更ニ一分時間マラ
 ヒート溶液中ニ投シ再ヒ水ヲ以テ色素ヲ洗ヒ去リ之ヲ乾燥セシ
 ム是ニ於テ一滴ノキシロールカナダバルサムヲ物體硝子上ニ滴
 シ覆硝子ノ痰層面ヲ下向セシメ其上ニ置クヘシ熟練ノ者ニ在テ
 ハ既ニ三百倍ノ擴大力ニ容易ク綠色ノ細胞原質間ニ紅色ノ小
 桿ヲ認ムヘシ

リンドフライシエ氏ハ其時間ヲ短縮センカ爲メ覆硝子ヲ浮ヘル
 フクシン溶液ヲ亞爾個保兒炎火上ニ熱シ泡沫ノ昇騰スルニ至リ
 次テ十分時間之ヲ放置スルノ法ヲ行ヘリ

フリードレンデル氏ハブノイモコツケンナル名稱ヲ以テ一種特異ナ
 ル分裂菌ヲ記載セリ是レ纖維素性肺炎ノ紅色變肝期ニ於テ其痰中ニ見
 ルモノニ帶圓卵圓形ヲナシテ光輝アル膠様膜ヲ被リ多クハ二乃至

四個及尙以上相連接シテ總膜中ニ包裹セラル此コツケンノ原因的關
 係ニ就テハ其說未タ一定セス然レモフレンケル氏次テ殊ニワイヒゼ
 ルパウム氏ノ檢索ニ據リ今日ニ於テハ世人フリードレンデル氏ノブ
 ノイモコツケンハ纖維素性肺炎ノ發生ニ全ク關係アルモノニアラスノ
 是カ固有ノ原因ト見做スヘキハランセツト様ノ形狀ヲ有シ健康ナル
 人ノ唾液中ニモ亦之ヲ見ル所ノ被膜コツケンナルノ說ニ傾ケルカ如
 シ而シテ此コツケンハグラーム氏ノ法ニ從ヒ之ヲ處スルニフリードレ
 ンデル氏ノブノイモコツケンニ反シケンチアナ、グ、非オレツトヲ保容
 スルノ性アリ第八十七圖ニ掲ケシハフレンケル氏ブノイモニーコツ
 ケン又所謂敗血痰ノコツケンナリトス然レモ此コツケン痰中ニ現出
 スルモ診斷上價値アルモノニアラス何トナレハ既ニ記載セルカ如ク
 健體ノ口腔内ニモ存在シ從テ爾他疾患ノ痰中ニモ亦之ヲ見レハナリ

「ブノイモコツケン」及「ブノイモニーコツケン」ヲ檢スルハ其法敢テ難カラス即チ先ツ結核、バチルレンニ於ルカ如ク喀痰ヲ覆硝子ニ展布シ乾燥スルヲ待テ痰層面ヲ下向セシメ五乃至十分間「ゲンチアナ、ザ井オレット」溶液ヲ滴加シタル「亞尼林水上」ニ浮ハシム次テ「グラーム」氏ノ法ニ從ヒ沃度沃度加里溶液ヲ以テ之ヲ處シ水中ニテ善ク洗滌シ乾燥スル後「キシロール、カナダバルサム」上ニ置クヘシ之ヲ檢スルニハ油浸裝置ヲ以テスルヲ最モ可トス而シテ若シ此被膜「コツケン」「ゲンチアナ、ザ井オレット」ヲ失フハ「フリードレンデル」氏ノ「ブノイモコツケン」ニシテ然ラサルモノハ「フレンケル」氏ノ「ブノイモニーコツケン」トス

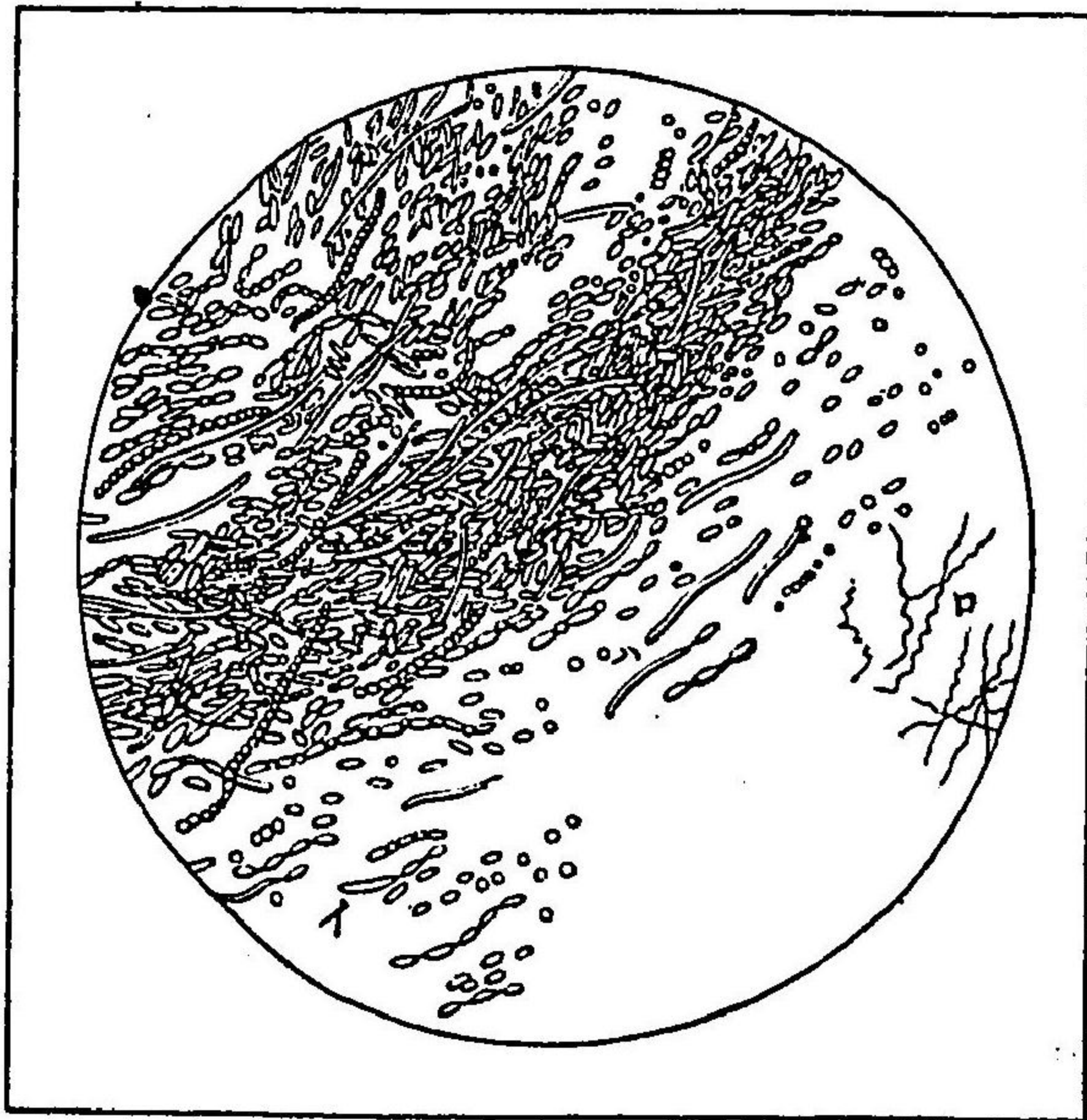
嘗テ「トラウベ」氏ハ肺壞疽及腐敗性氣管枝炎ニ於テ見ル腐敗痰ハ下等機生體ノ作用ニ由テ成ルモノタルヲ唱ヘリ後「ヤッフエ」及「ライデン」氏

ハ十分ナル檢索ニ由テ此説ヲ支持セントセリ而シテ「氏等」ハ此疾患ニ於ケル痰中常ニ存在スル栓子ヲ強キ擴大力ヲ以テ檢セシニ外見上顆粒狀ヲナセル分解産物ハ短小ニシテ屢關節ヲ有スル纖維系及活潑ナル運動ヲ呈スル小桿ニ他ナラスノ其形狀頗ル「レプトトリツキス」「ブッカリス」ノ微細ナル菌糸ニ類似セルヲ證スルヲ得タリ故ニ「ヤッフエ」及「ライデン」ノ「兩氏」ハ之ヲ「レプトトリツキス」「ブルモナーリス」ト名ケタリ其他又往々鏈鎖狀ヲナセル微細ナル芽胞饒多痰中ニ存スルヲ見ル「アリア」第八十八圖而シテ此分裂菌ノ殊ニ特異ナルハ沃度反應ニシテ即チ沃度丁幾ヲ加フルハ纖維及芽胞ノ内容ハ帶褐黃色、紫青色若クハ美紅紫色加之青色ヲ呈ハス

「レプトトリツキス」ノ他ニ螺旋狀ニ蠕動スル螺旋菌「スピロヘーター」及「鰻」狀ノ小體アリ「第八十八圖（ロ）及（ハ）」「ボノメ」氏ハ「輓近」亦「スタフ井

圖八十八第

〔イ〕レプトトリキス、
 プルモナリス
 〔ロ〕螺旋菌
 〔ハ〕鏡狀體ニシテ肺壞
 疽ニ於ル菌性氣
 管枝栓子ヨリ得
 タルモノ
 水浸法、七百五十倍
 (余カ實驗)



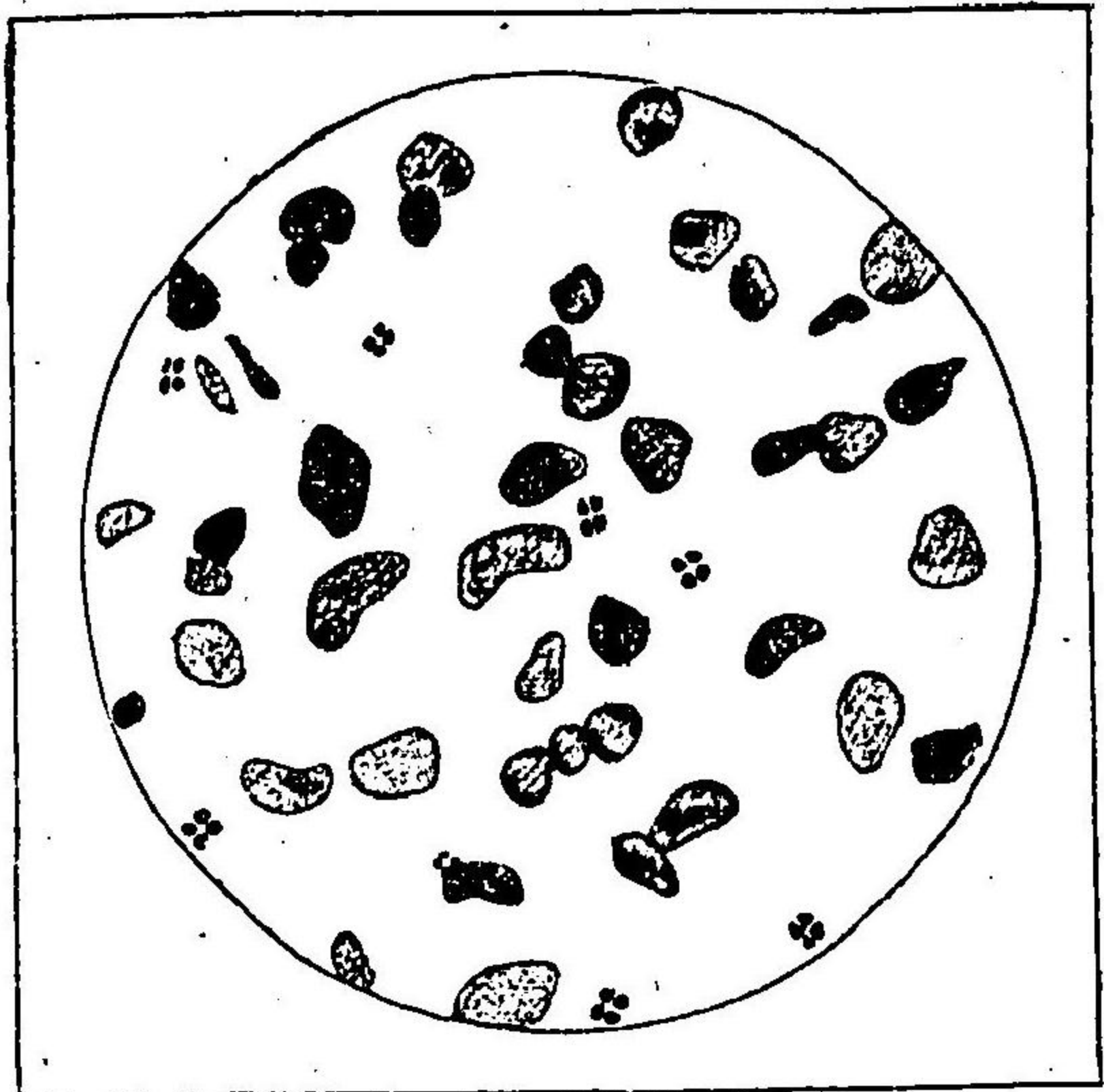
ロコツクス、ピオゲテス、アルブス及スタフネロコツクス、ピヲゲテス、ア
 ウレウスヲ證明セリ

ライデン氏ハ肺膿瘍ノ痰中ニモ分裂菌ヲ發見セリ即チ略出セル
 肺壞疽片中ニ存在シ茲ニ殆ト同大ナル數箇ノ「ミッコッケン」聚
 落ヲ呈ハセリ然レモ腐敗痰ノ分裂菌ト異ニシテ全ク運動セサルカ
 或ハ只僅ニ固有運動ヲ呈スルニ過キスノ試ニ之ニ沃度丁幾ヲ加
 フルニレプトトリツキス、プルモナリスニ於テ見ル所ノ特異ナ
 ル反應ヲ見サリシト云フ

ザルシナハ「ウヰルヒヨウ」氏ノ始テ肺ノ病竈ニ於テ實驗セルモノニシテ
 次テ諸家屢之ヲ記述セリ第(八十九圖)之ヲ名ケテ「アノイモノ」ミッコ
 ジス、ザルシニカト稱ス近世「フヰツシエル」氏ハ此狀態ハ敢テ稀有ナルモ
 ノニアラスノ例之氣管枝炎、氣管枝擴張、腐敗性氣管枝炎、肺壞疽、肺炎及

第九十八圖

肺癆痰中ノ「ザルシナ」
水浸法、七百五十倍
(余カ實驗)



肺癆ノ如キ諸症ニ於テモ之ヲ見ル
「アル」ヲ示セリ是ニ由テ之ヲ看レ
ハ痰中「ザルシナ」ノ存在ハ全ク偶然
ニ病床上敢テ重キヲ置クニ足ラ
サルナリ而シテ此菌ハ無色ニシテ胃「ザ
ルシナ」ニ均シク其是ト異ナルハ唯
僅ニ小ナルニ在リ(〇、〇〇三三乃至
〇、〇〇一七「ミルリメーテル」而シテ其
集積シテ四箇或ハ十六箇ヲ爲スノ
傾向アル尙ホ自他ノ部分コ於テ見
ルモノニ異ナラス「ハイメ」氏ハ肺
癆ニ於テ「ザルシナ」ノ膿球内ニ竄入

セシヲ記載セリ

「ザルシナ」ハ須ラク「ミクロコックス」ト誤ラサルヲ要
ス是レ種々ナル疾患例之肺癆、肺壞疽、肺炎等ノ痰中往々見ルモノ
ニ亦病床上緊要ナルモノニアラス其形狀ハ同一ニシテ多クハ
四箇相集リテ一膠質様ノ莢膜ヲ被ル

時トシテ肺癆、肺壞疽、出血性肺硬塞及肺腫瘍患者ノ肺中ニ絲狀菌シシムセルツヲ發見
スルコトアリ「フエールブリンゲル」「ライデン」「ロート」氏等ノ實驗ニ據レ
ハ既ニ生活間ニ於テモ略出セラル、ト云フ而シテ「ライデン」及「ロート」氏
ノ實驗ニ於テハ此菌綠色ニシテ石綿様ノ光澤アル小球ヲナセリト又「フ
ユールブリンゲル」氏ハ氏ノ扱ヘル患者ノ痰中ニ「アスベルギルス」ノ密
ニ錯綜セル菌塊、芽胞、廣濶ナル輸粉器ノ塊片并ニ成熟ノ諸徴候ヲ具ヘ
タル種子ヲ發見セリ「ブノイモノ」ミコージス、アスベルギリナ)其他同氏

ハ他ノ二人ノ患者ニ於テ「アノイモノミコーシス、ムコリナ」ノ存スルヲ見タリト云フ

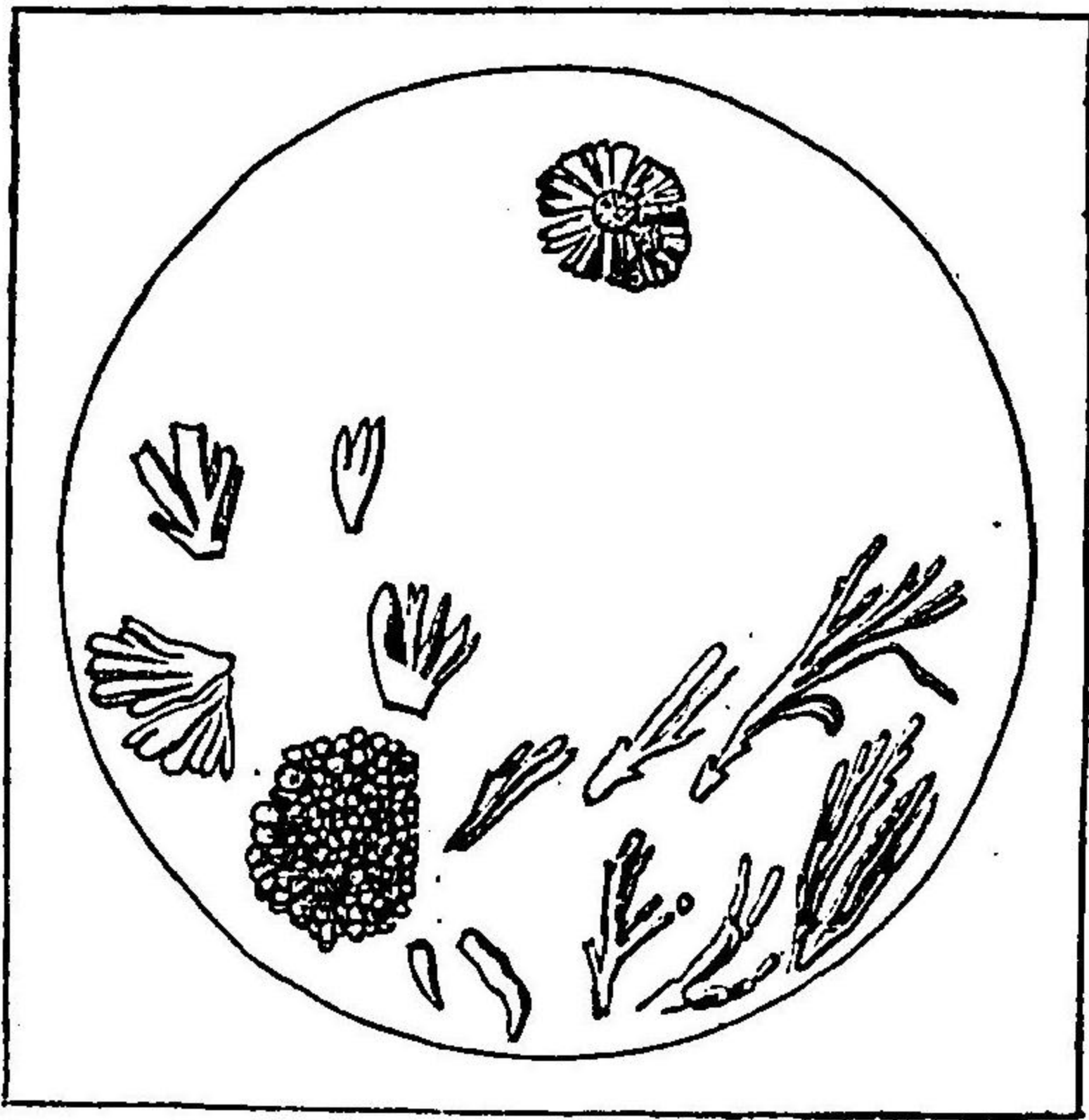
數多ノ植物學者カ絲狀菌中ニ屬セシムル放線狀菌即チ「アクチノミーゼス」モ亦氣道ニ沈着シ以テ分解作用、浸潤及腔洞現象ヲ喚起スルヲアリ此「ピルツ」ヲ有スル者ニ於テハ痰中ニ綠色ノ土樣顆粒ヲ發見ス試ニ物體硝子上ニ於テ之ヲ破碎スルキハ特異ナル萌芽様ノ體ヲ現ハス（第九十圖）但人類ニ於テハ稀ニ見ル所ナリ

痰中ニ絲狀菌ノ他時トシテ粉狀菌ヲ存スルヲアリ例之「ローゼンステル」氏ハ一少女氣道内ニ竄入セル鵝口瘡菌即チ「オイヂユム、アルピカン」スニ由リテ發セシ腐敗性氣管枝炎ニ惱メルヲ診察セリト云フ此菌ハ卵圓形ノ芽胞ニシテ肢節及分岐セル纖絲ヲ有ス

痰ノ「ピルツ」中其存在偶然ニシテ病床上緊要ナラサルハ色素「バクテリヤ」

第九十圖

「アクチノミーゼス」粒ノ原質
三百五十八倍
（「マルカンド」氏ニ由ル）



ニシテ略痰後暫時ニシテ痰ノ表層ヲ黃色若クハ綠色ナラシム輒近余カ助手「ドクトル、フリツク」氏ハ「チューリヒ」クリニツクニ於テ綠色痰ノ色素「バクテリヤ」ヲ精密ニ檢究シ一定ノ生物學上ノ特性ヲ有スル「バチルス」ナルヲ確カメタリ又時トシテ口腔内若クハ後鼻腔ニ於テ偶然痰中ニ「ピルツ」例之「レプトトリツキス」ザルシナ「或ハ、オイヂユム、アルピカン」スヲ混スルヲアリ殊ニ患者衰弱シ且口腔ノ不潔ナルカ爲メ口蓋及口

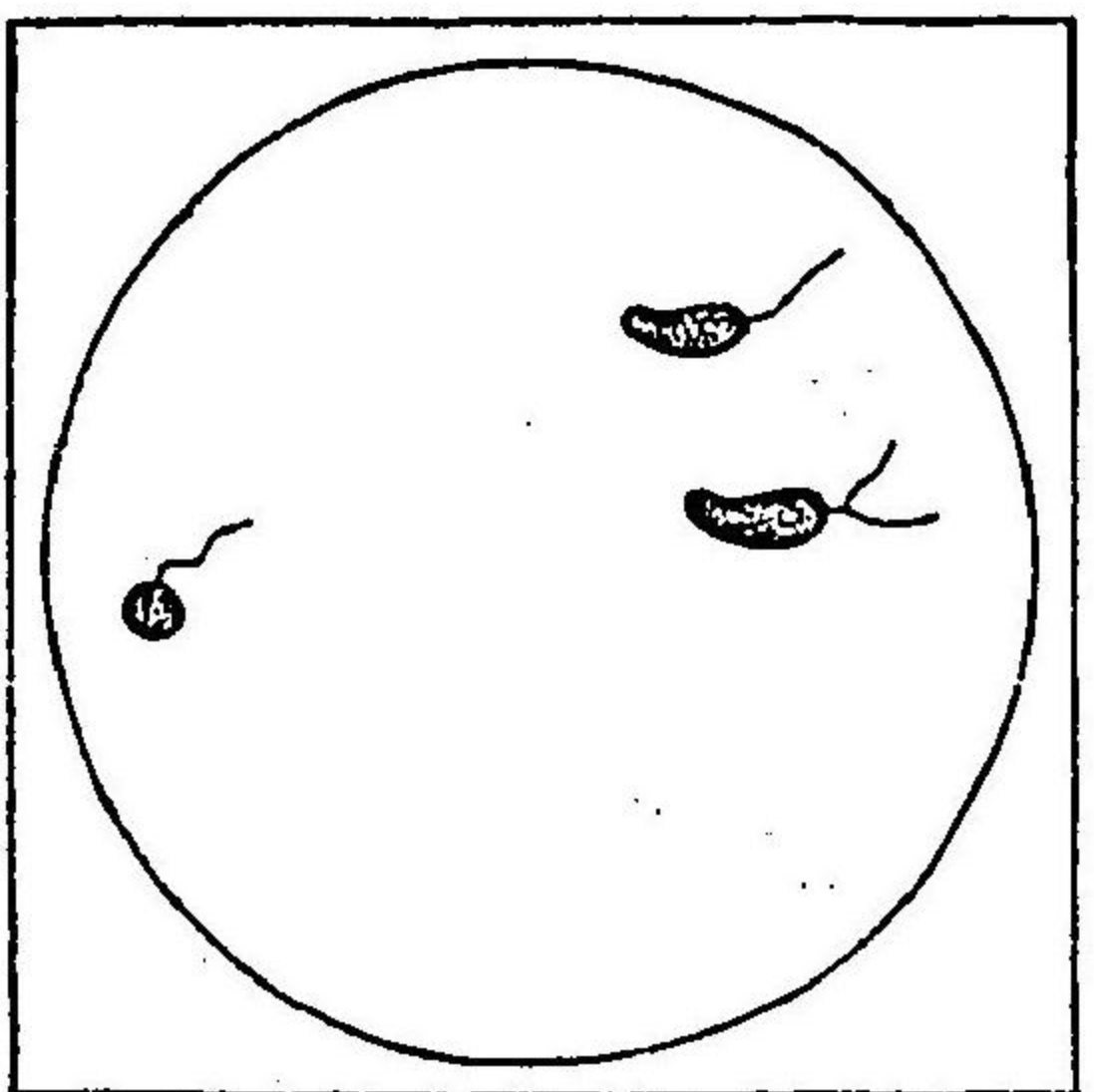
内ニ加答兒ヲ發セルモノニ然リトス

(ホ) 滴蟲 *Infusorien.*

「カンチンベルヒ氏ハ、ライデン氏ノ「クリニツク」ニ於テ肺壞疽ノ痰中ニ二種ノ滴蟲ヲ發見セリ曰ク「モナス、レンス」曰ク「ゼルコモナス」是ナリ「モナス、レンス」第九十一圖左ハ蒼色ニシテ其形球狀ヲナシ赤血球ニ比スレハ稍小ニシテ鞭狀ニ振動スル頭毛ヲ有シ之ニ反シ「ゼルコモナス」第九十一圖右ハ淋巴球ヨリ少シク大ニシテ亦叉狀ニ分岐セル頭毛ヲ備ヘ後端ニ一小突起ヲ有ス是レ他ニ附着スルノ用ヲナスモノナリ抑モ這般ノ滴蟲ハ腐敗痰ノ氣管枝栓子中ニ集簇シ其運動ハ暫時ニシテ甚微シニ十四時間後ニ於テハ「メチールウヰオレット」ヲ以テ染ムルニアラサル

第十九圖

肺壞疽痰中ノ滴蟲左方ニ在ルハ「モナス、レンス」ニシテ右方ニ在ルハ「ゼルコモナス」ナリ（「カンチンベルヒ」氏ニ由ル）



ヨリハ概ノ之ヲ看ルヲ得ス何トナレハ之ヲ白血球ヨリ區別スルヲ得サレハナリ而シテ此小體ノ口腔分泌物中ニ缺加スルヲ以テ見レハ吸入氣ト共ニ氣道内ニ達スルモノ、如シ是ヲ以テ「カンチンベルヒ」氏ハ「レプトトリツキス、プルモナリス」ト共ニ壞疽作用ニ原因的ノ關係アルモノトセリ

「軌近」ストークウヰス「氏」ハ一患者ニ於テ其痰中ニ「バラメヂエー」ム及「バランチエー」ムヲ發見

セリ是レ從來獨リ人類ノ腸内ニ於テノミ見シ所ナリ氏ハ其起原ヲ肺膿瘍ニ歸セリ但形狀ニ就テハ後章大便検査ノ條下ヲ参照スヘシ

「ワグネル氏ハ歌私的里患者ノ痰中ニ二回「トリコモナス」ヲギナリ「ス」ニ均シキモノヲ見シト云フ

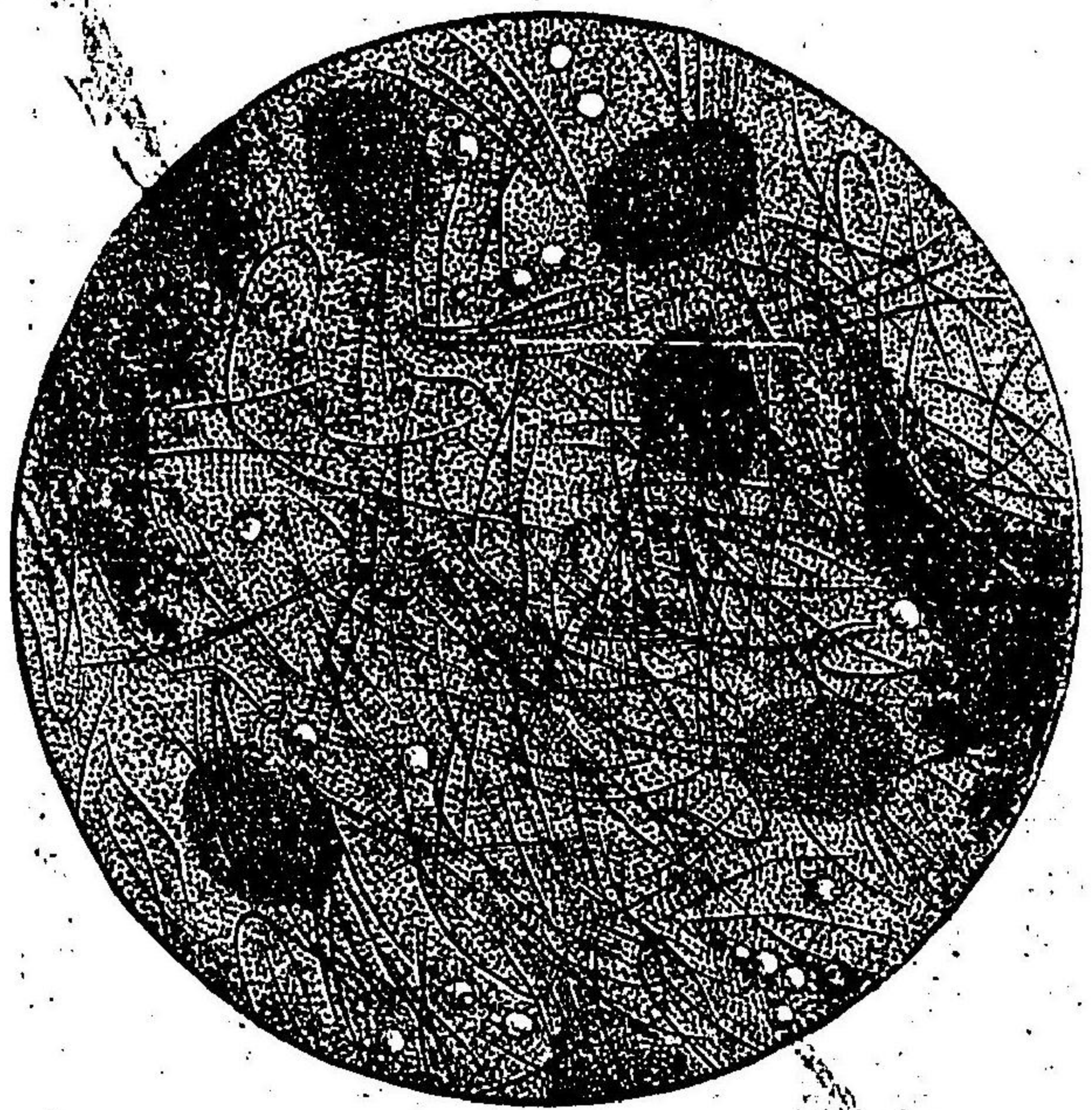
(ハ) 結晶體 *Krystalle.*

結晶體ハ痰中屢現ル、モノニアラスノ診斷上殊異ナル價値ナキモ、ライデン氏ノ検査ニ從ヘハ或ル種類ノ氣管枝喘息ニ於テハ一定ノ結晶ノ發生ハ其原因上大ニ關係アルカ如シ
「マルガリン」酸針ハ「ウヰルヒヨウ」氏ノ始テ發見シ且精細ニ檢究セシ所

ノモノニシテ無色ノ鎗狀及針狀結晶ヲナシ弱キ光輝アリテ或ハ鉛直或ハ頗ル彎曲シ又時トシテ縮毛狀ニ振糾ス(第九十二圖)而シテ或ハ箇々散在シ或ハ攢簇若クハ束狀ニ併列シ又或ハ偶然肺胞狀ニ排列シ頗ル彈力纖維ト誤リ易キ「ア」リ然レニ彈力纖維ハ通常著明ナル複線ヲ呈シ且又狀ニ分歧スル「」稀ナラサルニ由テ容易ニ鑑別スルヲ得ヘシ其他「マルガリン」酸結晶ハ結節狀ノ膨脹部ヲ有シ試ニ覆硝子上ヨリ輕ク壓スル「」ハ頗ル著明ニシ且許多トナル又此脂酸針ハ彈力纖維ニ反シ依的兒、煮沸亞爾爾保兒及久時ノ後ニハ苛性加里中ニモ溶解シ加之單ニ之ヲ熱スルモ鎔融シ易キノ傾キアリ亦以テ兩者ヲ辨別スルニ足ルナリ「痰中」マルガリン「酸結晶」ヲ饒多ニ顯出スルハ常ニ特リ肺壞疽及腐敗性氣管枝炎ノ腐敗痰ニ見ル所ナリ然レニ舌苔、後鼻腔及扁桃腺濾胞ノ分泌物加之他種ノ痰中ニ於テモ亦個々散見スル「」ナキニ非ス但此結晶

圖二十九第

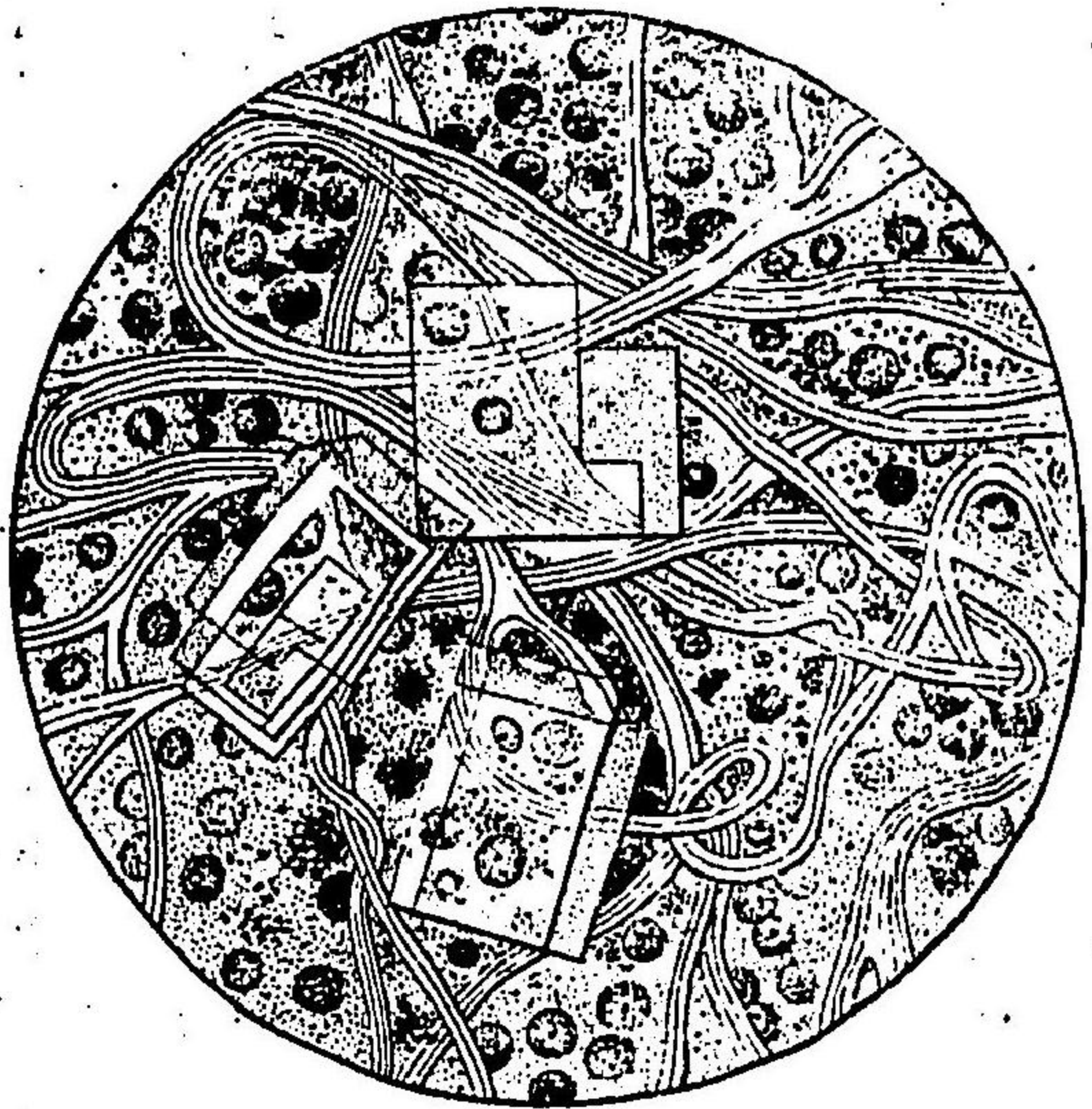
肺膿疽ノ氣管枝
栓子ヨリ採取シ
タル「マルガリ
ン」酸針、三百五
十倍(余カ實驗)



ハ注意シテ之ヲ「レプト、リツキス」織絲ト誤マラサルヲ要ス若シ疑似
決シ難キニ際シテハ上記反應ヲ以テスレハ直ニ釋然タルヘシ
「コレステアリン」結晶ハ「リユチー」氏(一千八百三十九年始テ痰中ニ發見
セシモノニ)又「ピールメル」氏ハ其名著痰論(一千八百五十五年刊行)中
ニ記載セル如ク結核痰ニ於テ二回之ヲ見タリト云フ余ハ數百回ノ顯
微鏡的痰検査中近時始テ肺癆ノ彈力纖維ニ富饒ナル痰中之ヲ見ルヲ
得タリ又「ライデン」氏ハ肺膿瘍ノ痰ニ於テ之ニ遭遇セリト云フ蓋其慢
性ナルモノニ在テハ此結晶ノ存在診斷上價值ナキニアラス今茲ニ揭
クル圖ハ「ライデン」氏ヨリ再寫セシ所ナリ(第九十三圖)然リ而シ「コレス
テアリン」結晶ハ之ヲ鑑別スル難カラス即チ菲薄ニシテ無色ナル斜方形
板ニシテ亞爾簡保兒及依的兒ニ溶解シ易ク水、酸類及亞爾加里中ニハ溶
解セス試ニ之ニ稀硫酸及沃度丁幾ヲ加フレハ順次ニ紫、青、綠、紅、黃及褐

第三十九圖

肺膿瘍ノ痰中ヨリ
採取シタル「コレステ
アリン」結晶
(「ライデン」氏ニ由ル)

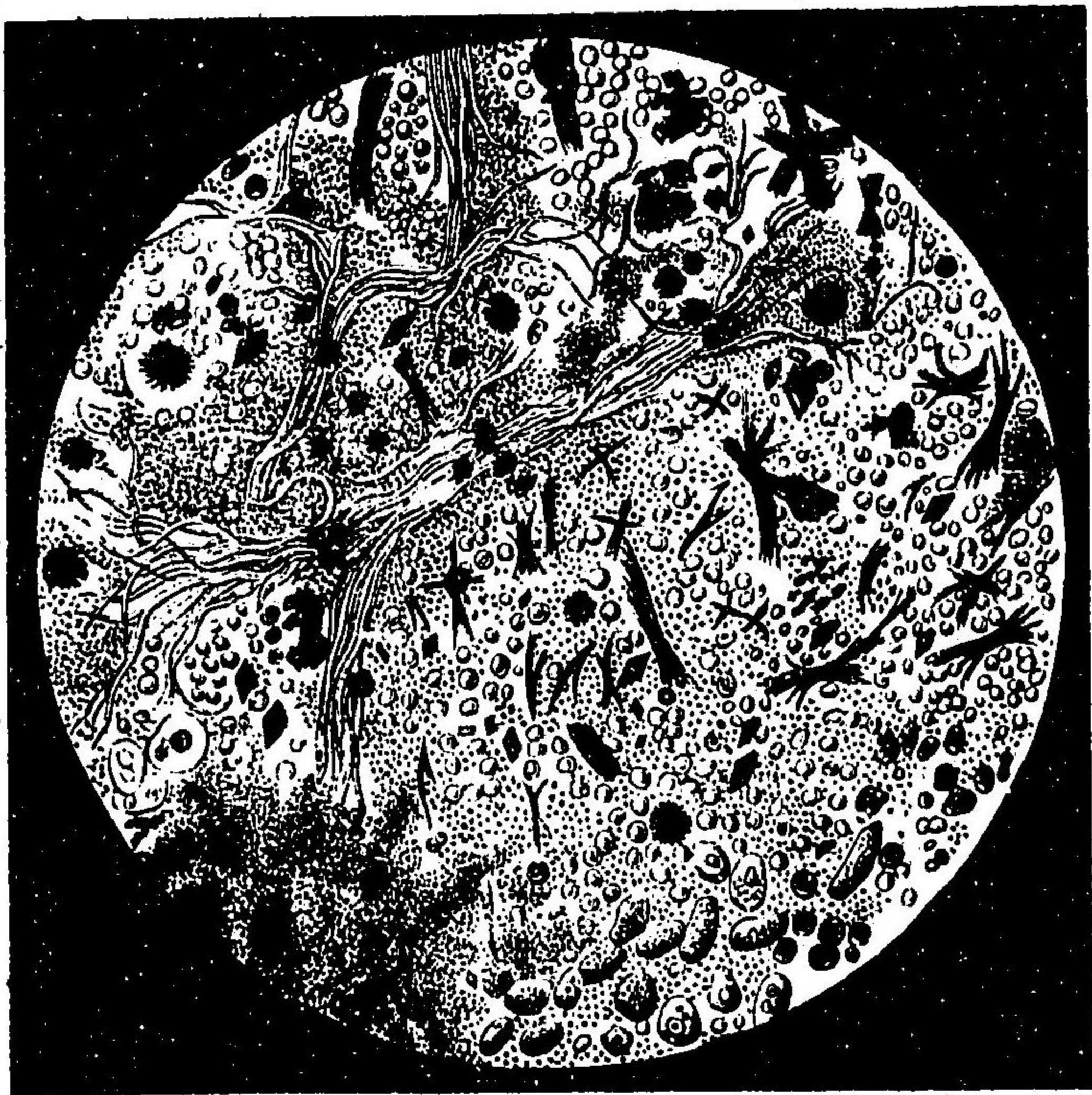


色ヲ呈ハス
若シ肺臟出血シ(屢不明性ノ血液暫
時玆ニ殘留シタルキハ其痰中「ヘマ
トイデン」結晶ヲ認ムヘシ而シテ此結
晶ノ成熟シタルモノハ斜方形板ヲ
現ハシ帶褐紅色若クハ紅褐色ヲ帶
フルヲ以テ容易ニ之ヲ見ルヲ得ヘ
シ又時トシテ「ヘマトイデン」結晶細小
ニシテ鉛直或ハ稍波紋ヲ呈スル針狀
結晶ヲナシ圓形ナル結晶塊ノ如ク
人工薔薇花ノ如ク或ハ又束狀ニ集
積スルヲアリ而シテ結晶ノ長徑及成

熟ノ度ハ大ニ差等アルモノニシテ完全ナル結晶ヨリ漸次ニ無晶形鋪褐
色ノ顆粒ニ移行ス時トシテ血色素單ニ色素塊ノ形狀ヲ爲スヲアリ
學理上ヨリ之ヲ論スレハ「ヘマトイデン」結晶ハ各肺出血後ニ發生スヘ
キノ理ナリト雖モ之ヲ經驗ニ徵スルニ實際ニ於テハ恰モ一定ノ肺患
ニ特ニ饒多ニ現出スルカ如シ即チ「ライデン」氏ノ實驗ニ從ヘハ肺膿瘍
患者ノ痰中殊ニ其多量ヲ見ル(第九十四圖)又出血性硬塞ニ於テモ屢夥
多ニ存在スルヲアリ之ニ反シ肺壞疽及腐敗性氣管枝炎ニ於テハ之ヲ
見ルヲ稀ニシテ假令存在スルモ箇々僅ニ散見スルニ過キス但色素塊ハ
屢現ハル、ヲ見ルナリ「ピールメー」氏ハ嘗テ壞血病患者ノ血痰中亦
之ヲ見シト云フ又肺ニ穿通セル膿胸ノ破潰ニ先チ肋膜腔内ニ出血ア
リシキハ「ヘマチン」體ヲ形成スルモノニシテ已ニ血液ノ肋膜腔内ニ停滯
スル十四日ニシテ血色素ヨリ此結晶ヲ來スニ足ルカ如シ其他尙記載ス

圖四十九第

肺膿瘍ノ痰ニソ彈
力纖維「ヘマトイ
ヤン」結晶及分裂
菌ヲ含有ス
「ライデン」氏ニ
由ル



ヘキハ肝膿瘍ノ肺及氣管枝内ニ破潰セル症是ナリ之ニ在テハ膽色素
（「ビリルビン」）饒多ニ且久時痰中ニ現出スルモノニ其形狀并ニ化學
上共ニ血色素ト區別スルヲ能ハス

「ライデン」氏ハ或ル氣管枝喘息ニ於テ發作時ニ當リ其痰中一種ノ結晶
ヲ發見セリ蓋發作ノ發起ニ原因的關係ヲ有スルカ如シ所謂「シャルコー」
ノイマン」氏結晶又「ライデン」氏喘息結晶 *Ashmolekristalle* 是ナリ此結晶ハ
就中喘息患者ノ粘靱ニシテ粘液ニ富メル痰中見ル所ノ小灰白淡黄色ノ
栓子内ニ於テ饒多攢簇シ其形ハ尖銳ナル複稜錐ニシテ無色且弱キ光輝
アリ大小ハ一定セス又其彈力ハ著シカラスノ試ニ覆硝子上ヲ壓迫ス
ルキハ結晶横折スルヲ稀ナラス（第九十五圖）

此結晶ハ「ライデン」氏前既ニ發見セラレ且記述セラレシモノニ即チ
「ロビン」及「シャルコー」ノ兩氏ハ乾性加答兒ノ痰ニ於テ發見セシト云フ

圖五十九第

氣管枝喘息ニ罹レル
二十五歳兵卒ノ痰ヨ
リ得タル「ライデン」
氏喘息結晶(余カ實
驗)二百七十五倍



又「フォルステル」及「ツエンケル」氏并ニ晩近「ウンガール」氏ハ共ニ氣管枝
加答兒ノ痰中ニ其存在ヲ見タリト又「フリードライヒ」及「ツエンケル」氏
ハ纖維性氣管枝凝塊ニ於テモ亦之ヲ發見セリ而シテ其形狀ハ白血病患
者ノ血液及骨髓骨髓ニハ爾他ノ疾患ニ由テ斃レタル者ニ於テモ之ヲ
見ルニ於テ見ル結晶ニ異ナラス是ニ由テ之ヲ看レハ所謂喘息結晶ハ
氣管枝喘息ニ特有ナルモノトナスヲ得サルナリ然レモ其喘息發作時
ニ際シ卒然多量ニ現出シ暫時ニ消滅スルヲ以テ見レハ亦多少之カ
原因的關係ヲ有シ喘息中結晶性喘息ナル一種ヲ區別シ得ルカ如シ「ウ
ンガール」氏ノ近時ノ檢索ニ據レハ二十三人ノ喘息患者ニ於テ結晶決
シ痰中ニ缺如セシ「ナカリシト」云フ

「フリードライヒ」氏及「晩近殊ニ「フリーベル」氏ハ此結晶ヲ以テ「チロシ
ン」トナセンモ「ライデン」氏ハ之ヲ非議セリ而シテ「ライデン」氏ノ指導

ニ據リ「ザルコースキ」氏ノ行ヘル精密ナル分析ニ據レハ結晶セル「ムチン」様ノ物質ナルカ如シ然レモ近時「シユライチル」氏ハ其 C_7H_5N ノ化合ヨリ成レル有機原體ノ燐酸抱合物ナルノ説ヲ唱ヘタリ其性冷水依的兒亞爾箇保兒及嘔囉仿謨ニ溶解セス熱湯安母尼亞及醋酸ニ溶解シ加里及那篤倫鹵液、鹽酸、硝酸及硫酸ニ遇フキハ速ニ分解ス

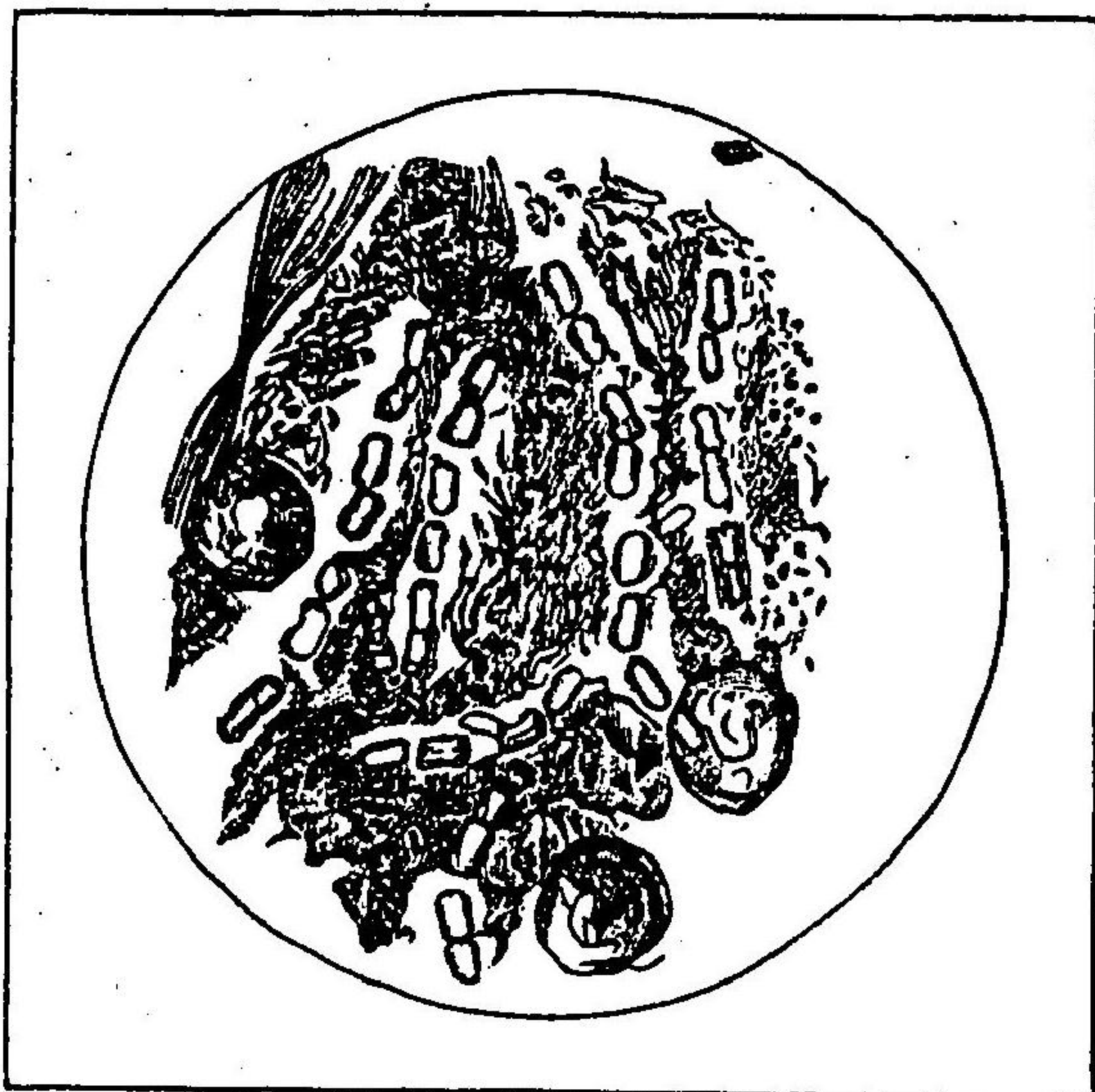
「ロイチン」及「チロシン」ハ新鮮ナル痰中ニ於テハ缺如セルカ如シ然レモ暫時之ヲ放置スルキハ此兩物質、品ヲ結フ時トノ之アリ既ニ「ビール」メル「氏」一二週間氣中ニ暴露セル氣管枝擴張ノ痰中ニ淡白色ノ微様塊ヲ發見シ試ニ顯微鏡下ニ檢セシニ束狀ヲナセル針狀結晶ヨリ成レリト而シ「氏」ハ之ヲ「ロイチン」若クハ「チロシン」ノ結晶トセリ然レモ其信據スルニ足ルハ只「ライデン」氏ノ新實驗ノミ即チ「氏」ハ略出後一二時間ヲ

經タル腐敗性氣管枝炎ノ痰ヨリ作レル乾性標本ニ於テ「チロシン」ノ針狀結晶及弱キ光輝アル「ロイチン」球ノ發生スルヲ見タリ(第九十六圖後)「チ同氏」ハ更ニ肺ニ穿通セル二人ノ膿胸患者ニ就キ同一ノ狀況ニ於テ其痰中「チロシン」結晶ノ束狀及結晶塊ヲ呈スルヲ見タリ且其痰ハ陳舊ナル乾酪ニ似タル特異ノ臭氣ヲ放テリト云フ而シテ痰中「チロシン」ノ形成ハ肺ニ破潰セル膿瘍ノ診斷ニ要用ナリトセル「ライデン」氏ノ説ハ「カ」ン「チヤルヒ」氏ハ「ライデン」氏ノ「クリニツク」ニ於ケル新實驗ニ由テ眞實ナルカ如シトナセリ

「尿酸石灰」ハ「フエールブリングル」及「ウンガール」ノ兩氏共ニ各一回之ヲ記載セリ就中「フエールブリングル」氏ノ實驗セルモノハ高度ノ尿酸尿ニ當メル糖尿病患者ニ「ウンガール」氏ノ患者ハ喘息ヲ患ヒ其發作時ニ當リ「ライデン」氏喘息結晶ノ他ニ尿酸加爾基ヲ略出シ而シテ此鹽ハ殊

第九十六圖

略痰ヨリ得タル「ロイ
チン」及「チロミン」結
晶
(「ロイチン」氏ニ由ル)



ニ痰ノ硬キ栓子中ニ存在シ發
作ノ去ルト共ニ消失セリト但
糖酸尿ハ之ヲ見サリキ
糖酸石灰ノ結晶ハ形狀ノ固有
ナルヲ以テ容易ニ之ヲ鑑別ス
ルヲ得ヘシ即チ銳縁ヲ具ヘタ
ル光輝アル八面晶ニ人ノ之ヲ
比スルニ封袋ヲ以テス而ソ鹽
酸、硝酸及硫酸ニ溶解スレモ水
醋酸、安母尼亞、加里及那篤倫滴
液、亞爾箇保兒及依的兒中ニハ
其形狀ヲ損スルヲナシ(其圖ハ

尿沈渣ノ條ヲ見ルヘシ)

三鹽基磷酸鹽類(磷酸安母尼亞麻偏涅矢亞)ハ痰中諸處ニ存在シ所謂棺
蓋狀ヲナスニ由リ之ヲ鑑別スル頗ル容易ナリ此鹽ハ其部位ヲ問ハス
磷酸麻偏涅矢亞ノ現在スルノ際含窒素物ノ腐敗ニ由テ安母尼亞遊離
スルキハ則チ形成セラル、モノトス而ソ唯亞爾加里性ノ液中ニ於テ
ノミ溶解セサルモノナルカ故ニ酸性及分解セル痰中ニ於テハ發見セ
ラル、ヲナシ

(ト) 纖維性氣管枝凝固物 *Fibrinose Bronchial gerinnsel.*

氣管枝粘液膜ノ纖維性炎症ニ於テハ痰中氣管枝分岐ノ管狀模型ヲ混
スルヲ稀有ナラスノ既ニ往時醫家ノ屢記載セル所ナリ然レモ當時是

ヲ以テ或ハ「ポリーペン」トシ或ハ略出セラレタル肺血管トセリ妄誕亦甚シト云フヘシ次テ千八百四十五年ニ至リ「レマーク」氏始テ疾患ノ診斷上及發生上ノ檢索ニ於テ其眞性ヲ發見シ且纖維性肺炎ハ屢現出スルモノナルヲ示セリ

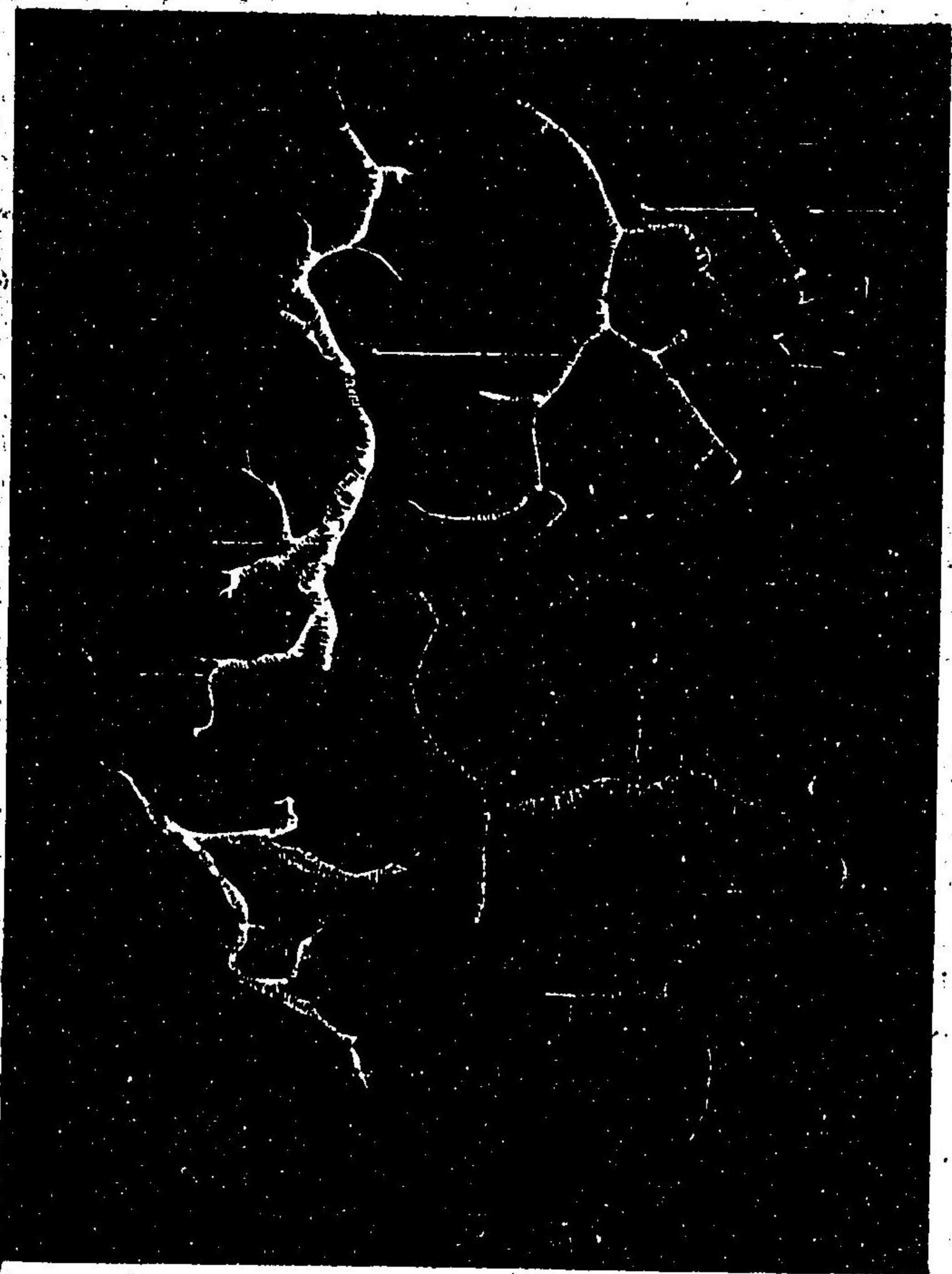
今次ニ「レマーク」氏ノ纖維性肺炎ニ於ケル氣管枝凝固物ニ就テ論セル名文ヲ掲ケント欲ス

纖維性凝固物ハ其境界線直線ニシテ且又狀ノ分枝ヲ有スル圓柱ヲナシ枝極ハ漸次ニ長徑及厚徑ヲ減少ス然レモ主幹ハ通常是ニ接近セル分岐ヨリ菲薄ニシテ遊離端ハ糸狀ヲナシテ終リ分岐部ハ輕度ニ擴張スルヲ稀ナラス是レ氣管枝ノ同様ナル形狀ヲナスニ由ルナルヘシ而シテ圓柱狀ノ凝固物ハ時トシテ稍壓扁セラレ又往々數所ニ於テ結節狀ニ膨脹ス蓋此膨脹ハ容易ニ證明シ得ルカ如ク閉圓セラレタル氣泡ニ因ス

ルモノニシテ凝塊ノ水面ニ浮泳スルニ大ニ關係アリトス何トナレハ泡沫ヲ含メル粘液ナク氣泡ヲ含有セサル凝固物ハ水中ニ於テ沈沒スレハナリ是レ余カ數回目撃セシ所ナリ

分枝ノ微細ナル末端ハ時トシテ閉圓セラレタル氣泡ニ關係ナキ小塊子様ノ膨脹ヲ呈ハスヲアリ是レ漏斗ノ纖維性模型ナルヤ明カナリ但通常ハ凝塊密ニ肺氣胞ノ上際ニ接スル部ヨリ分裂スルモノトス而シテ氣管枝凝固物ハ多クハ痰ノ最下層ニ在リテ屢相纏結シ小塊狀ヲ爲シ是ヲ水中ニテ洗滌スルキハ美麗ニシ且屢饒多ナル枝極トナル而シテ自然ノ狀態ニ在テハ淡黃色若クハ淡褐色ヲ爲スモ水ニ接スル久シキキハ多クハ雪白色トナル又往々其外面ニ血點及血線ヲ見ルヲアリ(第九十七圖)

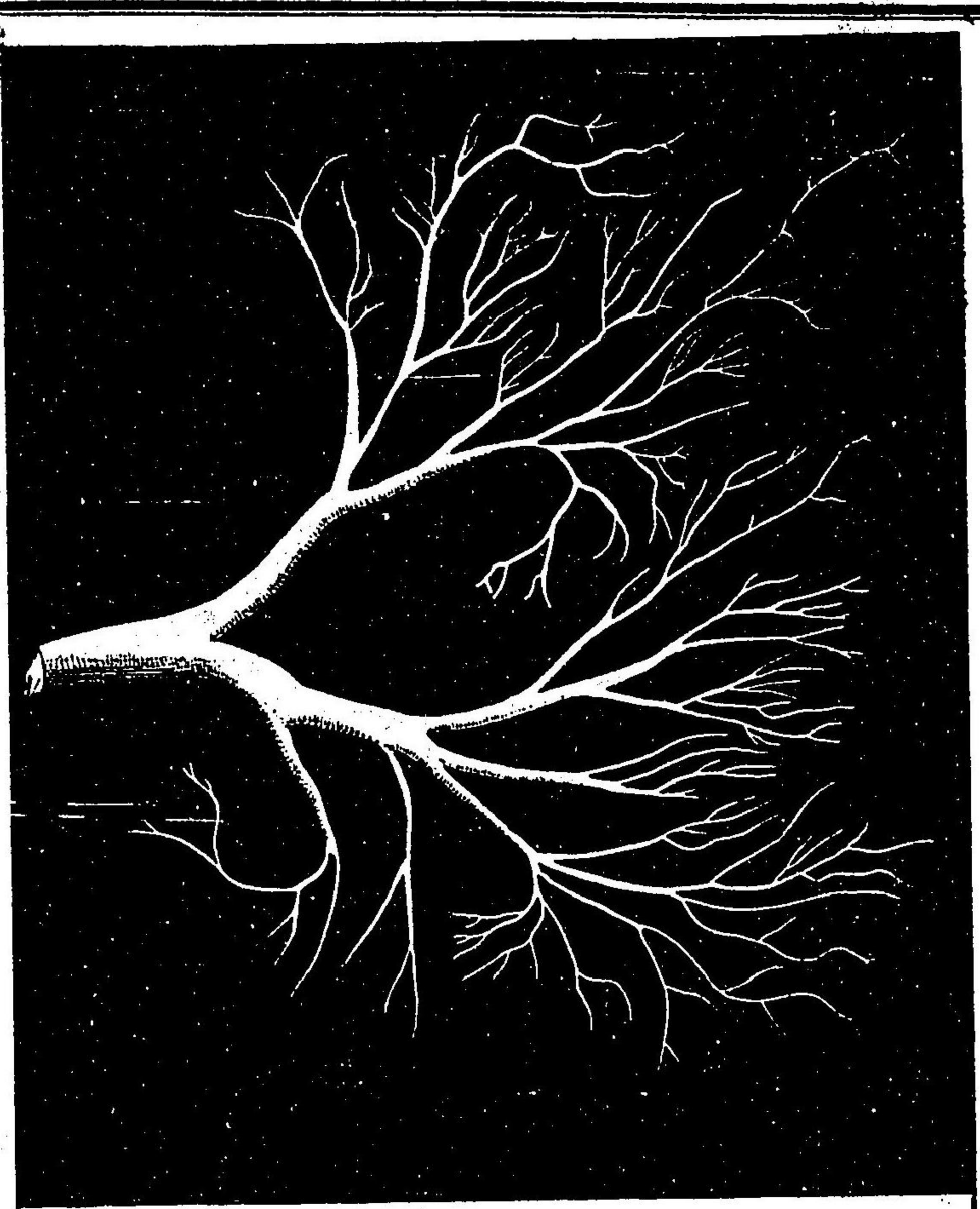
纖維性肺炎ニ於テ其痰中纖維素凝塊ヲ見ルハ炎症機肺胞ヨリ氣管枝



圖七十九第

纖維性肺炎ノ喀痰中ヨリ得タル
纖維性氣管枝凝固物、自然大
(余カ實驗)

端ニ傳播スルニ由ルモノニシテ若シ注意シテ檢索スルハ之ヲ缺ク
アル蓋稀ナリ但患者甚シク脱力シ咳嗽ノ力微弱ナルハ凝塊、氣管枝
中ニ遺殘シ痰中ニ混セサルコトナキニアラス而シテ氣管枝凝固物ハ常ニ
纖維期(變肝期)ノミニ現ハレ此病期ノ特徴トナスニ足ルモノニシテ多ク
ハ疾患ノ第三乃至第七日殊ニ第四乃至第五日ニ饒多ナリ然レハ稀ニ
ハ其咯出第七日以上ニ瀰リ加之レマック氏ハ第十四日、ピールメル氏
ハ第三週ニ於テモ猶之ヲ見シト云フ其消失ハ之ヲ精索スルニ屢漸ヲ
以テ來リ纖維期ノ終ルヤ凝固物ハ柔軟乳皮樣膿狀トナリ遂ニ單純ナ
ハ膿樣物ニ變移ス
レマック氏ハ纖維性凝固物ヲ以テ豫後上大ニ要用ナルモノト爲シ其
咯出ノ發現愈早ク其數許多ニシテ且持長性ナルハ經過安全ニシテ全治
ノ速カナルヲ期スヘシト云ヘリ其數ハ素ヨリ原發ノ炎症并ニ就中續



圖八十九第
特發性氣管枝格魯布ノ纖維性氣管枝凝固物(余カ實驗)自然大

發炎症ノ如何ニ關スルモノニモ「ピールメル」氏ハ一日間ニ二十四乃至三十ヲ算セリ

纖維素性凝固物ノ咯出ヲ兼テタル氣管枝粘液膜ノ續發纖維素性炎症ハ爾他ノ肺患ニ現ハル、稀ナリ但「ランチツ」氏ノ實驗ニ據レハ肺癆ニ於テ之ヲ發セシ「ア」リト云フ

之ニ反シ纖維素性氣管枝炎原發性ニシテ全ク孤立セル疾患トナリテ發生スル「ア」リ所謂特發性氣管枝格魯布 *Idiopathische Bronchial-Kroup.* 是ナリ此症ニ於テハ時トシテ診斷上爾他症候ノ據ルヘキモノナク獨リ纖維素性凝固物ノ發見ニ由テ之ヲ診定シ得ル「ア」リ而シテ原發性氣管枝格魯布ニ於テ續發性炎ニ反シ氣管枝凝塊頗ル大ニシテ夥多ノ枝梗ヲ分歧シ(第九十八圖)其内部ハ或ハ空虚ニ或ハ充實ス又時トシテ其内部黒色素ヲ含メル細胞ヲ以テ充填セラレ爲メニ頗ル奇異ナル觀ヲ呈スル「ア」リ

纖維素性氣管枝凝固物ノ「プロテイン」抱合物ヨリ成レルモノタルハ
 既ニ「ハインツ」氏カ「レマーク」氏ノ指導ニ據リ纖維素性肺炎ノ凝固物
 ニ於テ證セシ所ナリ其顯微鏡的造構ハ或ハ凝塊ニ併行シ或ハ網
 狀ニ分岐セル纖維ヨリ成リ各纖維間ニハ硝子様ノ礎質在リテ内
 ニ個々離散セル赤血球及膿球ヲ藏ス而シテ膿球ノ一部ハ其形狀ヲ
 保有スルモ一部ハ脂化ニ陥レリ但脂化ノ度ニ至テハ一様ナラサ
 ルハ論ヲ要セス時トシテ散在セル脂肪顆粒及稀ニハ既ニ記載セシ
 如ク「シャルコー」ノ「イマン」氏ノ結晶ヲ發見スル「アリア」フ「リント」氏
 ノ報導セル實驗ニ據レハ「氏」嘗テ尋常萎縮及脱色セル赤血球ニ富
 饒ナル凝固物中「ヘマトイゲン」ノ小顆粒及結晶ノ存在スルヲ見タ
 リト又「レマーク」氏ハ時トシテ表面ニ裂痕ヲ有スル氣管枝顫毛上皮
 ヲ見シ「アリア」シヲ記載セリ

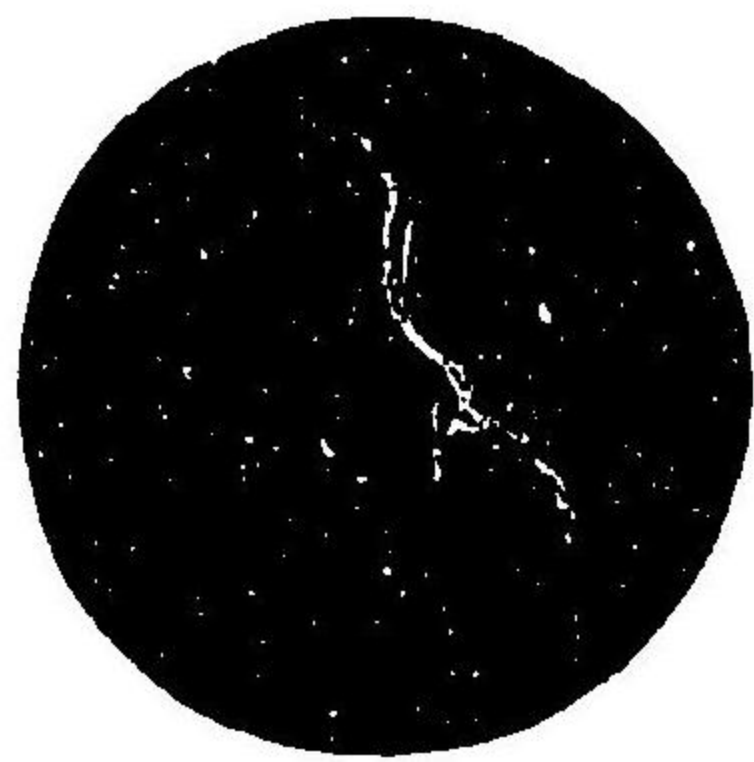
(ナ) 氣管枝螺旋狀體

Bronchialspindeln.

氣管枝螺旋狀體ナルモノハ主トシテ「クルシユマン」氏ノ檢索ニ由リテ稍
 緊要ノモノトナレリ抑此物質ハ「ライデン」氏次テ「ウンガール」氏ノ始テ
 實驗セシ所ニシテ通常氣管枝喘息ニ現ハル然レモ亦氣管枝加答兒氣管
 枝格魯布纖維素性肺炎及肺癆ニ於テモ見ル「ナキニアラス」而シテ「クルシ
 ユマン」氏ハ是ヲ微細ナル氣管枝ニ於テ形成セラル、モノトシ又「ベル」
 氏ハ其加里滷液及「バレット」水中ニ溶解スル性アルヨリ主トシテ粘液素
 ヲ成レルモノトセリ
 螺旋狀體ハ肉眼上灰色或ハ灰黄色或ハ淡黄色ノ斑點アル線條ヲ呈ハ
 シ其直徑一「ミルリメートル」ニ達シ長サハ數センチメートルニ到ル

圖九十九第

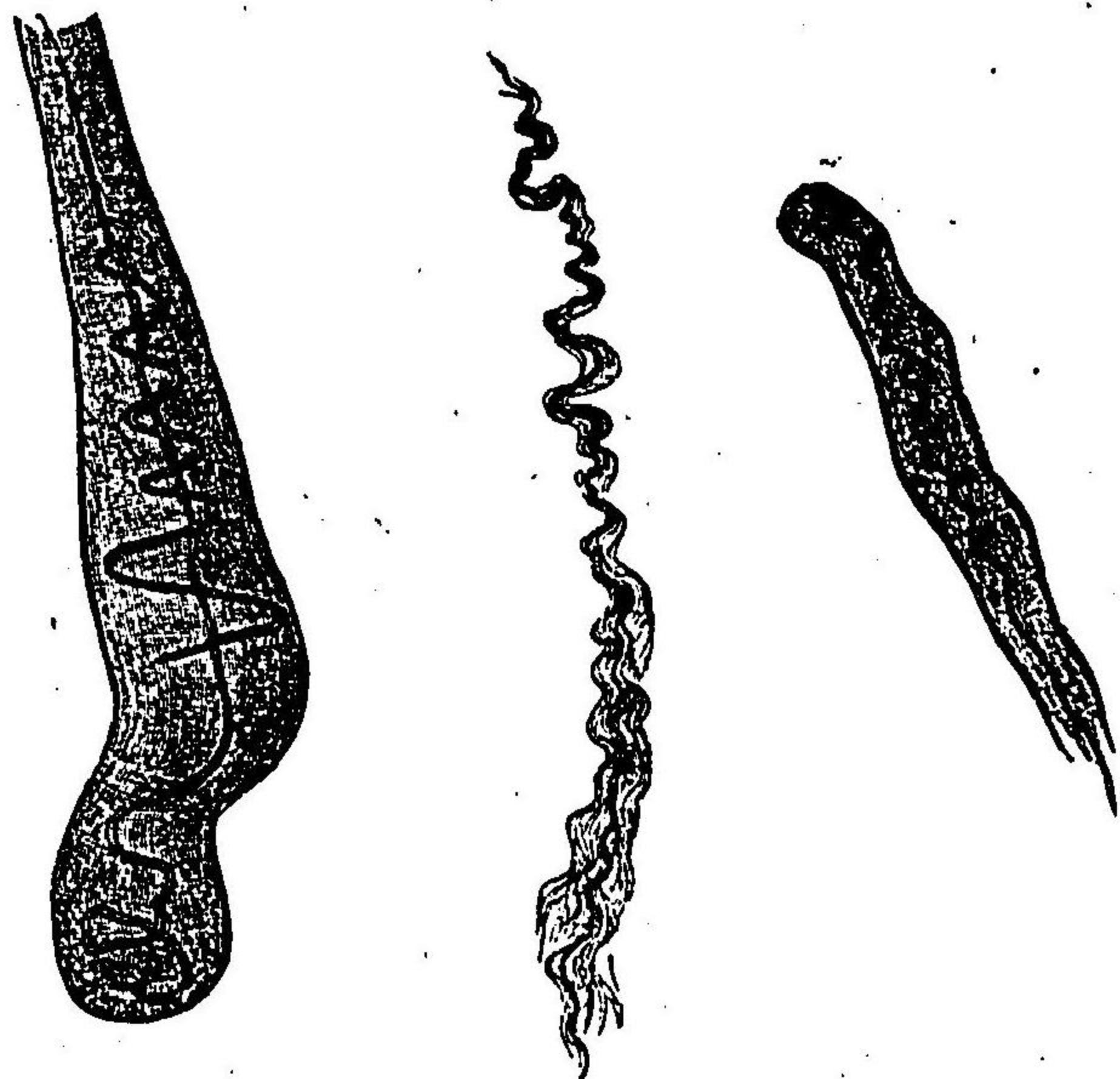
氣管枝喘息ノ略痰ニ於
ル氣管枝螺旋狀體、自然大
(余カ實驗)



アリ(第九十九圖)顯微鏡下ニ檢スルニ其全體屢美麗ニ振糾セル線條ヨリ成リ往々其中心ニ光輝アル中心纖維ヲ有スルヲ見ル(第百圖)時トシテ氣管枝螺旋狀體、粘液塊中ニ包裹セラル、トアリ又纏振セル線系間及其内部ニ圓形細胞ヲ見ル稀ナラス氣管枝喘息ニ於テハ螺旋狀體ノ肉眼上透明ナル部ニ屢喘息結晶ヲ存ス、バラルラ氏ハ軌近陳舊ナル螺旋狀體ニ於テ硝子樣變性ヲ發見セルヲ記載シ喘息結晶ノ發生ニ關係

圖百第

氣管枝喘息ノ略痰ヨリ得タル氣管枝螺旋狀體二百七十五倍(余カ實驗)



アルモノナリト云ヘリ

(リ) 細菌性氣管枝栓子 *Mycotische Bronchialthrombe.*

千八百五十年「ヂットリツヒ」氏ハ腐敗性氣管枝炎及肺壞疽ノ惡臭痰ヲ暫時唾壺中ニ靜置セシニ器底ニ於テ脆弱ニシテ栓子狀ヲ爲セル物體ヲ發見セリ蓋此栓子ハ咯痰中ノ固性ニシテ且無氣ノ成分ナルヲ以テ其重量ニ從ヒ沈降スベキハ理ノ當ニ然ルヘキ所ナリトス後來「トラウベ」氏及殊ニ「ヤツフエ」並ニ「ライデン」氏ハ顯微鏡上及化學上ヨリ之ヲ檢索シ大ニ貴重ノモノタルヲ示セリ
栓子ノ大サハ一定セス最小片ヨリ漸々増大シ時トシテ殆ト瓜甲大若ク

ハ蠶豆大ニ達スルコトアリ色ハ或ハ帶色或ハ帶灰白又時トシテ小麥糊ヲナシ試ニ壓碎スルニ鼻ヲ衝クノ惡臭ヲ放チ分レテ脆弱ノ顆粒片ト成ル今之ヲ取テ顯微鏡下ニ照スルハ上文既ニ記述セル二三ノ成分ヲ發見ス而シテ其本質ハ顆粒狀ノ分解産物ヨリ成レルカ如キモ強度ニ擴大スルルハ主トシテ「レプトトリキス」ノ微細ナル纖維糸及芽胞ヨリ成レルヲ見ルナリ又肺壞疽ノ新鮮ナル栓子中ニハ二種ノ滴蟲即チ「モナス」レ「ノス」及「セル」コ「モナス」ノ現出スルコトアリ故ニ此微菌及滴蟲ヲ以テ分解作用ノ媒介者ト看做スハ亦故ナキニアラサルナリ
微菌聚積部ニ於テハ細胞及其生來物ノ散在スルヲ見ル而シテ其性ハ「トラウベ」氏ノ首唱セル如ク栓子ノ新舊ニ從ヒ同シカラス其最モ新鮮ナルモノニ在テハ主トシテ膿球ヲ見ルモ陳舊ナル者ニ在テハ許多ノ大脂肪滴ヲ見尙ホ時ヲ經タルモノニ於テハ脂肪滴ノ他亦「マルガリン」酸

針ヲ混ス而シテ此結晶ハ栓子ノ發育ニ費ス處ノ時間愈長キハ從テ亦
 饒多ナルモノトス時トシテ栓子中破壊セル赤血球色素塊及加之ヘマト
 イゲン結晶ヲ見ルコトアリ要スルニ略出セラレタル栓子ハ皆腐敗セル
 肺部ニ屬スル小中氣管枝内ニ於テ形成セラル、モノトス是レ剖檢ニ
 由テ容易ニ證明シ得ル所ナリ

時トシテ扁桃線ノ濾胞内ニ於テ同様ノ栓子ヲ形成スルコトアルハ茲
 ニ記載セサルヘカラス此物質ハ肉眼上及顯微鏡上全ク細菌性氣
 管枝栓子ト異ナルコトナク若シ斯ノ如キ栓子嚔咳ニ由テ濾胞ヨリ
 排泄セラル、ハ俗人ハ是ヲ以テ肺結核ニ罹レルモノト想像ス
 ルコトアリ又往々扁桃腺濾胞ノ閉塞孤立セル慢性ノ疾患トナリテ
 現ハレ嚔咳刺戟及言語障害ニ由テ大ニ患者ヲ苦マシムルコトアリ
 診斷ハ容易ニシテ氣管枝栓子ト誤ルコトナシ何トナレハ口峽ヲ一診

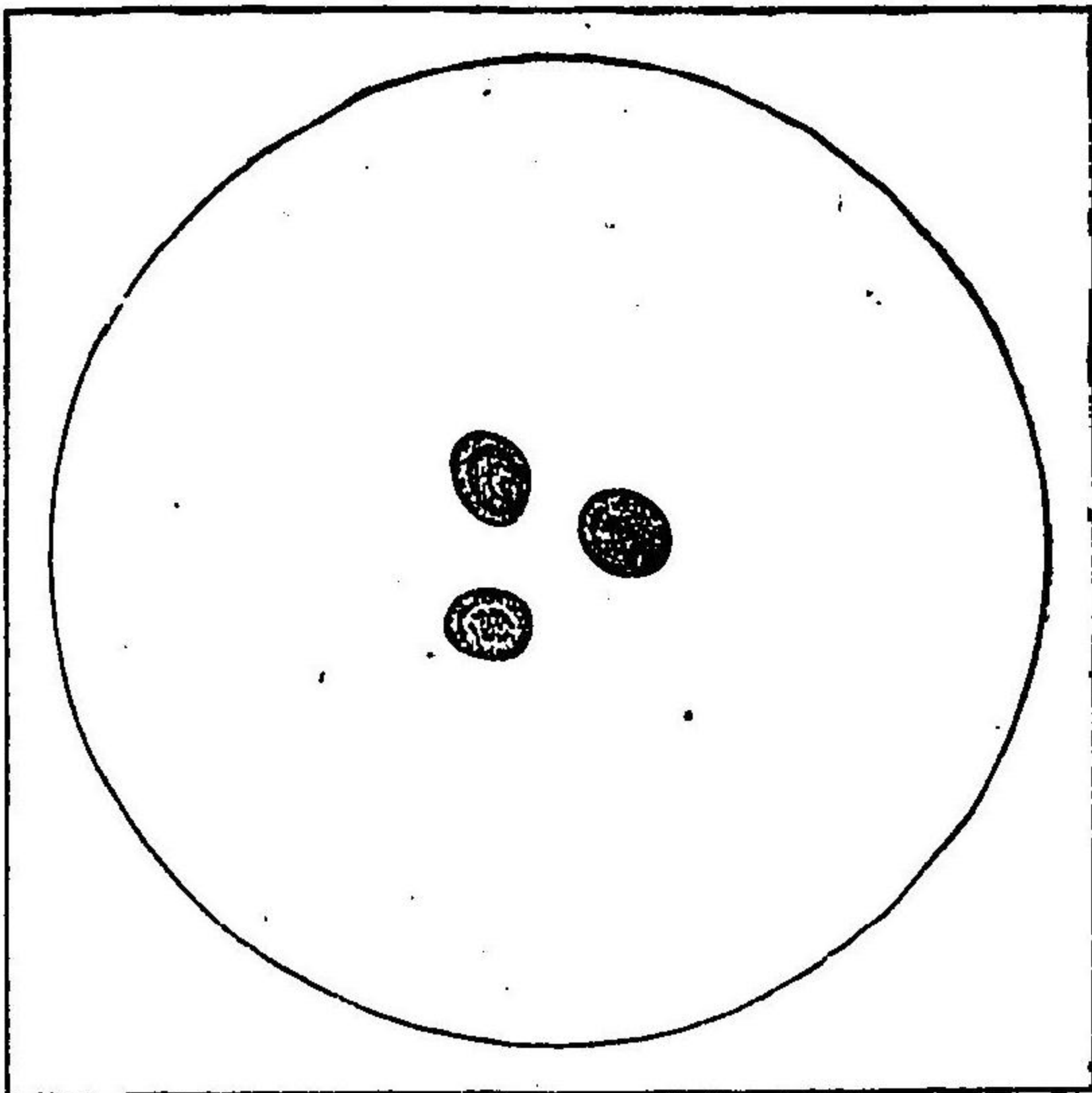
スルハ直ニ栓子ノ由來ヲ悟ルニ足レハナリ

(又) 澱粉體 *Amyloidkörper*

澱粉體ハフリードライヒ氏カ始テ肺中ニ發見セルモノニシテ後、エワグ
 チル、ラングハウス氏及晩近ジユルゲンゼン、ツァーンノ諸氏はカ檢索
 ヲ力メタリ而シテ此物質ハ諸種ノ肺患即チ新鮮ナル肺浸潤、褐色硬化、肺
 萎縮肺癌ニ於テ檢出セラレ加之ツァーン氏ノ實驗ニ據レハ肺氣腫モ
 亦澱粉體發生ノ原因トナルカ如シ
 抑モ澱粉體ノ痰ニ現出スルハ從來稀ニ記載セラレシ所ナリト雖トモ
 「ピールメル」氏ハ既ニ之ヲ痰中ニ檢出シテ其形狀ヲ摸寫シ又「ツァーン」氏
 ハ屍體ノ氣管枝粘液中ニ於テ之ヲ發見セリ其形ハ畧ホ圓ク或ハ兼テ

第一百圖

澱粉體「ビー
ルメ」氏ニ
由ル



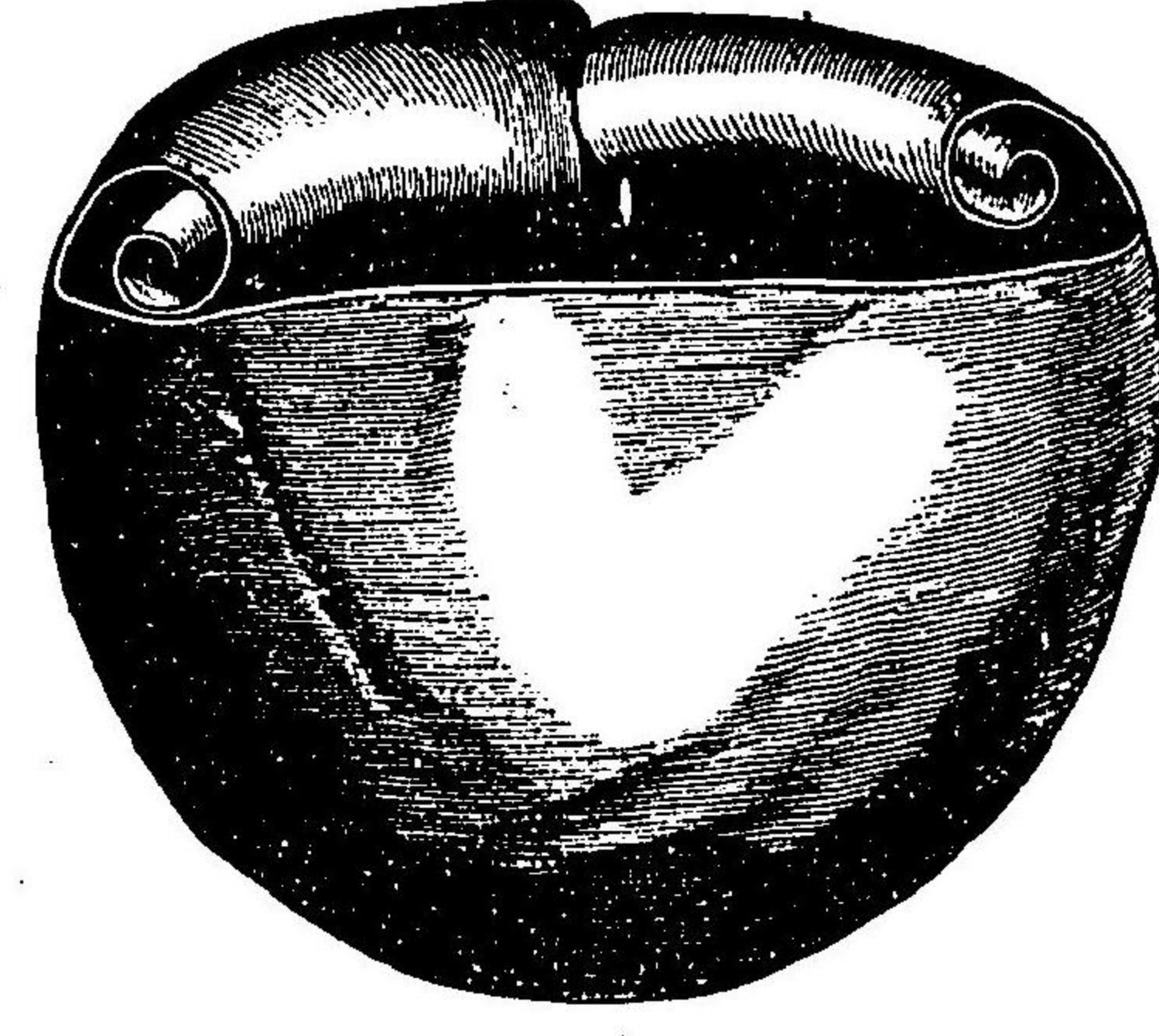
隅角ヲ具ヘ同心性ノ層ヲ呈ス(第百
一圖)而シテ肺中ニ在ルモノハ其中心
黒染シ或ハ顆粒狀ヲナスヲ見ル
稀ナラス是レ其發生ノ細胞ノ變化
ニ因スルモノナルヲ確カムルニ足
ルナリ試ニ之ニ稀硫酸及沃度丁幾
ヲ加フレハ「ラングハウス」氏ノ實驗
ニ於ケル如ク汚穢青色ヲ呈スル
多シ又沃度紫ヲ以テスルキハ鮮明
薔薇色トナル

(ル)「エロノコツクケン胞」 Echinokokenblase.

肺臟ノ「エロノコツクス」ニ罹レルカ或ハ近接器關例之肝臟ノ「エロノコ
ツクス」肺實質ニ破潰セル患者ニ於テハ「エロノコツクス」胞ヲ咯出スル
ヲアリ余ハ數年前一職工ヲ治療セシ「ア」リ該患者ハ一年以來頻ニ咯
血セルモ出血ノ本源ヲ發見スルヲ得サリシ然ルニ一朝診查ノ際卒然
甚タ危険ナル窒息發作ヲ起コシ余カ面前ニ於テ新ニ破裂セル「エロノ
コツクス」胞ヲ咯出セリ其大サ實ニ林檎大ナリキ(第百二圖)然レハ胞壁
常ニ斯ノ如ク全然咯出セララル、モノ「ア」ラス「他」ノ症ニ於テハ却テ
漸次ニ融解スル「ア」リ例之「レ」ハ「ベルト」氏ハ稍膨脹セル膜質屢片々ヲ
ナシテ咯出セラレシヲ見シト云フ此膜質ハ容易ニ認ムルヲ得ルモノ
ニノ通常乳色硝子様色ヲ有シテ遊離綠稍内方ニ卷縮シ又横断面ハ之

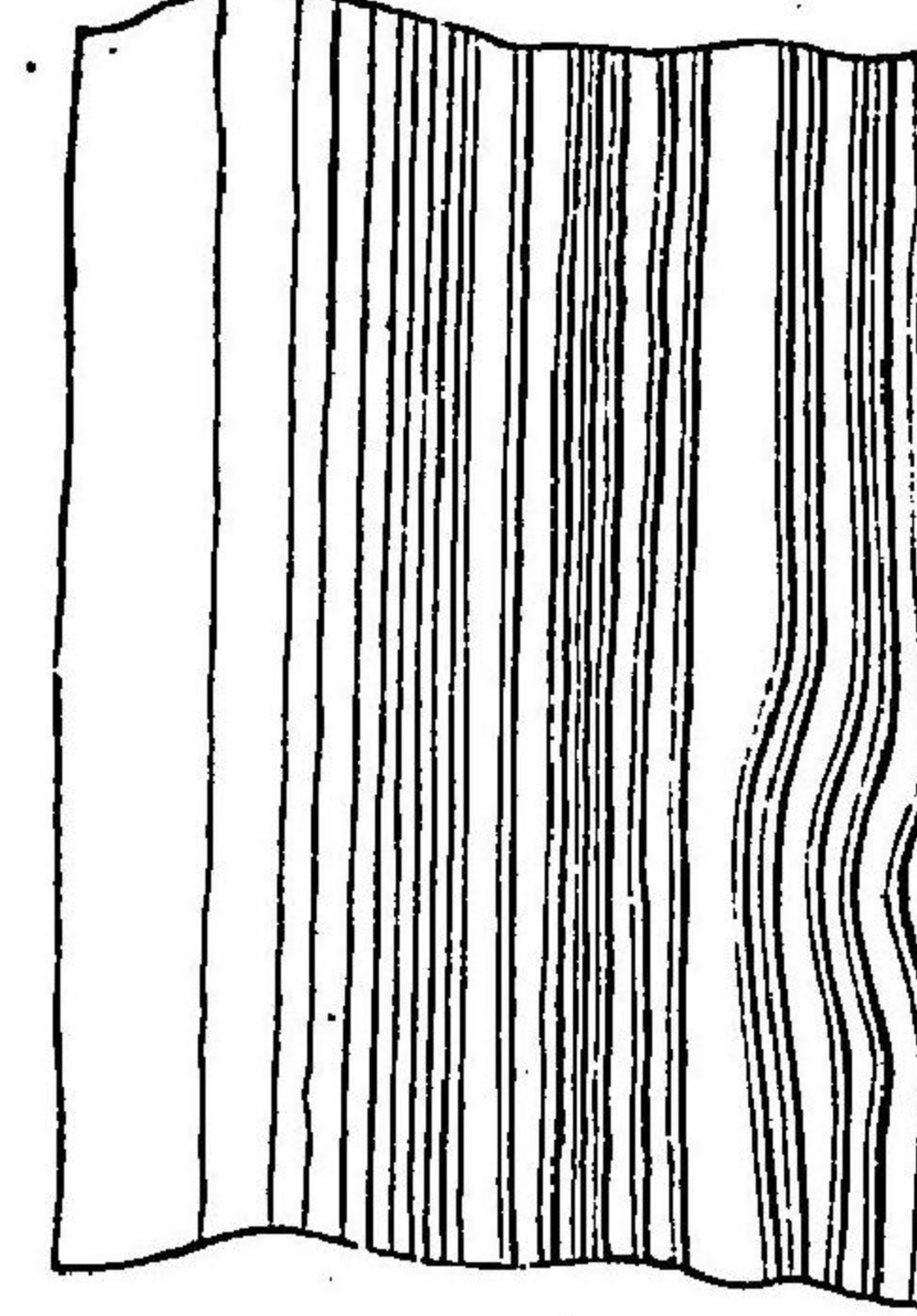
圖二百第

略出セラレタル
包蟲胞、自然大
(余カ實驗)



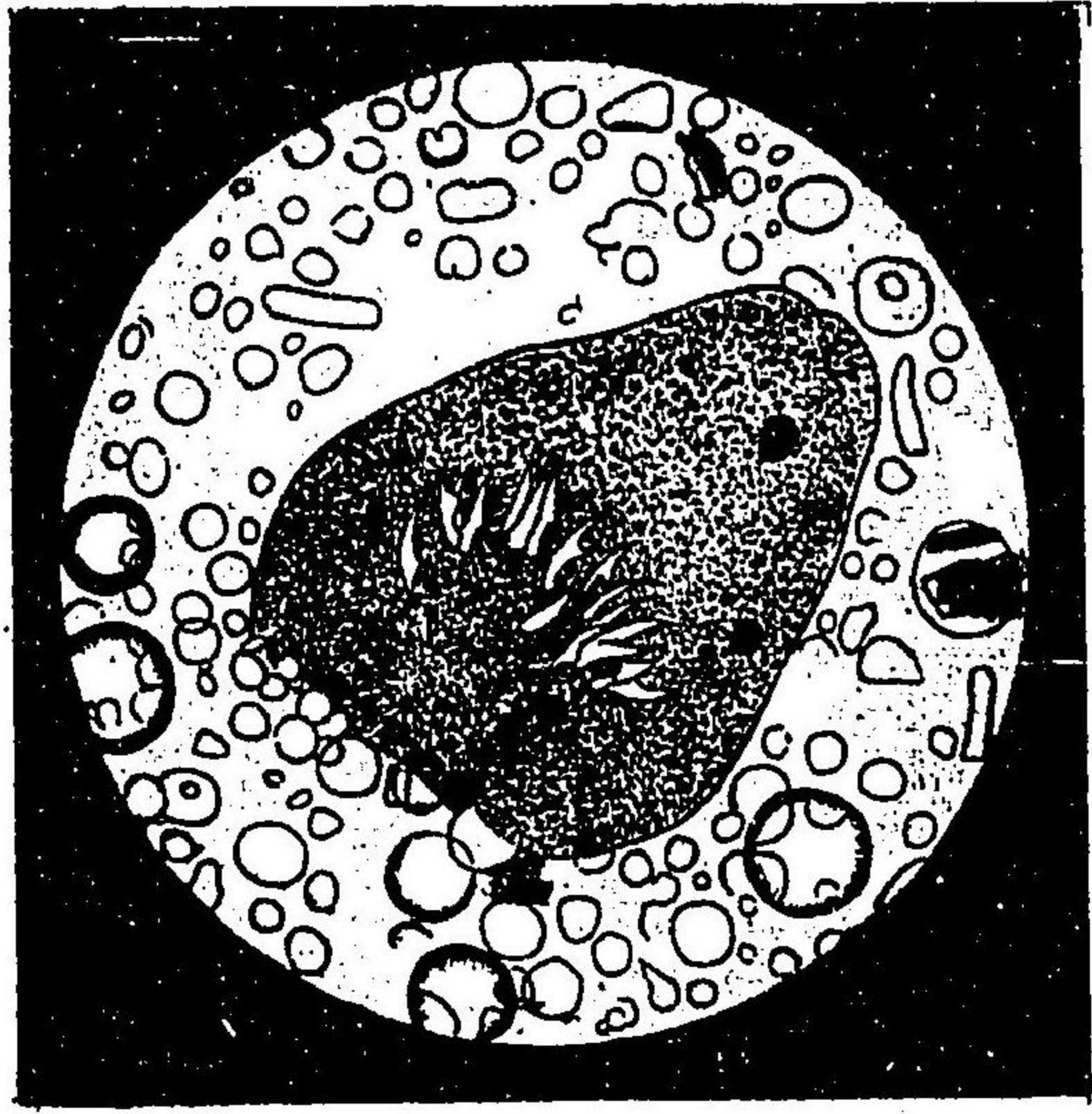
圖三百第

包蟲膜ノ横断面
二百七十五倍
(余カ實驗)



圖四百第

略出セラレタル包蟲
胞ヨリ採取セル「エ
ロノコツクス」頭、二
百七十五倍(余カ實
驗)



ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ併行セル層ヲ呈ハス(第百三圖)抑モ學說上ニ於テハ痰中懷蟲鈎第百四圖若クハコレステアリン結晶ヲ見ルヲ以テ肺「エヒノコツクス」ノ診斷上喫緊ナル症狀トナセルモ余カ成書ヲ涉獵セシ所ニ據レハ「エヒノコツクス」膜ノ略出ニ先チ此等ノ諸物檢出セラレシ「アアリシヤハ頗ル疑ハシキ所ナリ」

「エヒノコツケン」ノ他時トノ二口蟲モ亦動物性寄生物トナリテ現ハル但通常熱帶地方ニ永住セシ人ニ發シ該地ニ於テ疾患ニ罹ルモノニ多クハ「ヂストーマ、ヘマイビーム」若クハ「ヂストーマ、リンゲリー」ナリトス「ベルツ」氏ハ日本ニ於テ多數ノ咯血患者ノ痰中ニ「グレガリナ、ブルモナリア」ヲ發見セリト云フ

(ナ) 氣道ノ實質成分

Parenchymbestandtheile des Respirationstrages.

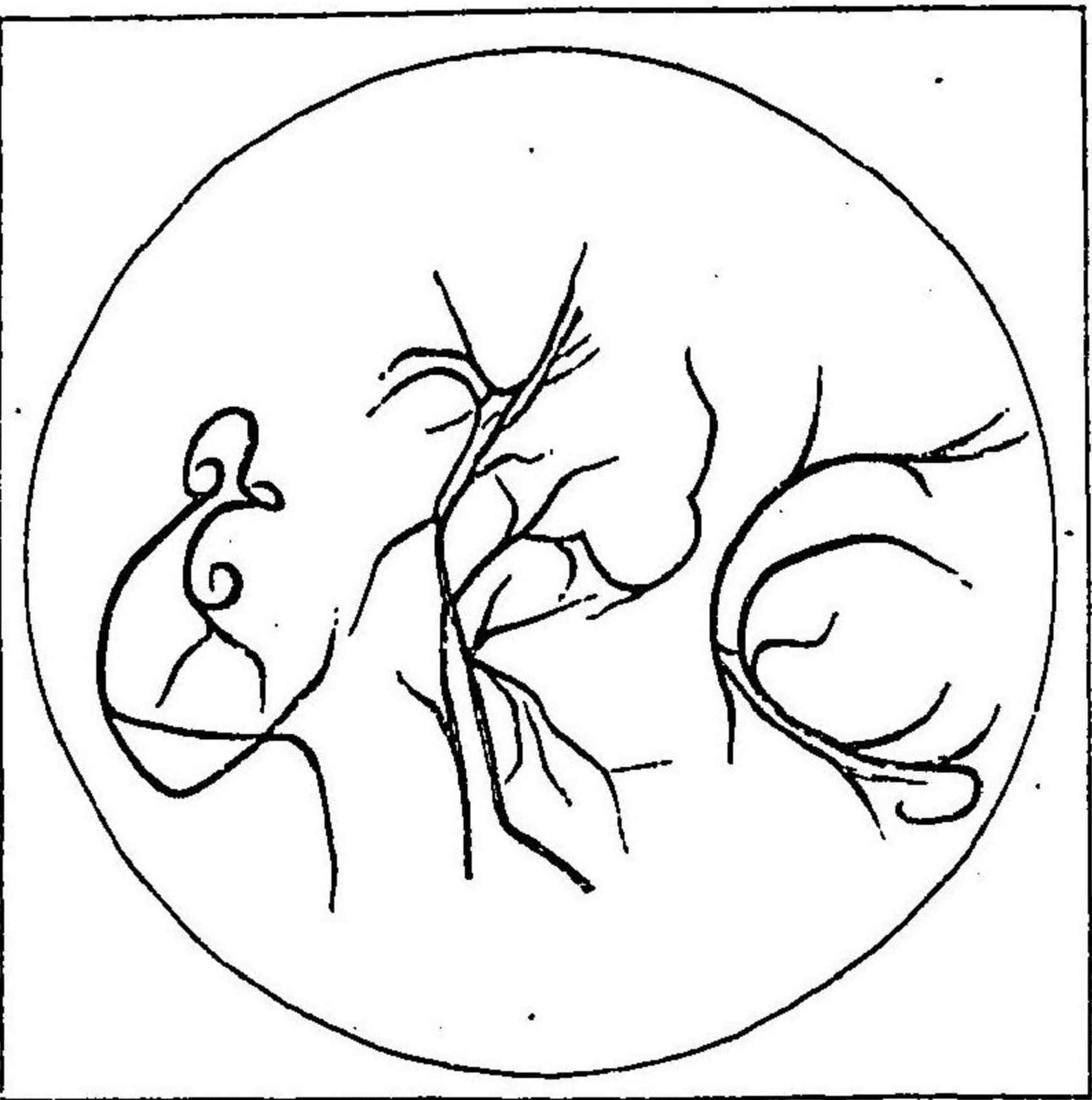
呼吸器ノ諸潰瘍性疾患ハ其部位ノ肺實質ナルト氣道ナルトヲ問ハス屢痰中ニ脱落セル組織成分ヲ混スルモノニ就中肺實質ノ崩壊性疾患ハ其病機重大ナルト屢發スルノ症ナルトヲ以テ痰中之カ成分ヲ見ル「アルハ病床上頗ル樞要ナルモノトス」

肺患中殊ニ實質成分ヲ疎解セシムルモノ三アリ曰ク肺癆曰ク肺壞疽曰ク肺膿瘍是ナリ但其診斷上ニ於ケル價值ハ病症ノ異ナルニ從ヒ同一ナル能ハス何トナレハ肺癆ニ在テハ痰中組織成分現出スルモ未タ遠カニ疾患ノ肺癆ナルヲ診定スルヲ得スノ更ニ結核「バチルレン」ノ證明ヲ要スト雖モ肺壞疽及肺膿瘍ニ在テハ主トシテ肺實質ノ屑片ヲ以テ

能ク之ヲ呼吸器ノ爾他類似疾患ヨリ辨別スルヲ得レハナリ其他肺組織成分ノ痰中ニ混スルハ上記ノ諸患各其狀ヲ異ニスルモノトス肺癆ニ於テ組織ノ痰中ニ混スルハ多クハ外科醫ノ無覺性屑片脱落ト稱スル一種ノ脱落機ニ由ルモノニシテ其組織片ハ屢唯リ顯微鏡上注意シテ檢スル片ノミ發見シ得ルカ如ク細小ナルヲアリ然レモ亦稀ニハ痰中ノ肺屑片粗大ニシテ熟練家ハ已ニ肉眼上之ヲ灰色不透明ノ小點トシテ認メ得ルヲナキニアラス甲種ノ狀況ニ於テハ顯微鏡検査上攢簇セル彈力纖維ヲ見ル是レ其著明ナル複線肉叉狀ノ分岐美麗ナル卷縮殊ニ苛性加里ニ對スル抵抗力ニ由リ容易ニ知ルヲ得ヘシ即チ試ニ之カ顯微鏡的標本ニ苛性加里溶液(一ト三)ヲ加フルキハ諸多ノ細胞成分消失シ彈力纖維ハ益著明ニ現出ス(第五圖)肺屑片ノ稍大ナル者ハ多クハ腔洞ノ形成セラル、際發見スル所ノモノニシテ通常屑片中ニ彈力

第五百五圖

肺癆患者ノ咯痰ヨリ得タル彈力纖維、二百七十
五倍(余カ實驗)



纖維肺胞ノ布置ヲ保有スルヲ認ムルモノトス

初期ノ肺癆ニ於テ彈力纖維ヲ發見スルハ多クハ困難ニシテ之カ檢索ハ常ニ熟練ト注意トヲ要セスンハアラス若シ疑似決シ難キニ臨ンテハ宜シク「フェンウツク」氏ノ報告セル検査法ヲ試ルヲ適當トス今次ニ掲クハ同氏ノ法ヲ稍變更セルモノニシテ其確實ナルハ實地上屢證明セラル、所ナリ即チ痰ヲ

漏斗狀ノ酒盞ニ納レ加フルニ同量ノ餾水及苛性加里溶液(一ト三)ヲ以テシ硝子桿ヲ以テ絶ヘス攪拌シ傍ラ之ヲ熱シテ煮沸スルニ至ルヘシ然ルキハ膠様ニ膨大セル痰塊煮沸ノ爲メ稀液トナル是ニ於テ酒盞ヲ若干時靜置シ近渣ノ器底ニ沈ムヲ待テ可成的透明部ヲ傾瀉シ殘液ヲ沈渣ト共ニ下端尖銳トナレルシヤンパン盃中ニ注キ再ヒ沈渣ノ拆出スル後「ビベツト」ヲ以テ其一部分ヲ採リ物體硝子上ニ移シ顯微鏡下ニ檢スヘシ蓋此法ニ於テハ痰中彈力纖維存スルキハ少量ナルモ確カニ之ヲ發見スヲ得ルト其量ノ多少ヲ檢スルヲ得ルトノ利アリ

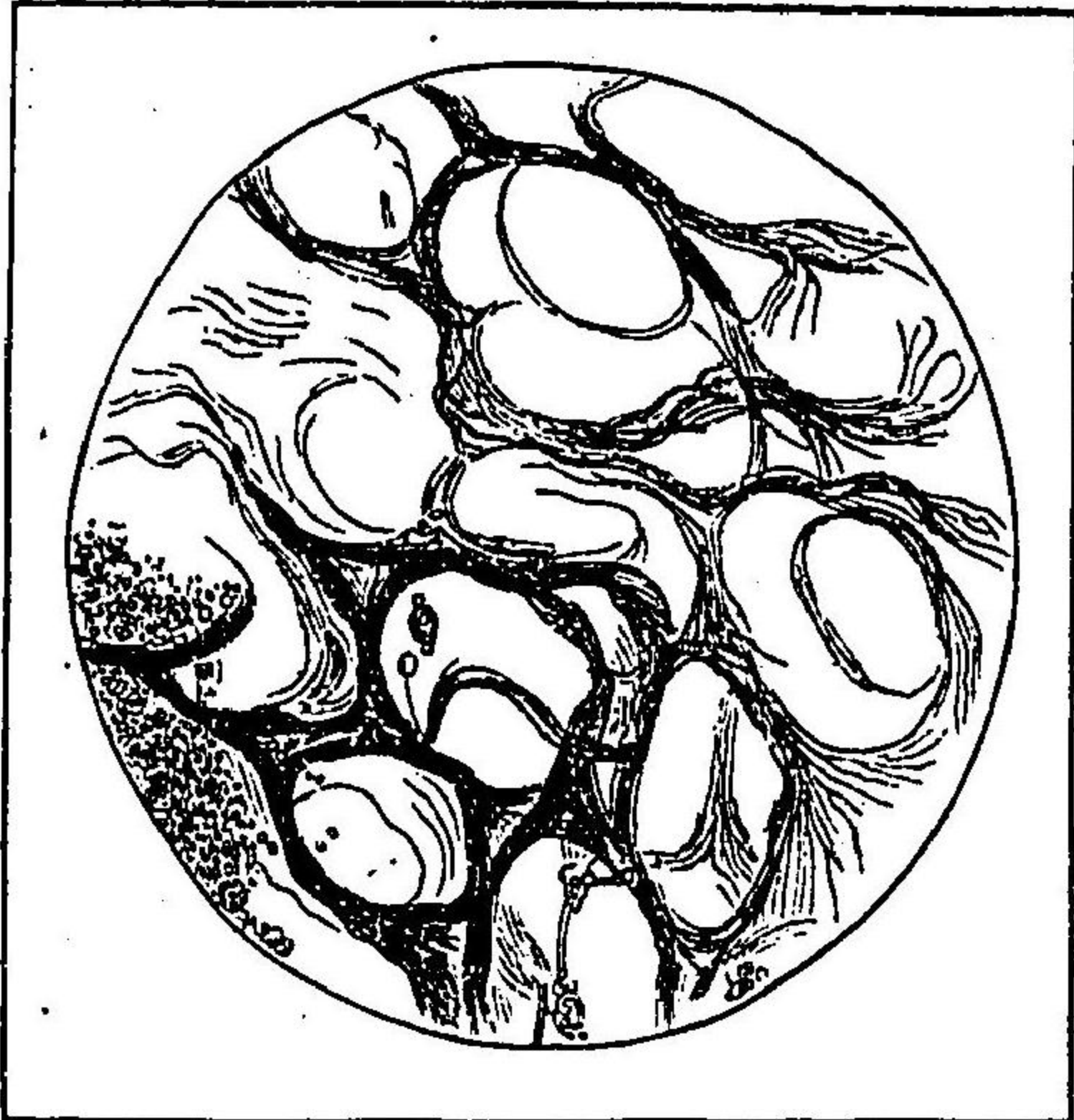
彈力纖維ハ肺膿瘍ノ痰ニ於テモ亦見ル所ノモノニシテ或ハ箇々散在シ或ハ集簇ス然レモ此症ニ在テハ痰中肉眼上明カニ認ムルヲ得ル肺實質片ノ混スルアルヲ以テ其特徵トス此實質片ハ往々頗ル大ニシテザル

コースキ「氏ハ「ライデン」氏ノ「クリニツク」ニ於テ一患者ニ「五」センチメートル大ノ屑片ヲ咯出セルノ實驗ヲ記載セリ其色ハ淡白黃或ハ暗灰白若クハ淡紅ニシテ水中ニ洗滌スルキハ腐蝕セラレタルカ如キ不整ノ周縁ヲ呈シ又顯微鏡下ニ檢スルキハ容易ニ肺氣胞ノ配置ヲ認ムルヲ得ヘシ其他實質片中「ヘマトイデン」ノ結晶及結塊、細小ナル脂肪結晶塊及「ミクロコツケン」ノ聚落ヲ發見スルヲアリ(第九十四圖)其他肺膿瘍ニ於ケル屑片ハ多少黒色ノ肺色素ヲ含有スルヲ常トスルカ故ニ肉眼上灰白色ヲ呈ス

痰中ノ實質片ハ肺壞疽ノ診斷上大ニ要用ニシテ獨リ之ニ據テ本病ヲ腐敗性氣管枝炎ト區別シ得ルコトアリ其大サハ往々著明ニシテ殆ト指爪大ニ達スルコトアリ色澤ハ通常灰白若クハ暗灰白ヲナシ顯微鏡下ニ檢スルキハ顆粒狀ニシテ一部遊離セル夥多ノ黒素色ヲ見ル而シテ此屑片

第百六圖

肺壞疽ノ略撰ヨリ得タル
肺實質片
(余カ「チニービ」ニ於
ル實驗)



ハ彈力性ニシテ透明ナル基質ヨリ成
リ基質ハ屢肺氣胞ノ造構ヲ呈ハス
(第百六圖)然レモ肺壞疽ニ於テ彈力
纖維ノ缺如スルヲ屢之アリ是レ「ト
ラウベ」氏ノ始テ唱出セシ所ニシテ
ハ之ヲ以テ一種ノ酵母ノ彈力纖維
ヲ侵蝕スルニ由ルモノトシ而シテ「フ
井レー子」「ストール」「ニュ」及「軌近」エ
ツシ「エリツヒ」氏ハ肺壞疽ノ痰ヨリ
「チリブシン」ニ均シキ作用アル一種
ノ酵母ヲ檢出セリ其他肺色素ノ外
肺實質片中脂肪滴「マルガリン」酸針

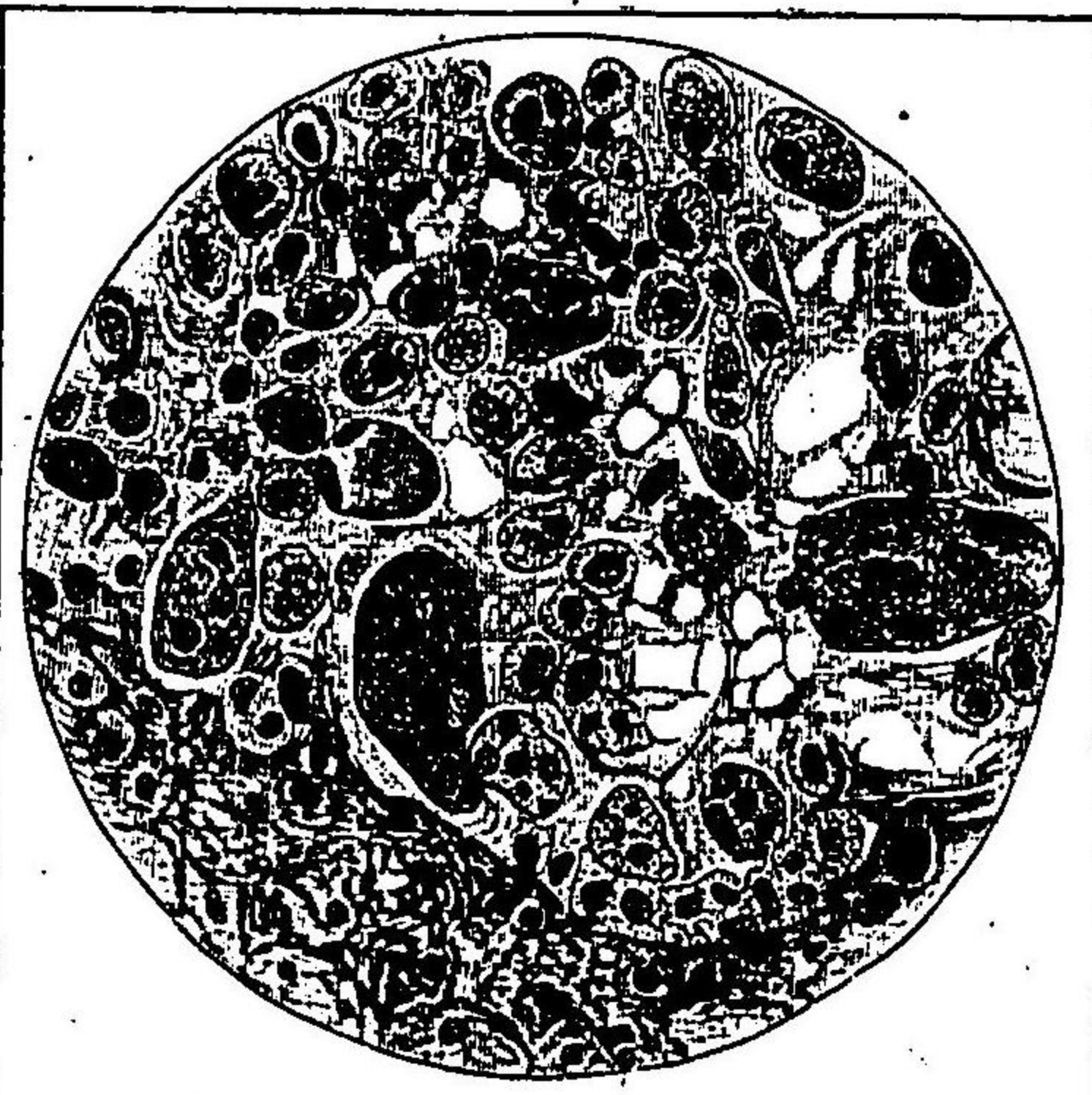
無數ノ「レプト」リキス「ブルモナリス」螺旋菌時トシ又色素塊及色素結
晶ヲ發見スルヲアリ
氣道ノ潰瘍若シ喉頭ヨリ細氣管枝ニ蔓延スルキハ其成分亦痰中ニ現
ハル、ニ至ル例之痰中軟骨片ノ現出スルヲアルハ人ノ屢實驗セル所
ナリ然レモ結締織、滑平筋纖維及彈力纖維モ亦現ハル、トナキニアラ
ス

(ワ) 腫瘍片 *Geschlechtsmassen.*

肺中腫瘍發生スルキハ其一部剝離シ痰ト共ニ咯出セラル、トアリト
雖モ斯ノ如キハ甚々稀ニ見ル所トス近時余カ「クリニツク」ニ一患者ア
リ二十七歳ノ學生ニシテ今ヲ去ル半年前左上腿ノ骨肉腫ヲ以テ余カ同

第七百七十五號

略出セラレタル肺肉腫片ヨリ採取セル肉腫組織、二百七十五倍(余カ實驗)



僕クリヨーンライン氏ノ手術ヲ受ケシニ術後凡ソ三ヶ月ヲ経咯血ヲ起セシニ由テ内科クリニツクニ來レリ茲ニ於テモ亦咯血ニ由リテ二回大細胞性肉腫組織ヨリ成レル著明ナル屑片ヲ略出セシカ其造構原發性骨肉腫ト毫モ異ナル所ナク(第百七圖)就中一回ハ略出セル屑片長さ四、五センチメートルニシテ、五センチメートルノ厚徑ヲ有シタリキ

(カ) 肺凝結物

Lungenkonkremente.

時トシテ硬固石ノ如キ凝結物痰ニ由テ外泄セラレ、トアリ其長さ往々一センチメートル以上ニ達シ或ハ滑澤帶圓形或ハ多角形若シハ放射線狀ヲナス其發生ハ一様ナラスノ或ハ石灰化セル肺組織ナルトアリ然ルキハ之ヲ鹽酸中ニ侵漬スレハ明カニ肺胞ノ布置ヲ認ムルヲ得ヘシ是レ「リンドフライシニ」及「クロマン」氏ノ行ヘル所ナリ又或ハ化石セル氣管枝腺若クハ氣管枝ノ濃縮セル粘液膿液或ハ軟骨片ナルトアリ概シテ肺凝結物ノ主成分ハ石灰鹽ヨリ成ルト雖「フ」及「ブ」氏ハ一回「キサンチン」酸化物、磷酸、磷酸石灰及尿酸ノ痕迹ヲ發見セシト云フ

(三) 異物 *Fremdkörper.*

氣道ニ竄入セル異物中實地上殊ニ緊要ナルハ大氣ヨリ吸入セル塵埃トス抑モ微細ナル塵埃分子久時且多量ニ呼吸器内ニ入ルトキハ肺ノ炎症ヲ喚起スルニ到ルハ理ノ親易キ所ナリ何トナレハ塵埃ノ刺戟作用アル猶諸多ノ異物ニ異ナラサレハナリ這般ノ塵埃吸入性疾患ハ「ツエンケル」氏ニ從ヒ工夫肺患 *Pneumonokoniosen.* ト稱ス蓋或ル職業ニ従事スル輩ハ多クハ此疾患ニ罹ルモノニシテ其塵埃ノ性状ハ職業ノ種類ニ從ヒ同シカラス故ニ此疾患ニ於ケル趣味ハ醫ノ範圍ニ屬セスノ寧ロ國民理財上ニ關係アルモノトス是ヲ以テ政府法律ニ據リテ適當ナル工業條例ヲ發布シ嚴ニ之ヲ管督シ以テ職業ニ基因スル害惡ヲ防クキハ能ク之ヲ避クルヲ得ン

工夫肺患ハ一千八百六十年「トラウベ」氏ノ實驗ニ由リ開闢セルモノニシテ初メ實驗セルハ一炭工ニシテ其痰黒色ヲ呈セリ由テ之ヲ顯微鏡下ニ檢セシニ鎗狀ニシテ不整ナル饒多ノ黒色及褐色ノ塊片ヲ檢出シ之ヲ精索セシニ松樹ノ木質細胞ノ炭化セシモノナルヲ知ルヲ得タリ(第百八圖)而シテ「氏」ハ此物質ヲ患者ノ働作セル木廠ヨリ得タル炭粉中ニ發見シ又死後剖檢セシニ炭分子一部肺胞内ニ竄入セルヲ見タリト云フ其他氏ハ更ニ實驗及動物試験ニ據リ炭分子ノ一部ハ直接ニ一部ハ遊走細胞ニ由リテ肺胞ヨリ間質結締織内ニ入り次テ氣管枝腺中ニ進入セシヲ發見セリ之ヲ名テ炭工肺患 *Pneumonokoniosis anthracotica.* ト云フ若シ之ヨリ著明ノ肺癆症狀ヲ呈スルキハ工夫肺癆ト稱ス此種ノ肺患ハ隧道ノ開鑿ニ従事セル石炭工夫及鐵道工夫ニ最モ屢見ル所ナリ但之ニ在テハ痰中見ル所ノモノハ石炭若クハ褐炭ナルハ素

第百八圖

略痰中ヨリ得
タル炭分子、
二百九十倍
（「トラウベ」
氏ニ由ル）



ヨリトス此際略痰ハ炭色ヲナスヲ稀ナラス試ニ之ヲ顯微鏡下ニ檢ス
ルルハ容易ニ密集セル細小ナル炭分子粘液球膿球及肺胞上皮ヲ穿貫
シ又其一部饒多ニ遊離存在スルヲ見ル蓋此疾患ノ外徴ハ「トラウベ」氏
ノ發見ニ先チ既ニ世人ノ知了セルハ亦掩フヘカラスト雖モ其發生ニ
就テハ謬見ヲ免カレサリシ何トナレハ當時茲ニ見ル色素ヲ以テ動物
性ニシテ血色素ヨリ來ルモノトシタレハナリ

許多ノ健康體ニ在テモ前夜塵埃饒多ニノ喫煙及燈煤ヲ以テ飽和セル
集會室ニ駐リシキハ殊ニ翌朝暫時性ノ炭工肺患ヲ現ハスヲアリ即チ
痰ハ煙様灰色ヲナシ顯微鏡下ニ照スルハ恰モ持續性ノ炭工肺患ニ於
ケルカ如ク炭粉一部ハ遊離シ一部ハ膿球及粘液球内ニ存スルヲ見ル
蓋遊走細胞ハ多少大氣道ヲ清淨ナラシムルノ作用ヲ有スルモノナリ
「ツエンケル」及「メルケル」氏ハ其後鐵粉ヲ吸入セル患者ノ實驗ヲ記載セ

リ(鐵工肺患 *Pneumonokoniosis sideratica*)而シ鐵粉ノ化學的性質ニ從ヒ其痰或ハ酸化亞酸化鐵ノ黑色ヲナシ或ハ燐酸酸化鐵ノ赭黃色及赤色ヲ呈ハシ而シテ剖檢ノ際肺ニ於テモ亦同様ノ變化ヲ見シト云フ

顯微鏡上證明シ得ヘキ工夫肺患ハ輒近頗ル増加スルニ到レリ例之「ウルトラマリン」粉ヲ吸入セルルハ其痰青色ヲナシ(ウルトラマリン)「デス」煙草製造者ハ淡褐色及帶褐淡黑色ノ痰(タバコ)「ガス」ヲ咯出スルカ如シ又「ブンメルブロー」氏ハ許多ノ有益ナル實驗ヲ報告セリ其一ニ曰ク一女工裁縫ノ際綿毛ノ纖維ヲ吸攝シタリシニ痰中容易ニ之ヲ發見シ且喉頭鏡檢査ノ際喉頭粘液膜上黑色ノ斑點ヲ見タリシト其他佛國ノ醫家ハ綿花粉ノ吸入ニ由テ屢肺患ヲ招來スルヲアルヲ示セリ

異物ノ第二屬ハ隣接器關ヨリ呼吸器道ニ竄入シ次テ咳嗽ニ由リテ咯出セラル、モノ是ナリ今之カ實例トシ茲ニ「ハルラン」氏ノ實驗ヲ引用

セントス即チ嘗テ久時膿痰ヲ惱メル十二歳ノ一小女アリ一日突然骨片ヲ咯出セリ此ニ於テ百方之ヲ檢索シ遂ニ脊柱骨瘍ノ氣道ニ破潰セシモノナルヲ發見セリト

終ニ臨ミ嚙下ニ由リテ氣道内ニ達セル一二ノ異物ヲ記述セントス是レ殊ニ小兒ニ屢見ル所ニシテ其性質ハ之ヲ一定スルヲ得ス何トナレハ其嚙下ハ多クハ偶然ノ遊戯ニ出レハナリ時トシテ斯ノ如キ異物氣道内ニ達スルモ患者之ヲ知ラサルヲアリ余近時地方ヨリ來レル一男子ヲ診療セシ「ア」リ該患者頻リニ右胸側ノ不快感覺ヲ訴フルモ右第一二肋間腔ニ於テ呼吸音微弱トナレルノ外他ニ毫モ變化ヲ徵知スルヲ得サリシ此ニ於テ余其後更ニ數回精密ノ診査ヲ行ヒシモ毎ニ之ヲ診斷スル能ハカリシニ一日診査後患者余カ談話室ニ來リ告クルニ患者歸途自己ノ家前ニ於テ突然烈シキ咳嗽ヲ發シ多量ノ粘液ト共ニ圓形ノ

固體ヲ略出セルヲ以テシ余ニ淡黑色ノ圓形體ヲ示セリ此ニ由テ試ニ之ヲ鋸斷セシニ其厚徑數ミルリメートルニ加爾基性ノ殼ヨリ包裹セラレタル櫻實核ナリシヲ知リ而シテ患者從來ノ苦痛頓ニ消散セリ從來ノ疑團釋然氷解セリ而シテ患者ハ毫モ嘗テ櫻實核ヲ氣道内ニ嚥下セシヲ記セサリキ

(タ) 痰ノ偶在性混合物

Zufällige und unwesentliche Beimengungen des Auswurfes.

痰ノ偶在性混合物ニ屬スルハ就中口腔及咽頭ニ殘留シ略痰ニ由リテ痰中ニ混セル食物ノ殘片是ナリ斯ノ如キモノニ於テハ痰中各種ノ組織ヲ見ルト雖モ少シク顯微鏡検査ニ慣レタルモノハ容易ニ之ヲ辨別

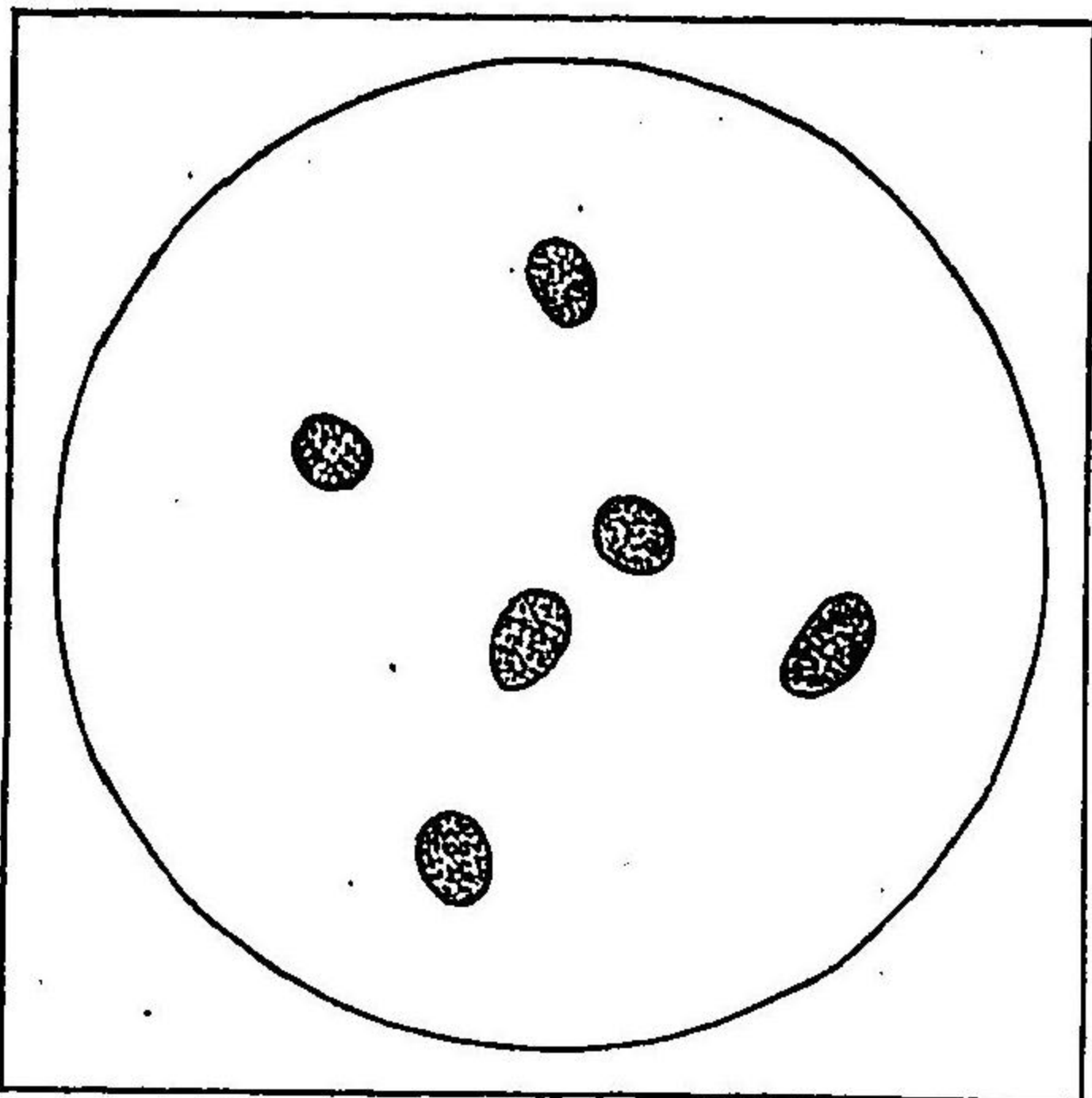
スルヲ得ン故ニ之ヲ以テ呼吸器ニ歸スルカ如キハ其罪多クハ檢索及診斷的解釋ノ不注意ナルニ由ラスンハアラヌ

痰ノ種類

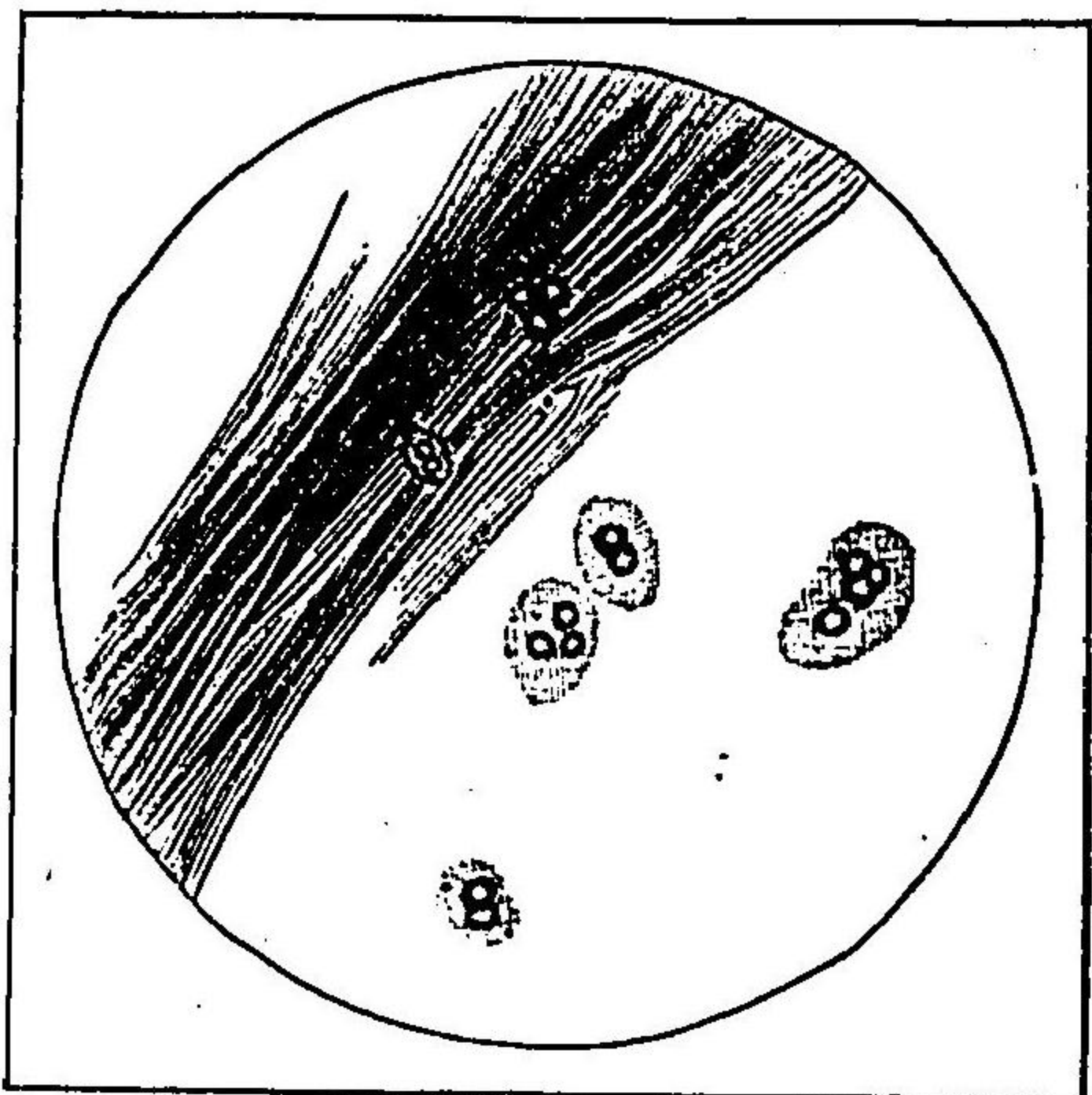
Eintheilung der Sputa.

「ピールメル」氏始テ痰ヲ其主成分ニ從ヒ數種ニ分類セントセリ蓋這般ノ表式的分類ハ實地上亦要ナキニアラス何トナレハ屢單純ナル名辭ニ由リ粗ホ痰ノ性狀ヲ知ルヲ得レハナリ是ニ由テ今痰ヲ別テ五種ト爲ス即チ粘液痰、膿痰、粘液膿痰、血痰及漿液痰是ナリ
粘液痰ハ呼吸器粘液膜加答兒ノ初期ニ屢見ル所ニシテ透明硝子様ヲナシ粘靱ニシテ縷ヲ引クノ性アリ其主成分ハ粘液素ヨリ成リ從テ之ニ亞爾箇保兒若クハ醋酸ヲ加フレハ灰白色ノ雪片様及絲狀溷濁ヲ生シ又

第百九圖



第百十圖



粘液痰、二百五十倍
第百九圖ハ變化セサルモノ
第百十圖ハ醋酸ヲ加ヘシモノ

之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ細胞成分稀少ニシテ諸部ニ顆粒狀ノ溷濁ヲ有
スル透明ナル基質中僅ニ粘液球及膿球ノ散點スルヲ見ルノミ試ニ標
本ニ醋酸ヲ加フルキハ直ニ線狀紗狀及顆粒狀ノ雲翳ヲ生シ兼テ膿球
ノ胞核明瞭トナルヲ見ル(第百九圖及第百十圖)

粘液痰 *Schleimiges Sputum*. ハ古人ノ所謂生痰 *Sputum cridum*. ニシテ通常加答
兒ノ初期ニ於テハ粘性微弱ニシテ爾後痰中多量ノ唾液ヲ混スルニ到レ
ハ其粘性消失ス而シテ粘韌ナル粘液痰ハ多クハ泡沫ヲ含ムト僅少ナル
モ其痰ノ稀釋ナルモノ殊ニ烈シキ咳嗽ニ由テ咯出セラレタルモノハ
表面無數ノ氣泡ヲ以テ覆ハルルヲ見ル

膿痰 *Eitriges Sputum*. ハ其外觀并ニ性状尋常膿瘍ノ膿汁ニ同シク帶綠黃
色不透明ニシテ流動シ易ク顯微鏡下ニ檢スルニ密集セル無數ノ膿球ヨ
リ成リ而シテ膿球ノ一部ハ既ニ脂化ヲ呈セリ臭氣ハ弱クシテ往々一種ノ

酸臭及牛酪樣臭ヲ呈スルモ久時停滯シテ分解スルニ到レハ不快ノ臭氣ヲ放ツモノトス又之ヲ暫時靜置スルハ膿球漸次ニ器底ニ沈降シ從テ痰液二層ニ分レ下層ハ沈渣狀ニシテ主トシ膿球ヨリ成リ上層ハ液性ニシテ膿漿之カ主成分ヲ爲ス若シ膿痰甚シク泡膿セルハ泡沫之カ第三層ヲ爲スニ至ル

膿狀痰ハ多クハ只二種ノ關係ニ於テ見ルモノニシテ即チ肺膿瘍及近傍ヨリ肺及氣管枝内ニ破潰セル膿瘍是ナリ其量ハ通常饒多ニシテ一日中一〇〇〇立方センチメートルニ達スルコトアリ

粘液膿痰 *Schleimige-eitriges Auswurf*. ハ屢遭遇スル所ノモノニシテ粘液分ハ硝子樣粘靱ニシテ透明ナルモ膿分ハ不透明帶黃綠色ニシテ膿狀ヲナスカ故ニ粘液分ト膿分トハ肉眼上容易ニ之ヲ區別スルヲ得ヘシ而シテ膿ト粘液含有部分トハ多クハ密ニ相融和セルモノニシテ兩者ノ境界漸次ニ

相移行ス此密ニ相混和スル粘液膿痰ハ氣管枝加答兒ノ末期ニ最も多ク見ル所ニシテ古人ノ熟痰 *Sputus Coctum*. ト稱セシモノ即チ是ナリ然レハ或ル粘液膿痰ハ之ニ反シ膿塊周縁判然タル著明ノ斑ヲナシ稍廣濶ニシテ透明ナル粘液層ニ由リテ近位ノ小膿塊ヨリ分離セラル若シ痰中膿塊ノ稠度僅微ナルハ略痰唾壺ノ底面ニ於テ銳縁ヲ有セル圓形若クハ錢貨狀ノ斑ヲナスコトアリ故ニ此種ノ痰ハ既ニ往時ヨリ圓形痰又貨幣狀痰 *Sputum rotundum s. numulosum*. ノ名アリ抑モ此痰ハ主トシ肺腔洞ニ於テ見ルモノタルハ從來ノ經驗ニ由テ明カニシテ慢性氣管枝加答兒ニ於テモ亦類似ノ形狀ヲ呈ハスコトナキニアラサルモ之ニ在テハ膿塊ノ周縁銳利ナラス其圓形不整ナルヲ以テ異ナレリ

其發生并ニ診斷上ノ關係貨幣狀痰ニ最も近キハ球形痰 *Sputum globosum* ニシテ又一ニ塊狀痰 *Klumpiges Sputum*. ノ名アリ全體水分ニ富ミ箇々ノ膿

塊ハ頗ル膿稠ナルヲ以テ液中ニ在テハ相混和シテ球形トナリ浮泳スルヲ見ル而シテ其氣胞ヲ含マサルモノハ唾壺ノ底面ニ沈降スレモ茲ニ於テモ尙ホ遊離セル帶黃灰白色ノ膿塊トナリテ存ス古人ハ之ヲ求底球狀痰 *Sputa globosa fundum petentia*. ト名ケ其腔洞ノ診斷上ニ於ケル關係恰モ貨幣狀痰ニ等シキモノトセリ是ヲ以テ通常亦之ヲ名ケテ腔洞痰 *Kavernises Sputum*. ト云フ蓋球形痰ハ慢性肺癆ニ於ケル腔洞内ノ粘稠ナル膿性分泌物ナルヲ以テ主トシ肺癆ノ末期ニ於テ之ヲ見ル血痰 *Blutiges Sputum*. ハ殆ト若クハ全ク血液ノミヨリ成ルモノニシテ其量ハ短小時間内ニ於テ五〇〇加之一〇〇〇立方センチメートルニ達スルヲアリ此血液ハ通常鮮紅色即所謂動脈性ニシテ屢密ニ泡沫ヲ混ス而シテ肺出血愈迅速ニシテ且多量ナルキハ大ナル動脈管ノ破開セルモノト見做スヘキハ固ヨリトス

肺出血ト胃出血トハ之ヲ鑑別スル頗ル困難ナルヲアリ斯ノ如キニ際シテハ宜シク次ノ徵候ニ據ルヘシ
 胃出血ニ於テハ血液暗黒靜脈血様ニシテ塊狀ニ凝固シ氣泡ヲ缺クモ肺出血ニ在テハ之ニ反シ動脈性ニシテ空氣ヲ含有ス
 咯血ニ於テハ血液亞爾加里性反應ヲ呈スルモ吐血ニ在テハ胃内容物ノ之ニ混スルヲ以テ大抵酸性ニ反應ス
 又之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ肺ヨリ來レル血液ハ多クハ氣道ノ細胞成分ヲ含有スルモ胃ニ起源セル血液ハ食物ノ殘片ヲ混スルヲ常トス
 出血ノ本源肺ニ在ルカ將タ胃ニ在ルカハ多クハ血液ノ外泄咳嗽ニ由ルカ或ハ嘔吐ニ由ルカニ從テ之ヲ決定スルヲ得然レモ出血俄然ニシテ其量饒多ナルキハ時ニ誤謬ヲ來スヲナキニアラヌ蓋肺出血甚タ多量ナルキハ咯出ノ際血液ノ一分偶嚥下セラレ更ニ嘔吐ニ由テ吐出スル

ニ由リ患者之ヲ吐血ト誤想シ專ラ其因ヲ胃ニ歸スルヲアリ是レ吐血ニ於テモ亦見ル所ニ即チ嘔吐ノ際血液ノ一分喉頭内ニ達スルルハ咳嗽ヲ刺戟スルヲ以テ患者誤テ之ヲ咳血トナスナリ
 其他尙疑似決シ難キノ症ニ臨ンテハ既往症及他覺的症狀ニ徴シ以テ疾患ノ呼吸器ニ在ルヤ將タ胃ニ在ルヤヲ探檢スヘシ
 咳嗽ニ由テ咯出セラレタル血液ト雖モ必スシモ呼吸氣道ニ源由スルモノニアラサルハ宜ク銘心セスンハアルヘカラス何トナレハ鼻腔咽頭或ハ口腔ノ出血不識不知喉頭内ニ流注シ痰ヲ咯出スルノ際始テ之ニ混和シ恰モ呼吸器道ヨリ出血セルカ如キ觀ヲ呈スルヲ之アレハナリ
 血痰ハ肺實質ノ崩壞性疾患ニ於テ皆現ルト雖モ就中最モ頻數ナルハ肺癆トス然レモ肺膿瘍時トノ亦肺膿瘍ニ於テモ著明ナル咳血ヲ發

起スルヲナキニアラス又或ル症ニ於テハ肺血管直達ノ損傷ニ由ルヲアリ例之肺實質ノ損傷動脈瘤ノ破裂、包蟲胞ノ溶崩及肺毛細管過度ノ鬱血ニ於テ發スル所ノモノ是ナリ其他栓塞性ノ出血モ亦茲ニ屬スルモノトス
 氣管枝出血ハ屢劇甚ノ咳嗽ニ由リ發スルモノニシトノハ腐敗性氣管枝炎ニ於テ見ル如ク亦粗大ナル崩壞性疾患ニ關スルヲアリ
 喉頭若クハ氣管ニ原因スル純粹ナル血痰ハ稀ニ見ル所ニ通常喉頭鏡及氣管鏡檢査ニ據レハ之ヲ診定スル容易ナリ
 血痰中二種ノ別アリ其一ハ血液單ニ咯痰ヲ染色シ一ハ血液密ニ之ヲ混和ス
 染血痰ノ特徴ハ血液ノ小量ナルニ在リテ點狀、斑點狀若クハ細線及紋理ヲナシテ粘液痰、粘液膿痰或ハ膿痰ニ混在ス若シ這般ノ出血反復シ

テ久時ニ瀰ルキハ初期肺癆ノ疑ヲ起サ、ル可ラス然レモ其暫時性ノモノハ纖維索性肺炎ノ初期及末期、氣管枝加答兒及呼吸器粘液膜ノ小實質缺損ニ於テモ亦現ハル、所ナリ

血液密ニ混和セル咯痰ハ通常一定ノ色ヲ帶フルモノニシテ屢其色ノ或ル肺患ニ固有ナルヲアルハ既ニ上章記述セル所ニシテ例之纖維索性肺炎ニ於ケル鏽色痰、橙黃痰及梅汁痰、腐敗性氣管枝炎及肺壞疽ノ粘土色痰並ニ出血性梗塞及粟粒結核ノ帶紅褐色及帶褐紅色痰ノ如キ是ナリ凡テ此種ノ咯痰ハ常ニ色澤ノミナラス顯微鏡検査上亦染色痰ト異ナルモノニシテ即チ乙ニ於テハ赤血球簇ヲ爲シテ存在スルモ甲ニ在テハ平等ニ痰ノ諸成分間ニ散在ス

漿液痰 *Serous Sputum*. ハ肺水腫ニ固有ニシテ通常ハ饒多ノ泡沫ヲ雜ヘタル透明淡黃色ノ稀液ヲナシ其狀宛モ卵白ヲ雪中ニ注キ然ル後之ヲ溶

融シタルノ際見ルモノニ比スルヲ得ヘシ或ハ又石鹼水ニ等シキ觀ヲナスヲアリ蓋漿液痰ハ肺血管ヨリ滲漏セルモノニシテ畢竟稀薄ナル卵白溶液ニ他ナラサルヲ以テ甲ノ比較ハ殊ニ適切ナルカ如シ而シテ此痰ハ液分ノ量ニ比スレハ細胞成分ニ乏クシテ粘液球、膿球、肺胞上皮及赤血球ヲ含有ス若シ赤血球ノ數許多ナルキハ屢肉羹汁樣色ヲ呈スルニ至ル

第六節

呼吸器諸病ノ理學的診査

*Physikalische Dia-**gnostik der Erkrankungen des Respirationorgane.*

呼吸器ノ理學的診査法ハ其性質ヨリ之ヲ見ルモ呼吸器造構ノ理學的

性狀ヲ知ルニ過キスノ病狀ノ如何ニ至テハ理學的診斷學ノ範圍ニ屬スルモノニ非ス蓋現在ノ理學的症狀ニ據リテ之カ病原ヲ推測スルカ如キハ獨リ病床經驗ノ務ムル所ナリトス
 初學者疾患ヲ診斷スルニ際シ理學的診査法能ク其正規ニ適フト雖モ之カ結果ノ誤謬ニ出ツルコトアルヲ訴フルハ屢吾人ノ耳ニスル所ニシテ要スルニ嘗テ此診斷的過失ニ陥リシコトアルハ何人ト雖モ之ヲ辭スルヲ得サルヘシ然レモ之ヲ以テ遽ニ理學的診斷法ノ罪ニ歸セントスルカ如キハ抑亦謬見タルヲ免レサルナリ蓋醫ノ診斷タル理學的診査ヨリ得タル直達ノ結果及病床經驗ノ二者相待テ始テ其正鵠ヲ得ルモノナルカ故ニ若シ診斷迷誤ニ陥ルコトアラシメハ(理學的診査法瑕瑾ナキト假定ノ職ト)第二ノ診斷法即チ病床經驗ヲ忽ニセルニ由ラスンハアラス

余ハ以下呼吸器諸患ノ理學的診斷法ニ就テ畧述スル所ヲラントス

(イ) 氣管枝諸病

Erkrankungen der Bronchien.

氣管枝ノ疾患ハ廣部ニ蔓延シ頗ル患者ヲ苦惱セシムルノ際ト雖モ之ヲ徵知スヘキ理學的變化ヲ呈ハサ、ルコトアリ今之ヲ例センニ疾患氣管枝ノ始部及其分岐部ノ近傍ニ位スルハ患者劇シキ咳嗽刺戟持久セル癢痒感覺及胸廓上ノ疼痛感覺ヲ訴フルモ他覺上異常ヲ證スル能ハサルナリ
 病竈肺ノ内部ニ存在シ其周圍含氣肺實質ヨリ被覆セラル、モ亦之ニ異ナラス故ニ斯ノ如キ狀況ニ於テハ雷ニ咯痰ノ性狀ヨリ之ヲ診決シ得ルノミ夫ノ他ニ異常ヲ呈ハスコトナク日々多量ノ痰ヲ咯出スル

「アルハ殊ニ」ウ非ントリツヒ氏ノ注視セル所ナリ
然レモ斯ノ如キ際ニ臨テハ咯痰ハ音ニ疾患ノ存在ヲ示スニ止マラス
同時ニ病機ノ性質ヲ告クルモノニシテ痰中肺ノ組織成分久時缺如スル
ハ疾患ノ氣管枝ニ在ルヲ知リ又痰ヲ咯出スルヲ稀ナルモ毎回ノ咯出
量饒多(滿口)ナルキハ氣管枝擴張タルヲ察セサルヘカラス若シ夫レ咯
痰腐敗臭ヲ放チ上記細菌性氣管枝栓子ヲ含有シ且分層ノ傾向アルキ
ハ疾患ノ腐敗氣管枝炎タルヲ診決スルモ敢テ遠カラス
淺在性ニシテ徵知シ易キ氣管枝ノ變化中殊ニ屢遭遇スルハ液質氣管枝
内ニ滯留スルノ症ニシテ往々頗ル多量ニ達スルヲアリ是レ囉音發生ノ
原因トナルモノニシテ其音性ハ液ノ粘否ニ從ヒ一様ナラス即チ液汁頗
ル粘靱ニシテ大氣管枝内ニ存スルキハ類鼾音細小氣管枝内ニ位スルキ
ハ笛音及叱音ヲ放チ之ニ反シ液質稀薄ナルキハ濕性囉音即チ水泡音

ヲ發ス而シテ其音ノ大小ニ由リ患部ノ所在ヲ決スルヲ得ヘシ何トナレ
ハ罹患氣管枝ノ口徑愈大ナレハ囉音多クハ愈大水泡性トナレハナリ
若シ疾患細小氣管枝ニ局スルキハ所謂捻髮音ヲ呈ス
抑モ囉音ノ強弱ハ患部ノ淺深ヲ決シ其廣狹ハ病機蔓延ノ度ヲ定ムル
ニ足ルモノニシテ又疾患獨リ氣管枝ニ局スルキハ囉音鑼性ヲ帶フルヲ
ナシ是レ他ナシ鑼性囉音ノ發現ハ常ニ周圍肺實質ノ變硬ヲ要スレハ
ナリ然レモ液質ノ粘液ナルカ膿液ナルカ將タ血液ナルカハ獨リ咯痰
ニ由リテ之ヲ決シ得ルノミ
氣管枝内ニ滯留セル液質多量ニシテ諸部ニ於テ之ヲ閉塞スルキハ氣管
枝閉塞ノ理學的徵候ヲ呈ハスニ到ル但此症候ハ獨リ液質ニ由テノミ
發スルモノト誤想スヘカラス何トナレハ嚥下セル異物及纖維素性分泌
物共ニ同一ノ症候ヲ呈スルヲアレハナリ加之氣管枝ノ外部ヨリ壓迫

セラル、片亦之ヲ招來ス
 氣管枝ノ閉塞ハ該氣管枝區域部ニ應スル胸部ノ呼吸運動幽微ナルカ
 若クハ全然缺如シ且吸氣ノ際肋間腔退陷スルヲ以テ既ニ視診上之ヲ
 知ルヲ得而ノ閉塞大氣管枝ニ起ルカ或ハ病機蔓延性ナルキハ皮膚蒼
 色症ノ徵ヲ呈シ呼吸困難トナル
 觸診ハ此際頗ル貴要ナル症候ヲ示スモノニ即チ胸面ノ患部ニ應ス
 ル部位ニ於テハ聲音震顫缺如ス
 之ヲ打診スルニ初期ニ於テハ肺胞猶空氣ヲ含有セルヲ以テ毫モ變常
 ヲ認メサルモ閉塞稍持長スルキハ打診音低調ニノ鼓性ヲ帶フルニ到
 ル是レ閉塞部後際ノ空氣吸收セラル、ニ由ルナリ
 聽診ノ結果ハ此症ノ診斷上殊ニ緊要ナルモノニ閉塞氣管枝ノ區域
 部ニ應スル胸面ニ於テハ呼吸音ヲ聽取スルヲ得ス他ナシ喉頭ヨリ氣

管枝内ニ傳播セル呼吸音閉塞部ニ於テ杜絶セラルレハナリ氣管枝聲
 ノ消散スル亦此理ニ外ナラス
 障碍物ノ性質ハ他ノ徵候ヲ待テ始テ決シ得ル所ニ若シ饒多ノ囉音
 存在スルキハ屢其閉塞滯留セル多量ノ液質ニ由ルヲ察スヘク嚥下セ
 ル異物ノ之カ原因タル片ハ多クハ既往症ニ由リテ之ヲ決定スルヲ得
 又氣管枝粘液膜上ノ纖維性分泌物ニ於テハ咯痰中氣管枝凝固物ヲ見
 ルヘシ而ノ外部ヨリノ壓迫ニ基因スルモノニ至テハ宜シク其原因ヲ
 近接器關(心臟、大動脈幹、縱隔腔、淋巴腺等)ニ索メサルヘカラス
 氣管枝狹窄ハ氣管枝ノ閉塞ト常態トノ中間ニ位シ從テ其理學的症狀
 亦兩者ノ間位ヲ占メ而ノ狹窄愈高度ナルキハ愈閉塞ノ徵候ニ類似ス
 ルニ到ル其原因ハ氣管枝閉塞ト異ナル所ナシ
 氣管枝狹窄ノ度、氣管枝粘液膜ノ加答兒性腫脹ニ於ケルカ如ク輕微ナ

ル片ハ通常先ツ呼吸音其性質ヲ變シテ或ハ銳利トナリ或ハ歇止シ又或ハ呼吸著ク緩徐トナリ且屢聳音笛音及ヒ叱音ヲ併發ス
 狹窄ノ度一層甚シキモノニ到テハ聲音震顫及氣管枝聲共ニ變弱シ患部ニ應スル胸壁ノ呼吸音及呼吸運動漸々幽微ト成リ兼テ吸期の陷凹及蒼色症ノ徵ヲ呈ハス故ニ高度ノ氣管枝狹窄ニ在テハ其症狀氣管枝閉塞ノ理學的症候ニ移行ス而シテ其原因ノ診斷ニ至テハ上文記載セルモノヲ應用シテ可ナリ
 氣管枝ノ變廣即チ氣管枝擴張症ハ擴張限割性ニシテ一定ノ大サニ達セル片ノミ診定シ得ルモノニシテ其瀰蔓性ノ擴張ニ至テハ理學的診査法ノ及フ所ニアラス故ニ斯ノ如キ症ハ唯僅カニ痰液咯出ノ狀(滿口痰)ヨリ之ヲ察シ得ルニ過キス
 大ナル限割性氣管枝擴張ハ恰モ腔洞症狀ヲ呈スルヲ以テ腔洞ノ氣管

枝ニ屬スルヤ將タ肺實質内ニ發生セルモノナルヤヲ決スルハ容易ナラス故ニ咯痰ノ検査ハ這般ノ鑑別ニ欠クヘカラサルモノニシテ若シ痰中肺實質ノ成分ヲ見サル片ハ疾患ノ氣管枝ニ在ルヲ知ルニ足ルナリ然レモ往々數回ノ検査ノ要用ナルヲアリ何トナレハ肺患ニ於テモ痰中久時肺組織成分ヲ缺如スルヲアレハナリ加之諸多ノ症ニ於テハ既往症及病床經過ノ補助ヲ仰カサルヘカラサルヲアリ

(ロ) 肺臟諸病

Erkrankungen der Lungen.

凡テ肺患ハ氣管枝疾患ニ於ケルカ如ク患部淺表ニ位スル片ノミ診定シ得ルモノニシテ若シ中心ニ在ル片ハ獨リ咯痰ニ由テ之ヲ知ルニ止ル
 一時トシ之アリ例之鏽色痰ニ由テ纖維素性肺炎ノ發生ヲ知ルカ如シ又

中心性肺膿瘍及壞疽竈モ獨リ咯痰ノ性質ヨリ之ヲ診斷スルニ止マル
コアリ

診斷上樞要ニシテ唯リ理學的診法ニ由テ解釋シ得ルモノハ肺境界ノ計
測ニシテ其異常ハ三種アリテ或ハ兩側ニ於テ不同ト成リ或ハ兩側等シ
ク尋常ノ境界ヲ超過シ若クハ退縮スルコアリ

兩側肺境界ノ位置不同ナルハ肺尖ニ於テ比較的屢際會スルモノニシテ
慢性硬化及萎縮ノ經過中ニ發生シ而シテ「エ、ザイツ」氏ノ詳論セル如ク潜
伏セル肺癆ノ診斷ニ頗ル喫緊ナルモノトス但其詳細ニ就テハ上章局
所打診ヲ論スル際既ニ之ヲ陳述セリ

肺臟容積ノ増大ハ急性肺膨脹ニ於ケルカ如ク其發生往々急性ナルコ
アリテ暫時ノ後退縮スルアリ或ハ久時持續シ氣胞性肺氣腫ノ名ヲ得
ルニ到ルコアリ此變化ハ多クハ兩側性ニシテ其偏側ニ止ルコアルハ稀

ナリ而シテ右肺ノ増大ハ打診上肺臟下縁尋常ノ境界ヲ超ユルヲ以テ之
ヲ測知スルヲ得ヘク又左肺ノ増大ハ之ニ反シ管ニ其下縁低下スルノ
ミナラス前中縁左胸骨縁ニ接近スルニ由リ換言スレハ左肺ノ前面心
嚢ノ前面ヲ覆ヒ以テ心濁音部ヲ縮小セシメ若クハ消失セシムルニ由
リ之ヲ識ルヲ得加之肺容積増大スルハ横隔膜ハ低下セサルヘカラ
サルヲ以テ心臟ハ勢ヒ下降セサルヘカラス從テ心尖搏動左第六肋間
腔ニ轉シ兼テ心臟下位ノ鼓音部即チ後章所謂半月部ハ縮小シ殊ニ其
高徑短縮スルニ至ル

又之ヲ打診スルニ肺臟境界ノ呼吸的變化著シク減小セルヲ見ル是レ
非常ニ擴張セル肺臟ハ呼吸間著明ナル膨脹ヲ得ルニ難ケレハナリ
若シ斯ノ如キ肺臟ノ擴張久時ニ瀰ルキハ亦胸形ニ關係ヲ及ホスモノ
ニシテ所謂永久吸氣的胸廓ヲ爲サシムルニ到ル

疾病高度ナルモノニ於テハ聲音震顫及氣管枝聲減弱シ且呼吸運動不全ナルカ爲メ從テ呼吸音微弱トナル

肺臟ノ容積ハ二種ノ状態ニ於テ縮小スルモノニ或ハ腹腔ヨリ壓迫セラル、ニ由リ或ハ肺實質自己ノ萎縮機之カ原因ト成ル蓋肺縮小ニ於テ腹腔ノ器關ニ毫モ徵スヘキノ變化ヲ認メサルキハ其原因肺實質ニ在ルヤ明カナリ今吾人ハ肺萎縮ノ理學的徵候ヲ述フルニ當リ專ラ肺自家ニ基因スルモノヲ記セントス

肺ノ縮小ハ已ニ視診及打診上之カ特徴ヲ發見シ得ルモノニ胸廓ハ肺ノ縮小ニ應シ其徑線著ク短縮ス是レ通常肋間腔ノ變狹呼吸運動ノ減弱及脊柱側彎ノ合併スルカ故ナリ又之ヲ打診スルコト下肺緣ハ尋常ヨリ高位ニ在リテ其健康時トノ差ニ據リ萎縮ノ度ヲ數學的ニ表彰スルヲ得ヘシ殊ニ萎縮左肺ニ發スルキハ其症狀頗ル顯著ニシ心臟ハ橫

隔膜ノ上舉ニ應シテ上昇シ心尖搏動屢第四左肋間腔ニ轉シ從テ半月腔ノ高徑増加シ又左肺中緣強ク外方ニ退縮スルカ爲メニ肺動脈ノ起始部曝露シ其縮期的膨脹第二左肋間腔ニ於テ視觸シ得ヘシ

觸診及聽診ニ於テモ亦理學的變化ヲ見ルト雖モ是レ寧ろ原病ニ關スルモノニ例之聲音震顫及氣管枝聲ノ強盛并ニ氣管枝呼吸音ノ如キ肺組織硬固ト成レル症候ニ他ナラス

理學的診查ノ專有セル所ニシテ病理上頗ル樞要ナルハ肺容積ノ呼吸的變化ニシテ健全ナル状態ニ在テハ吸氣毎ニ増加シ呼氣毎ニ減小ス其差安靜ナル呼吸ニ於テハ僅微ニ過キスト雖モ深呼吸ニ於テハ著明トナリ殊ニ側位ニ於テ呼吸ヲ營ム際ニ然リ然レモ此肺臟ノ呼吸運動及變化ハ唯リ補充腔ノ存在スルノ間發現スルモノトス蓋補充腔ハ專ラ増大セル肺臟ヲ受容スルノ用ヲナスナリ

若シ炎症癒着ニ由リテ補充腔閉塞スルニ到ルキハ肺縁ノ呼吸的變位減制セラル、カ或ハ全ク歇止スルニ由テ之ヲ知ルヘシ從テ肝臟ハ呼吸期及吸期ニ當リ常ニ同高部ニ止リ心濁音ノ呼氣的縮小缺如スルニ至ル半月部ニ於ケルモ亦然リ此種ノ炎症機ハ全然潜伏性ニ經過スルヲ往々之レアリ故ニ斯ノ如キ症ニ臨テハ診斷上理學的診査法ノ非常ニ重要ナルハ親易キ所ナリ

液質肺胞内ニ集積スルキハ其理學的症狀主トシ液汁ノ空氣ヲ含有スルト然ラサルトニ關スルモノニシテ若シ全ク無氣ナルキハ其發症後文記載セル肺胞無氣塊ヲ以テ充實セラル、ノ際發スルモノニ異ナラス然レモ通常ハ猶多少ノ空氣ヲ含有スルモノニシテ以下之ヲ論セントス其主徵候ハ捻髮音ノ發生ニシ又之ヲ打診スルキハ屢鼓音及濁音ヲ聽キ視診ニ於テハ呼吸運動障害ノ徵ヲ見ル然レモ液質ノ血液ナルカ滲

出物ナルカ將タ滲漏物ナルカハ唯リ理學的診査法ヲ以テ之ヲ決スルヲ得ス蓋液汁ノ性質ハ多クハ略痰ノ性状ニ由テ之ヲ知ルヲ得ヘシ又時トシテハ既往症及病床經過ノ必要ナルヲアリ

然レモ諸多ノ症ニ於テ捻髮音ノ發生ヲ以テ直ニ其肺胞ノ疾患タルヲ診決スルハ決シテ適正ナルモノニアラス何トナレハ既ニ記述セル如ク液質細氣管枝端ニ集積スルキハ肺胞ニ異常ナキモ亦捻髮音ヲ發生セシムレハナリ而シテ是カ鑑別ハ亦既往症病床經過及時トシテ略痰ノ性状ニ據テ爲スヲ得ルナリ

肺胞無氣質ヲ以テ充實セラル、キハ其理學的症候上者ト異ナルニ到ル此無氣質ハ多クハ纖維素若クハ乾酪塊ニシテ其液質ナルハ稀ナリ其他腫瘍モ亦肺胞ヲ充填スルヲアリト雖モ稀有ノ發症ニ屬スルハ素ヨリ論ヲ要セス

此症ハ視診スルニ通常呼吸運動ノ際胸廓ノ擴張不全ニシテ聲音震顫ハ患部ニ於テ強盛シ氣管枝聲モ亦然リ時トシ山羊聲或ハ「バツゼリ」氏ノ現象ヲ見ルコトアリ是上章已ニ論セシ所トス又之ヲ打診スルニ濁音ヲ放チ肺上葉ニ於テハ「ウヰルリアム」氏氣管音ヲ呈ハスコト往々之アリ聽診ニ於テハ氣管枝呼吸音ヲ聽取シ又囉音發生ノ機會アルキハ其音多クハ鑛性ヲ帶フ

無氣物質ノ性質ヲ診定スルニ當テハ咯痰ノ検査ヲ以テ缺クヘカラサルモノトス例之纖維素性肺炎ニ於ケル鏽色痰ノ如シ其他既往症及病床經過モ亦之ヲ精索スルヲ要ス

限劃性ノ腔胸胸壁下ニ存在スルキハ其氣管枝ノ擴張ヨリ發生スルト肺實質ノ崩壞ニ基因スルト及包裹性ノ氣胸若クハ膿氣胸ナルトヲ問ハス理學的症狀常ニ同一ナリトス而シテ腔洞ノ位置ハ咯痰ノ性状既往

症及病床經驗ニ由テ之ヲ決スヘキモノニシテ又肺組織内ニ發生セルモノハ管ニ部位ノミナラス多クハ同時ニ腔洞ノ性質ヲ檢索スルヲ要ス
(結核、膿瘍、壞疽、包蟲等)

腔洞ノ理學的症候中最モ正確ナルハ鑛性音ナリト雖モ唯リ腔洞ニ特有ノ症候アルコトナシ加之腔洞ノ著明ナル理學的變化ヲ呈スルニ到ルハ若干ノ大サヲ具ヘサルヘカラサルヲ察セハ之カ鑑識ハ決シテ人ノ思考スルカ如ク容易ノモノニアラサルヲ知ルヘシ

視診ニ於テハ通常胸壁ノ腔洞ニ應スルノ部稍陷凹シ呼吸的運動減弱ス然レモ咳嗽ノ際肋間腔呼吸的穹窿ヲ呈ハスコト時トシ之レアリ觸診ニ於テハ聲音震顫腔洞上部ニ於テ強盛セルヲ見ル而シテ桿狀觸診ヲ以テスルキハ胸壁ニ對向セル腔洞前壁ノ經界ヲ描出スルヲ得ヘシ又氣管枝聲ハ往々著ク強盛トナリ稀ニハ山羊聲ヲ現ハスコトアリ若シ

腔洞甚々大ニシ且壁面滑澤ナルキハ氣管枝音鏗性餘響ヲ帶ルニ到ル
 打診ニ於テハ屢濁性鼓音ヲ聽キ稀ニハ各種ノ音響變替ヲ呈スル鏗性
 打診音ヲ聽ク其際ウキントリツヒ氏音響變替ハ腔洞ノ自由ニ喉頭ト
 交通セルヲ示スト雖此現象ハウキルリアム氏氣管音喉頭及氣管ノ
 鼓性打診音ニ於テモ亦見ル所トス若シ斷絶ウキントリツヒ氏音響變
 替ヲ呈スルアルキハ之ニ據テ交通氣管枝ノ開口部ヲ知ルヲ得ヘク又
 兼テゲルハルド氏音響變替ヲ合併セルモノハ粗ホ腔洞ノ形狀ヲ測定
 スルヲ得ルナリ

腔洞上ノ鼓音ハ腔洞分泌物ヲ以テ全然充填セラレ、ニ到ルトキハ消
 失スルモノニシ又同時ニ液質并空氣ヲ含有セルモノニ在テ液質流動
 シ易ク且多量ナルキハ體位ノ變替能ク鼓音ヲ狭小シ或ハ消失セシム
 ルヲ得ヘシ又屢腔洞上ニ於テ破壺音ヲ聽取スルヲアリ其他エザイツ

氏ノ發見セル變形呼吸音ハ殊ニ緊要ナルカ如シ
 聽診ニ於テハ氣管枝呼吸音ヲ聽キ若シ腔洞大ニシ其壁質滑澤ナルキ
 ハ其音壺性反響若クハ鏗性餘響ヲ呈スルニ到ル囉音ハ有響性ニシ時
 トノ鏗響ヲ帶ヒ其強盛ナルモノハ觸知シ得ヘシハ、バース氏ハ呼氣後
 ノ囉音ヲ以テ大ニ緊要ナルモノトシ此症ノ診斷上ニ重キヲ置ケリ其
 他點滴音及振盪音ハ稀レニ見ル所ノ現象ナリトス

(ハ) 肋膜諸病

Erkrankungen der Pleura.

肋膜炎ニ於テ肋膜表面ノ粗糙ナルハ肋膜面呼吸的運動ノ際摩擦音ヲ
 放ツニ由テ之ヲ知ルヘシ而シ其音強盛ナルキハ管ニ聽知シ得ルノミ
 ナラス亦觸知シ得ルニ到ルモノニシ其際患側ノ呼吸運動ハ微弱ニシ

屢斷裂ヲナスヲ常トス是レ合併セル疼痛ニ由ルニ外ナラス而シテ「キエ
 ステル」及「フェルベル」ノ兩氏ハ單ニ肋膜ノ一面粗糙トナルモ既ニ肋膜
 炎性摩擦音ヲ發生セシムルニ足ルノ實驗ヲ報道セリ
 肋膜兩葉ノ結締織癒着ハ時トシテ肺臟ノ呼吸的移動障害セララル、ニ由
 リテ診知シ得ルコトアリ是レ癒着ノ爲メニ補充腔ノ閉塞セシキハ殊ニ
 顯著ナリトス
 癒着ノ存在ハ瓦斯若クハ液質肋膜腔内ニ集積セルモノニ在テハ聲音
 震顫及氣管枝聲兩肋膜ノ癒着部ニ於テ依然遺存シ若クハ却テ強盛ナ
 ルニ由リ之ヲ微知シ得ルコトアリ
 肋膜ノ肥厚即チ病床上所謂肋膜炎性肝腫ハ生前發見スル能ハサルコ
 屢之レアリ蓋打診音、聲音震顫、氣管枝聲及呼吸音之カ爲メニ減殺セラ
 ル、ニ到ルハ肥厚殊ニ高度ナラサルヘカラサレハナリ

液質肋膜腔内ニ滯留セル症ノ理學的症候ハ液質ノ量ニ從ヒ其強弱一
 様ナラス然レモ若シ液質一定量ニ達スルキハ胸廓擴張スルニ由リ視
 診上之ヲ知ルヲ得ヘク同時ニ肋間腔ハ變廣シ該部ノ皮膚ハ緊張シ呼
 吸運動微弱トナリ且其運動健側ヨリ稍遅ク或ハ全ク歇止スルニ到ル
 又鄰接器關ハ轉位スルコト稀ナラスノ右側ノ液質滯留ニ於テハ心臟左
 乳線ヲ超ヘテ壓排セラレ肝臟ハ下方ニ壓下セラル之ニ反シ左側ノ液
 質滯留症ニ於テハ心臟右方ニ右胸骨線外ニ轉シ兼テ脾及肝左葉下
 方ニ變位ス稀レニハ胸廓彌蔓性ノ搏動ヲ呈スルコトアリ
 觸診ニ於テハ液質滯留部ニ於テ聲音震顫減弱シ或ハ全ク消失シ試ニ
 線狀觸診ヲ行フキハ滯留液ノ上界ヲ測定スルヲ得ヘク從テ打診成績
 ノ正否ヲ照査スルヲ得ヘシ蓋聲音震顫ハ液層ヲ通過セル癒着部ニ於
 テノミ存在シ若クハ強盛スルモノニ又滯留液ノ上際ニ於テハ肺臟ノ

壓迫ニ由リ屢強盛スルヲアリ或者ハ患側ノ皮膚ハ健側ニ比スレハ積
 贅ヲ作り易カラサルニ注目セリ又呼吸運動ノ微弱ナルハ之ニ貼セル
 手ニ由リテ明カニ知ルヲ得ヘシ若シ滯液頗ル多量ナルキハ横隔膜下
 方ニ穹窿シ肋骨縁下ニ於テ觸診シ得ルヲアリ
 患部ヲ打診スルニ抗抵増加セルノ感アリテ濁音ヲ放ツ然レモ濁音ノ
 起始部ハ液層ノ上界ト一致スルモノニ非ス且其音ハ肺下縁ニ接近
 シ液層其厚徑ヲ増加スルニ從ヒ愈沌濁スルモノトス而シテ濁音部ノ上
 界ハ通常脊柱ヨリ斜ニ前下方ニ走行スト雖モ稀ニハ水平ヲ爲シ或ハ
 却テ前方ノ後方ヨリ高キヲアリ然レモ此境界連續セル直線ヲ爲ス
 稀ニ多クハ彎線ヲ呈スルモノトス是レ「ダモアツ」氏ノ始テ證明セ
 ル所ナリ又左側ノ液質滯留ニ於テハ半月狀部縮小スルモノニテ診斷
 上頗ル緊要ナル症狀トス若シ肋膜滲出液少量ナルキハ其上界呼吸的

變化ヲ呈シ吸氣毎ニ下降スルヲ見ル時トシテ體位ノ變替ニ於テモ亦之
 ヲ見ルヲアリ然レモ之カ主タル關係ハ液質ノ稠度及癒着ニシテ且此變
 化ヲ呈ハスニハ毎回位置變換後久時ヲ要スルモノトス又濁音部ノ上
 際ニ於テハ破壺音ヲ聽取スルヲ稀ナラス其他前胸面ノ打診音ハ屢著
 ヲ清明ニシテ低調ナルヲアリ若シ滯留液甚タ多量ナルキハ「ウヰル」リ
 ム氏氣管音ヲ發スルニ到ルヘシ
 聽診ノ症狀ハ甚タ複雑ニシテ液質少量ナルキハ氣胞性呼吸音微弱トナ
 ルニ過キササルモ多量ニシテ肺臟ヲ壓迫シ無氣トナスキハ氣管枝呼吸音
 所謂壓迫呼吸音ヲ發生シ若シ滯液一層多量ナルキハ各種ノ呼吸音全
 ク聽知スヘカラサルニ至ル是レ職トシテ音響ノ傳播歇止スルト肺臟ノ
 他交通氣管枝モ亦壓縮セラル、ニ山ラスンハアラス又時トシテ呼吸音
 ノ壺性ヲ帶フルヲアリ

氣管枝聲ハ多クハ減弱シ又液質ノ上界ニ於テハ山羊聲ヲ聽クヲ稀ナ
 ラス其他時トシ「バクゼリー」氏ノ現象ヲ呈スルヲアリ
 瀦液ノ性質ハ病床經過ヨリ粗付度スルヲ得ヘキモ其精確ナル診定ニ
 至テハ特リ穿胸術ニ由テ達スルヲ得ルノミ
 液質包裹セラル、キハ液體ノ流動性ニ基因スル諸般ノ理學的症候全
 ク歇止シ殊ニ濁音ハ不整形ト成リ呼吸及體位ノ變替ニ由テ變化ヲ呈
 スルヲナシ
 瀦液ノ外方ニ潰決セントスルキハ上章既ニ(二二二頁ヲ參照セヨ)記載
 セル症狀ヲ呈スルモノニシテ此症ト肋膜外圍膿瘍トノ鑑別モ亦已ニ之
 ヲ詳述セリ
 肋膜腔内ノ液質ハ須シ肺胞ヲ充實セル無氣質ト誤ラサルヲ要ス蓋乙
 ニ於テハ胸廓ノ著明ナル擴張、近接器關ノ壓迫共ニ缺如セルモノニシ

聲音震顫強盛シ濁音部ノ形狀ハ不整ニシ屢唯上肺部ニ局シ或ハ其音
 下部ヨリ上部ニ於テ強ク而シテ疾患左肺ニ在ルキモ亦半月部ノ高徑著
 キ變化ヲ受クルヲナシ
 瓦斯、肋膜腔内ニ集積セルモノニ於テハ主トシ胸廓ノ擴張及呼吸運動
 ノ減弱ヲ見ル但此症ニ發生スル諸多變化ノ強弱ハ逸出セル空氣ノ多
 少ニ關スルヤ固ヨリニシテ又近接器關(心臟、肝臟、脾臟)ノ變位ヲ現ハス
 アリ
 聲音震顫ハ減殺セラレ或ハ全ク消失ス
 打診音ハ空氣ノ多少及胸壁ノ張度ニ從ヒ鼓音或ハ濁音ヲ呈シ肺ノ境
 界ヲ超過スルモ尙ホ之ヲ認ム又屢打音ニ鑛性餘響ヲ帶フルヲアリ但
 鑛性餘響ヲ著明ナラシメントセハ上章記載セル手技ヲ要スルモノ
 トス其他瘰管アリテ空氣ノ逸出自在ナルキハ破壺音ヲ發スルヲアラシ

呼吸音及氣管枝聲ハ鐵性餘響ヲ帶ヒテ共ニ減殺セラレ就中呼吸音ハ氣管枝性ヲ呈スルニ至ル而シテ許多ノ症ニ於テハ體位ヲ變更スルノ際「ピールメル」氏ノ鐵性餘響高低變替ヲ起ス
 瓦斯及液質肋膜腔内ニ滯留スルノ際發生スル理學的症候ハ大半以上記載セルモノニ異ナラス即チ胸廓ノ擴張、呼吸運動ノ減損、近接器關ノ變位及聲音震顫ノ減殺若クハ消失是ナリ而シテ之ヲ打診スルニ液質ハ全濁音ヲ放ツニ由リ空氣ト區別スルヲ得ヘク又體位ヲ變替スルハ毎回濁音界ノ變化スルヲ見ルヘシ殊ニ其症候中最モ樞要ナルハ振盪音ニシテ液質少量ナルハ頗ル著明ナリ又水管音モ診斷上要用ナルモノトス呼吸音及氣管枝聲ハ鐵性餘響ヲ帶フルヲアリ稀ニハ亦点滴音ヲ聽ク其他病竈ノ包裹セラル、トアルハ上記腔洞症狀ヲ呈ス
 肋膜腔内無氣質故ニ多クハ腫瘍ノ理學的症候ハ液質滯留症ニ來ルモ

ノト毫モ差異アルヲ見ス若シ疑ハシキハ穿刺術ニ由テ之ヲ決スヘシ但此症ニ於テハ器關ノ變位ニ基因スル諸多ノ症候缺如セルハ勿論トス

第七節 喉頭ノ診査

Untersuchung des Kehlkopfes.

實地上喉頭疾患ノ診査法中殊ニ有要ナルモノニアリ曰ク觸診曰ク視診是ナリ抑モ往時ハ喉頭ノ視診ヲ爲スニ當リ單ニ外部ノ視察ヲ以テ満足セサルヘカラサリシト雖モ今日ニ於テハ喉頭鏡ノ發見及其實地應用ニ由リ明カニ喉頭ノ内部ヲ視診シ得ルニ到レリ所謂喉頭鏡診査法是ナリ之ヲ要スルニ直接ニ視察スルヲ得サル腔洞内ニ起レル生理

的若クハ病理的變化ヲ巨細ニ追究シ得ルヲ喉頭鏡検査法ニ於ルカ如キハ爾他器關ニ於テ之アラサルヘシ蓋眼底検査ニ於テモ診斷上喉頭鏡検査法ニ等シキ成績ヲ達シ得ルハ亦誣ユヘカラスト雖モ實地上ノ關係ヨリ之ヲ見レハ喉頭鏡検査法ノ遙ニ檢眼法ニ勝レルハ決ノ疑フヘカラス何トナレハ喉頭鏡検査法ニ在テハ兼テ器械及藥物ヲ喉頭内ニ送入シ罹患セル一定部ニ之ヲ使用スルヲ得レハナリ

往時醫家ノ施用セル診査法ヲ顧ルキハ古人ノ喉頭病ニ關スル知識ノ不十分ニシ且其診法ノ信據スルニ足ラサルハ容易ニ之ヲ見ルヲ得ルナリ例之今日誰カ單ニ聲音ノ嘶啞或ハ喉頭ノ疼痛若クハ喘鳴ヲ以テ喉頭内ノ一定ノ解剖的變化ヲ診決セントスルモノアラシヤ

然レモ古人ノ診査法ヲ全然廢棄シ單ニ喉頭鏡診査法ヲ以テ之ニ代ヘントスルハ抑モ亦誤レルノ甚シキモノト云ハサルヘカラス蓋喉頭鏡

ハ汎ク諸般ノ狀態ニ應用スルヲ得スノ特ニ小兒ニ於テハ全ク其用ヲ爲サス加之或ル症ニ於テハ觸診ニ據リテ立ロニ診斷セサルヘカラスルカ如キアアルハ宜シク之ヲ記セサルヘカス故ニ喉頭ノ觸診法ハ喉頭鏡検査ノ發明アリシニ係ハラス諸多ノ狀況ニ於テ猶ホ缺クヘカラスナルノ診法トス

(イ) 喉頭ノ觸診

Palpation des Kehlkopfes.

喉頭ノ觸診ハ視診ニ於ケルカ如ク内外ノ二種ニ別ツヲ得ヘシ就中外診ニ於テハ手指ヲ外部ヨリ喉頭ノ各部ニ貼シ内診ニ於テハ之ヲ口腔ヨリ喉頭口ニ送入シ可及的喉頭ノ諸部ニ達セシムルヲ要ス

試ニ談話間拇指及示指ヲ喉頭軟骨ノ均一部ニ妥貼スルキハ一種特異

ノ震頭ヲ感スヘシ是レ所謂喉頭震頭 *Laryngeal fremitus*. ニノ「ブリニッケ」氏始テ此現象ヲ記載セル人ハ之ヲ以テ聲帶震頭ノ喉頭壁ニ傳播セルモノトセリ是レ喉頭震頭ハ抵觸スル部位ニ從ヒ強弱ヲ異ニスルノ經驗ト一致スルナリ

震頭ハ甲狀軟骨ノ下縁ニ於テ最モ著明ニ之ヨリ上下ニ至ルニ從ヒ漸次其強度ヲ減スルモ全氣管上及舌骨ノ上下ニ於テモ猶ホ之ヲ觸知スルヲ難カラス蓋此震頭ノ甲狀軟骨下縁ニ於テ特ニ強盛ナルハ畢竟聲帶ハ喉頭ノ内面ニ附着セルヲ以テ聲帶震動傳播ノ關係此部ニ於テ最モ良好ナルニ外ナラス

喉頭震頭ハ部位ノ他猶聲音震頭ノ強弱即チ音學上ノ語ヲ以テ之ヲ言ヘハ聲帶ノ震動區域ニ關セサルヘカラサルハ明カナリトス是ヲ以テ聲音清明ナルキハ鈍濁セルキニ比スレハ喉頭震頭強盛ナリ又喉頭震

頭ハ聲音ノ高低即チ聲帶震動ノ多少ニ關スルモノトス何トナレハ震頭相繼テ發スル愈緩徐ナルキハ各震動ヲ感觸スル從テ亦判然タレハナリ故ニ小兒ニ於テハ喉頭震頭甚々微弱ニ其蔓延狹キヲ常トス是レ小兒ノ聲音ハ高キ「ヂスカント」調ニ殊ニ醫ノ診查ニ際シハ狼狽ノ爲メ低語スレハナリ

健康態ニ在テハ喉頭震頭兩側ノ均齊部ニ於テ其強弱等シキヲ常トスレモ僅微ノ差ニ至テハ余全ク健全ナル人ニ於テモ之ヲ見マ「アリ殊ニ右側ニ於テ強盛ナルモノヲ多シトス若シ或ル喉頭筋ノ麻痺ニ由リ一側ノ聲帶其運動及顫動作用ヲ失スルニ至ルキハ喉頭震頭強弱ノ差頗ル著明ト成リ「ゲルハルド」氏カ論セシ如ク單ニ之ニ據リテ聲帶ノ麻痺ヲ診定シ得ル「アリ然レモ這般ノ現象ハ屢見ル所ニアラス又喉頭ノ外診ニ於テハ疼痛點ニ注目スルヲ要ス

其他喉頭軟骨化骨セル老人ニ於テハ喉頭ヲ側方ニ移動スルニ當リ時トノ一種爆裂様感覺ヲ觸知スルヲアリ亦注意セズンハアルヘカラス是レ軟骨脊柱前面ヲ摩擦スルニ際シ發スルニ外ナラサルナリ

内部觸診ハ喉頭疾患ヲ診斷スルニ當リ其喫緊ナル遠ク外診ノ右ニ出ツルヲアリ蓋手指ハ短小ナルヲ以テ口腔ヨリ送入セル示指ハ僅ニ會厭ノ上部及披裂會厭韌帶ニ達スルニ過キサレハ勿論ナリト雖モ時トノ疾患ノ診斷喉頭鏡ニ據ルヨリ觸診ヲ以テスルノ遙ニ容易ナルヲアリ例之聲門浮腫及喉頭口部ノ異物ノ如シ即チ聲門浮腫ニ於テ會厭軟骨及披裂會厭襞炎症性滲出物ニ由リテ強ク腫脹セルキハ指頭容易ニ肥厚セル臘腸様ノ隆起物ニ達シ其變化ノ如何ヲ察スルヲ得ヘシ殊ニ平素健康體ニ就テ該部ノ性狀ヲ知悉セル者ニ於テ然リ又喉頭口上ノ異物モ指ヲ以テ之ヲ觸知シ且除去スルヲ得ルヲ稀ナラス

喉頭内部ハ簡易ニ之ヲ觸診スルヲ得ヘシ即チ患者ヲ椅ニ安坐シ背部ヲ緊ク後欄ニ倚ラシメ次テ頭部ヲ少シク後屈シ廣ク口ヲ開キ舌ヲ可及的挺出セシムヘシ但舌ハ手巾ヲ以テ其前端ヲ包纏シ之ヲ醫自家ノ左拇指及示指間ニ固持シ其後退ヲ防クヲ利トス是ニ於テ右手ノ示指ヲ展伸シ左口角ヨリ口腔内ニ送入スヘシ其際早時ノ絞扼及嘔吐運動ヲ避ケンカ爲メ示指ハ先ツ硬口蓋ニ沿フテ後送スルヲ適當トス何トナレハ舌後半部ノ抵觸ハ絞扼作用ヲ促セハナリ次テ指頭懸垂垂ノ近傍ニ達スルキハ速ニ之ヲ鉤狀ニ彎曲シ其尖端ヲ快手ニ下降シ以テ會厭及近位ノ韌帶裝置ニ達スルヲ試ムヘシ

甚タ過敏ナル人殊ニ小兒ハ指ヲ送入スル後絞扼運動及呼吸困難ノ爲メニ頗ル苦惱シ不隨意ニ口ヲ閉鎖シ以テ醫ノ示指ヲ咬嚼スルヲアリ加之時トノ患者検査ヲ免レントシ甚タ煩悶スルヲ見ル故ニ是等ノ障

害ヲ避ケンカ爲メ豫メ厚大ノ「コルク」若クハ匙柄ヲ齒列間ニ嵌入シ檢指ノ運用ニ廣濶ナル空隙ヲ與フルヲ可トス往時ハ輕ク彎曲セル金屬製ノ筭鞘ヨリ成レル一種ノ安全器ヲ使用セリト雖也上記ノ預防法ヲ用ユルハ敢テ特種ノ器械ヲ要スルナシ況ンヤ安全器ハ手指ノ運動ヲ妨クルコト少ナカラサルニ於テヲヤ

(ロ) 喉頭ノ視診

Inspection des Kehkopfes.

喉頭ノ疾患中外部ヨリ視察シ得ルハ通常近傍ヨリ波及セル續發性ノ疾患ニシテ甲狀腺若クハ近位ノ淋巴腺ヨリ發生シ或ハ喉頭ヲ壓迫シ或ハ之ヲ變位セシムル腫瘍之ニ屬ス之ニ反シ喉頭自家ノ疾患ニ於テハ内部ノ視察即チ喉頭腔ノ視診最モ

樞要ナルモノニシテ此診査法ノ喉頭鏡診査法 *Laryngoskopie.* ト稱スルモ

ノナルハ既ニ此章ノ初ニ於テ記載セル所ナリ

抑モ喉頭鏡診査法ハ猶爾他ノ大發明ニ於テ見ルカ如ク之ヲ實施セントスルノ企圖ハ往時業ニ諸家ノ念頭ニ浮ヒシハ亦掩フヘカラスト雖也之カ考案ヲ實行シ一定ノ方式ニ從ヒテ成効スルヲ得サリシ蓋醫學社會ニ今日ノ喉頭鏡検査法ノ實地上要用ナル所以ヲ證明シ殊ニ之ヲ理學的診査法中ニ編入セシハ「ゼルマーク」氏(一千八百五十八年)ヲ以テ權輿トス然レモ「ゼルマーク」氏ノ此發見ヲ爲スヤ先輩ノ補助ヲ受ケシハ決メ否ムルヲ得サル所ニシテ若シ氏ノ先輩ヲ十分ナル忍耐力ヲ有シ且多幸ナリシナランニハ之カ發見ノ功或ハ氏ノ有ニ歸セサリシヤ未タ知ルヘカラサルナリ要スルニ此診査法ノ考案及器械ハ氏ノ發見ニ先チテ世ニ出テシモノニシテ氏ハ唯其敏捷ナル判斷力ト熟練トニ由

リテ兩者ヲ實地上ニ應用セシニ過キス故ニ氏ノ功勞ハ學理上ニ於ケルヨリハ寧ロ實際ニ於テ之ヲ索メサルヘカラス

口腔ヨリ送入セル小鏡ヲ以テ喉頭内ヲ照輝セントスルノ考案ハ「ゲンフ」府ノ人「ゼーン」氏(一千八百二十七年)ノ始テ計劃セル所ニシテ惜哉氏ハ使用ノ困難ナルカ爲メ之カ實施ヲ廢セリ其後「バビングトン」(一千八百二十九年)「ベンナチー」(一千八百三十二年)「トルーソ」(一千八百四十年)「ベルロック」(一千八百三十七年)「リオソ」府ノ「ボーマ」(一千八百四十年)及「リストン」(一千八百四十年)ノ諸家相踵テ輩出セシモ概シテ單ニ學說上ノ攻究ヲ以テ足レリトセシモノ、如シ次テ「エヂンボロー」府ノ「ワルデン」氏(一千八百四十四年)ニ至リ茲ニ始テ長足ノ進歩ヲ爲セリ即チ氏ハ喉頭ヲ照映スルニ從來ノ硝子鏡ヲ廢シ直角ヲナセル三菱硝子ノ全反射光線ヲ用ヒ且燈光ヲ以テ之

カ光源トシ是ニ由テ始テ喉頭ノ内腔ヲ視察スルヲ得タリ然レモ氏ノ企圖ハ遂ニ世ノ稱賛ヲ得ル能ハサリシ
次テ倫敦府ノ高名ナル唱歌師「マニウエル」ガ「ルシア」氏一定ノ方式ニ從ヒテ喉頭鏡診査法ヲ施行セリ蓋シテ氏ノ検査ハ聲音及言語發生ノ生理上ニ於テハ大ニ緊要ニシテ氏ハ一千八百五十五年一書ヲ著ハシ之ヲ記載セリト雖モ實地醫學ハ之ニ由テ毫モ影響ヲ受クルコトナカリシ

維也納府ノ「チェルク」氏ハ僅ニ「ゼルマー」氏ニ先チ之カ検査ヲ行ヒシモ氏ハ人工光線ヲ忽ニシ徒ニ日光ヲ事トセシヲ以テ亦失敗ヲ來セリ要スルニ若シ氏ニシテ猶ホ試験ヲ持續セシメナハ或ハ「ゼルマー」氏ノ成功ニ達セシヤモ亦知ルヘカラサリシナリ然レモ「ゼルマー」氏ノ「チェルク」氏ニ先チテ之ヲ大成セシハ掩フヘカラサル

所ニノ喉頭鏡検査法ヲ舉テ理學的診査法中ニ入レシ偉績ハ永ク氏ノ占有ニ歸セサルヘカラス而シテ、セルマーク氏諸大學ヲ漫遊シ到ル處「デモンストラチオン」ニ據テ諸教授ニ新發見ノ實地上要用ナルノ所以ヲ證明セシハ此發見ノ實地上應用ヲ裨益セシヤ決シテ尠カラズ

喉頭鏡診査法ノ理學的原理ハ容易ニ之ヲ解スルヲ得ヘシ即チ光線ヲ咽喉腔内ニ於テ喉頭入口ノ上際ニ保持セル小鏡上ニ落下セシムルニ鏡位其宜シキヲ得ルハ光線反射ノ喉頭腔ニ入り之ヲ照輝ス是ニ於テ檢者眼ヲ光源ノ方向ニ來タスハ鏡面ニ鮮明ナル喉頭内腔ノ映像ヲ認ムルヤ明カナリ故ニ喉頭鏡診査法ノ手技ハ喉頭鏡ヲ正シク使用シ且光源ノ應用ヲ適當ナラシムルニ他ナラス

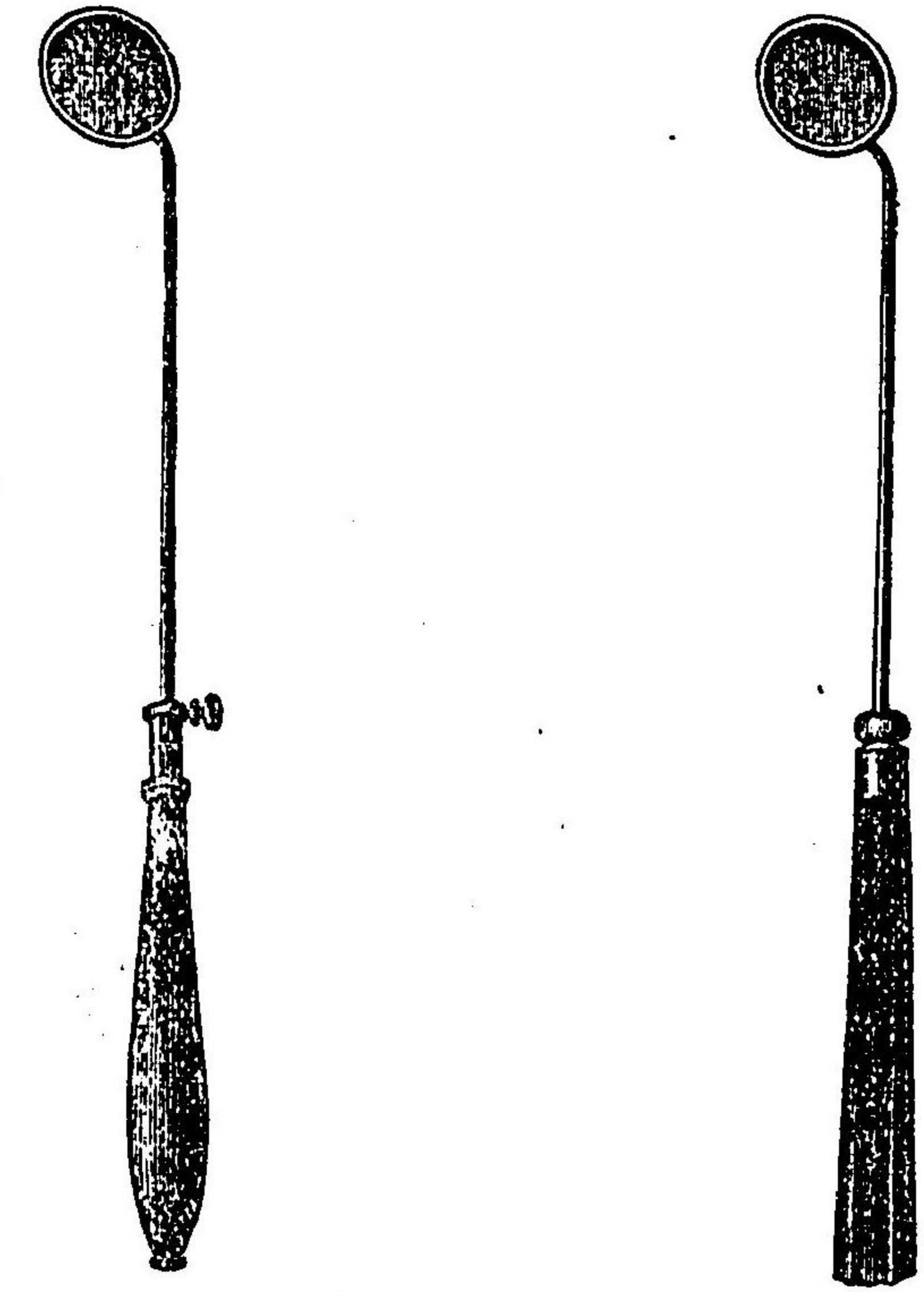
喉頭鏡ノ形狀及物質ハ屢變更セラレタリ蓋諸家各自己ノ慣用セル器

械ニ特別ノ便益ヲ歸スルハ亦止ムヲ得サル所ナリ之ヲ要スルニ許多ノ喉頭鏡中就中新銀製ノ盒内ニ嵌挿セル圓形ノ硝子鏡ハ諸多ノ目的ニ向テ最モ適當ナルカ如シ而シテ小鏡ノ背面ニハ八乃至十センチメートルノ長サヲ有スル撓性ノ銀莖ヲ鑢着シ莖ノ他端ハ粗同長ノ八角形木柄ニ固着シ以テ鏡ノ把握ヲ便ナラシムルヲ良トス(第百十一圖)

喉頭鏡ノ木柄圓形ニシテ滑澤ナルモノハ之カ使用頗ル困難ナルヲ以テ利アラズ又銀莖ヲ小螺旋ニ由テ木柄中ニ固定スルハ敢テ稱用スヘキモノニ非ス(第百十二圖)斯ノ如キ副裝置ハ徒ラニ小鏡ノ重量ヲ増サシムルニ過キサルト螺旋ハ之ヲ使用スルノ頻々ナルハ速ニ其固持力ヲ失スルトハ暫ク之ヲ措クモ銀莖ノ螺旋ニ由テ眞ニ木柄中ニ固定シ得ルハ稀ニシテ通常ハ既ニ初ヨリ輕易ノ運動ニ際シ直ニ動搖スルノ弊アリ

第一百一十圖

固着セル角
柄ヲ有スル
喉頭鏡二分
一大



第一百二十圖

螺旋裝置及
圓柄ヲ有ス
ル喉頭鏡二
分一大

硝子鏡ト銀莖トハ一定ノ角度ヲ有セサルヘカラス蓋光線反射ノ規則ヲ知悉セルモノハ鏡ト銀莖トノ長軸百三十五度ノ角ヲ爲スノ鏡位最モ適當ナルヲ見ルヘシ而シテ此學說上ノ假定ハ實地上ニ於テモ亦其証ヒサルヲ見ルナリ然レモ銀莖ハ撓軟ニシテ機ニ臨ミテ鏡ニ隨意ノ位置ヲ爲サシムルニ適セサルヘカラス

硝子鏡ノ大小ニ關シテ實地上直徑二〇、二三及三五センチメートルノモノ三箇ヲ備フルルハ諸多ノ狀況ニ於テ十分ナリトス而シテ若シ口腔及殊ニ咽頭腔廣潤ニシテ最大ノ鏡ヲ使用スルニ十分ノ餘地アルルハ最大ノモノヲ試用スヘキハ固ヨリトス何トナレハ鏡愈大ナルルハ其光線ヲ聚メ之ヲ喉頭内ニ反射スルノ力強シ從テ喉頭腔ノ映像鮮明ナレハナリ之ニ反シ小兒及扁桃腺ノ肥大ニ由リテ咽頭腔狹隘トナレル者ニ於テハ直徑短小ナル鏡子ヲ用ユ但反射鏡子ノ大サ上記ノモノヨリ

大ナル片ハ其使用大ニ不便トナルナリ
梅毒患者及其疑アル人ヲ検査スルカ爲メ別ニ喉頭鏡ヲ具フルヲ要ス
何トナレハ喉頭検査ノ際偶健康體ニ梅毒ヲ傳搬スルノ危険アレハナ
リ故ニ醫タルモノ器械使用後ハ常ニ石炭酸水(五%)ニテ注意シ洗滌シ
柔軟ナル手巾殊ニ良好ナルハ既ニ久時使用セルモノヲ以テ之ヲ清拭
セサルヘカラス此預防法ハ今日一層必要ヲ見ルニ到レリ蓋之ヲ經驗
ニ徴スルニ喉頭及肺結核ハ亦等シク傳搬性傳染病ナレハナリ

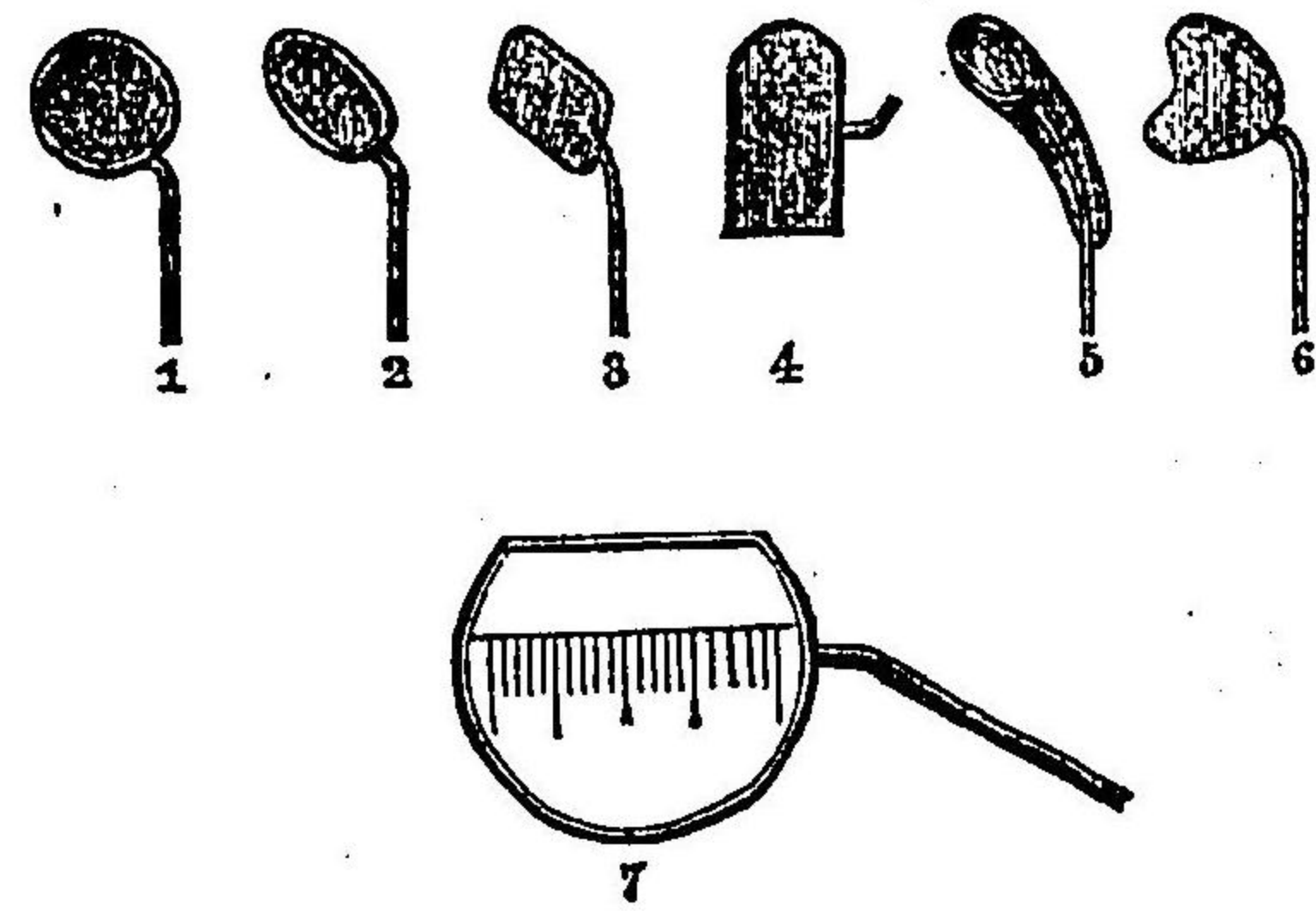
當今ハ實地上通常硝子鏡ヲ使用スト雖モ「ゼルマーク」氏始テ其試
驗ヲ爲スニ當リテハ鋼鐵性鑲鏡ヲ稱用セリ然レモ其利ノ硝子鏡
ニ及ハサルヤ明カナリ何トナレハ鑲鏡ハ之ヲ硝子鏡ニ比スレハ
光線ヲ減殺スルヲ著シク屢使用スル片ハ清拭ノ爲メニ其面ニ疵
痕ヲ貽シ曇翳シ又其使用少ナキ片ハ鏽ヲ生シ易ク加之藥物ニ由

リテ腐蝕セラレ遂ニ用ユヘカラサルニ至ルヲアリ況ンヤ其價ノ
硝子鏡ニ倍蓰セルニ於テヤ

喉頭鏡ノ形狀ハ圓形ナル者最モ諸多ノ狀況ニ適當ナルハ既ニ上
文記載セル所ナリ但「ゼルマーク」氏ハ其隅角鈍圓ト成レル方形ノ
モノヲ撰用シ「チユルク」氏ハ圓形及楕圓形ノモノヲ稱用シ又「フオ
ンブルーン」氏ハ窓形ノ喉頭鏡ヲ用ヒタリ又「ブレスロー」府ノ「ウ
オルトリニー」氏ハ懸垂垂ノ鏡前ニ下垂スルヲ防カンカ爲メ鏡ノ
上際ニ接シ一種ノ隔翼ヲ設ケ或人ハ同一ノ目的ヨリ鏡ノ下縁ヲ
陷凹セシメ該部ニ懸垂垂ヲ受容シ之ヲ歷上スルノ法ヲ行ヘリ又
「マンドル」氏ハ喉鏡検査ノ際喉頭各部ノ直徑ヲ計測セントシ鏡面
ニ「ミルリメーテル」度ヲ劃セル一種ノ喉頭鏡ヲ構造セリ然レモ之
ニ由テ得タル數價ハ眞ノ大サニ適セサルヤ明カニ且斯ノ如キ

圖三十百第

- 各種ノ喉頭鏡
- (1)「マヌエル、ガルシア」氏ノ圓形喉頭鏡
 - (2)「チュルク」氏ノ卵圓鏡
 - (3)「セルマーク」氏ノ方形鏡
 - (4)「アルーンス」氏ノ窓狀鏡
 - (5)「ウォルトリニー」氏ノ隔翼ヲ備ヘタル喉頭鏡
 - (6)「戴痕」氏有スル喉頭鏡
 - (7)「マンドル」氏ノ劃度喉頭鏡
- (1-6)ハ四分一(大)ノ自然大



計測ハ實地上毫モ價値アルモノニ非ス(第百十三圖)

「マンドル」氏及近世尙「ヒルシユベルグ」氏ハ「ワルデン」氏ノ古法ニ倣ヒ直角ヲ爲セル三菱硝子ヲ以テ鏡子ニ代ヘントセリ蓋三菱硝子ハ光線ヲ全反射セシムルノ位置ニ來タスハ宛モ鏡子ノ性質ヲ得ルニ至ルナリ然レモ余ハ自修ノ爲メ「ヒルシユベルグ」氏ノ器械ヲ以テ數人ニ就テ試験セシモ硝子ノ厚大ナルト重キトニ由リテ使用ノ甚タ不便ナルヲ感シタリ

「ウエルタイム」及「チュルク」氏ハ映像ヲ擴大セントシ凹面鏡ヲ以テ平面鏡ニ代用セリ又「ヒルシユベルグ」氏ハ三菱硝子ノ喉頭ニ對向セル硝子面ヲ穹窿セシメ而シテ球形迷行ヲ減少センカ爲メ檢者ニ對スル表面ヲ陷凹ナラシメ以テ同一ノ結果ヲ得タリ又同氏ハ好シテ星學的望遠管ヲ映像ノ擴大ニ使用セリ是レ「チュルク」氏ノ業

ニ實施セル所ナリ其他、ワイル氏ハ短小ノ燒距ヲ有スル雙凸連斯
 ヲ近ク患者ノ口前ニ保持スルキハ十分ニ映像ヲ増大シ得ルヲ説
 ケリ然レモ斯ノ如キ増大ノ實地上ニ要用ナルコアルハ極メテ稀
 ナリ

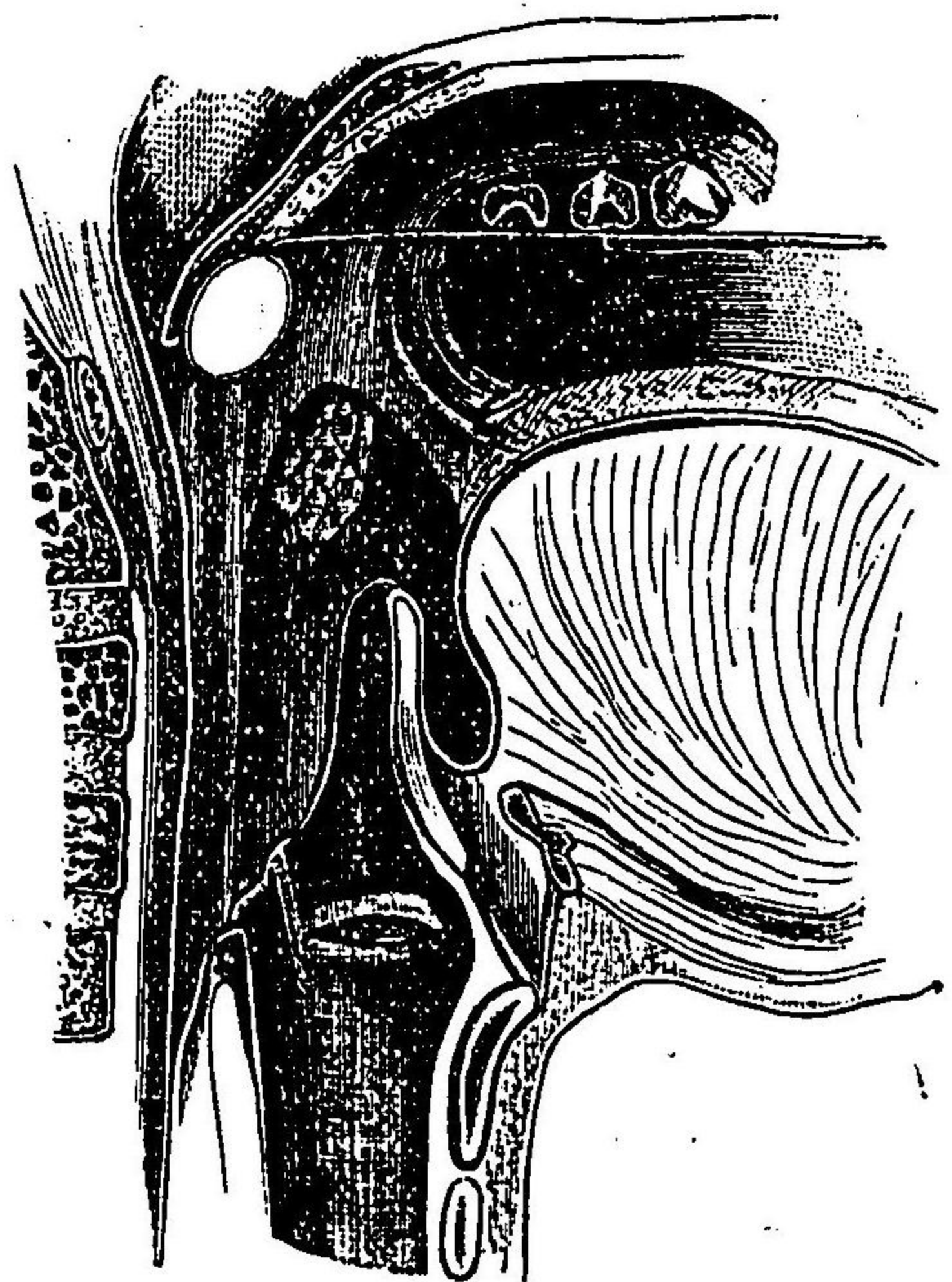
喉頭鏡ハ口腔内ニ送入スルニ先チ之ヲ温メテ體温ト同度ノ温ヲ有セ
 シメサル可ラス否ラサレハ鏡ノ口腔内ニ入ルヤ直ニ水蒸氣ヲ以テ覆
 ハレ喉頭腔ノ視察ヲ得サルニ至ル而シテ之ヲ暖ムルニハ鏡ヲ燈火上ニ
 翳スヲ以テ最モ簡易ナリトス但其際硝子面ヲ炎火上ニ對向セシムヘ
 シ若シ之ヲ忽ニシテ鏡側強ク熱セラ、ルキハ鏡、銀莖ノ鐵着離開シ破
 損スルニ至ル

暖メタル鏡子ハ決シテ直チニ口腔内ニ送入スヘカラス常ニ先ツ之ヲ手
 背ニ貼シ注意ノ加温ノ過度ナラサルヤヲ試ムヘシ温度ヲ檢スルニ頰

若クハ眼瞼ニ於テスルモノアリト雖モ梅毒患者若クハ實扶帝里患者ノ
 檢査ニ際シハ醫之ニ感染スルノ悞ナキニ非サレハ復タ稱用スヘカラス
 喉頭鏡ヲ口腔内ニ送入スルニ際シハ宛モ筆ヲ執ルカ如キ狀ヲ爲シ鏡
 柄ヲ把ルヲ要ス是レ此位置ニ於テハ鏡ノ運用最モ便宜ニシテ安全ナレ
 ハナリ而シテ先ツ鏡子ハ被檢者ノ右口角ヨリ硬口蓋ニ沿フテ後送シ其
 背面懸垂垂前面ニ觸接スルニ到ルヘシ此際妄ニ鏡子ヲ側方ニ移動ス
 ヘカラス殊ニ舌ノ抵觸ハ注意ノ之ヲ避クルヲ要ス蓋初回ノ試驗ノ奏
 効スルト然ラサルトハ主トシテ此規則ニ遵フト否トニ關スルモノニシ
 若シ喉頭鏡ヲ舌根ニ觸レシムルキハ直ニ絞扼運動ヲ喚起シ檢査ヲ
 遂クルヲ得サラシム既ニ喉頭鏡懸垂垂下ニ達セハ鏡背ヲ以テ少ク
 懸垂垂ト共ニ之ヲ後上方ニ壓上スヘシ要スルニ咽頭腔ニ於ケル喉頭
 鏡正規ノ位置ハ鏡面ト舌根ノ表面ト殆ト並行スルキ是ナリ今茲ニ掲

圖四十百第

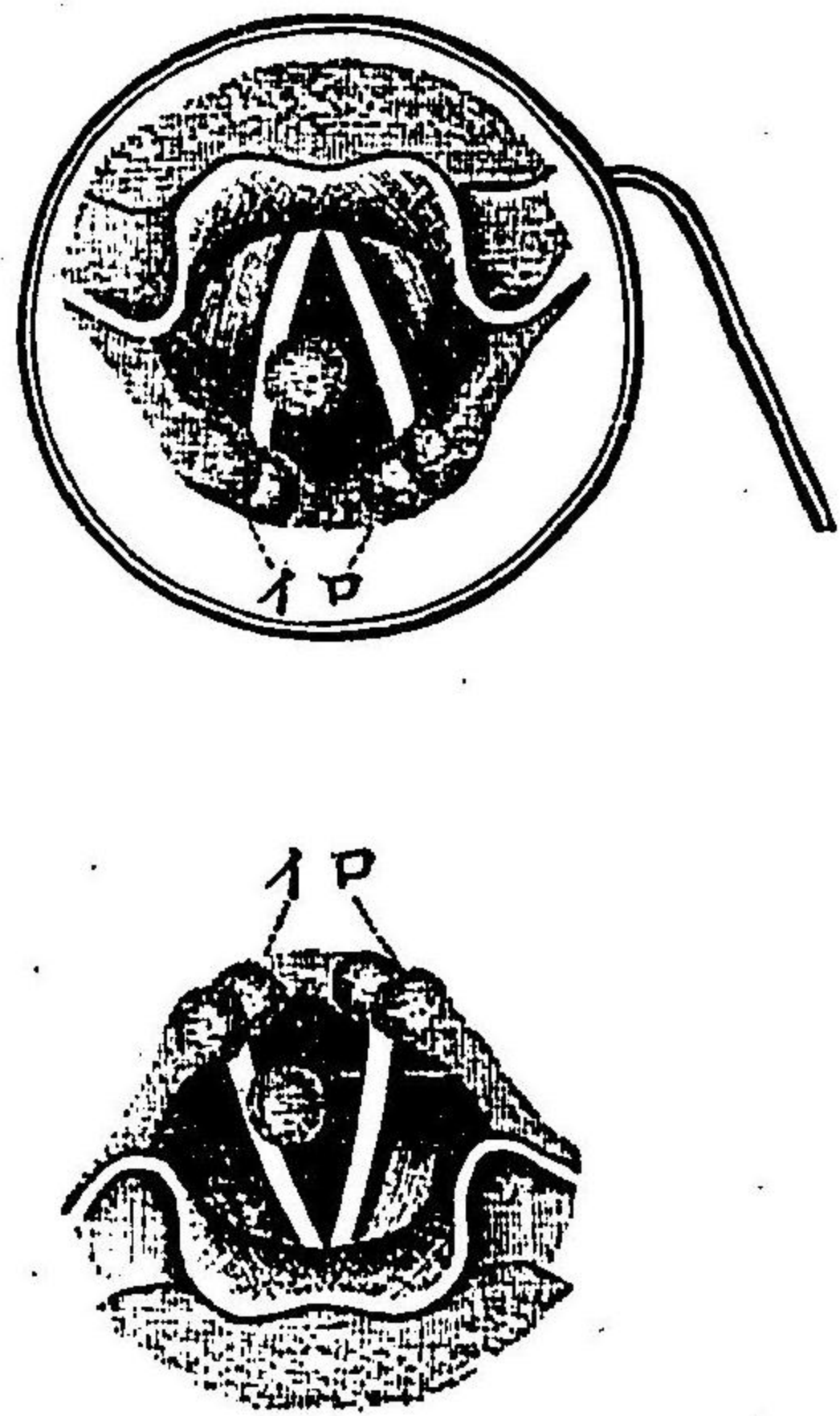
口腔内
ニ於ル
喉頭鏡
ノ位置



クル圖第百十四圖ニ據レハ上記ノ規則ヲ用ユルハ喉頭鏡ノ正シク
喉頭口上ニ來ルヲ認ムルコト容易ナリトス而シテ檢者手指ノ動搖ヲ避ケン
カ爲メ檢者ノ第四及第五指ノ背面ヲ輕ク被檢者ノ下顎ニ安置スヘシ
兩手共ニ喉頭鏡ノ使用ニ慣ル、ハ頗ル緊要ナリトス何トナレハ喉頭
鏡ヲ使用シ喉頭内ニ於テ手術セントスルニ當テハ右手ハ手術ニ使用
スルカ故ニ左手ヲ以テ鏡ヲ運用セサルヘカラサレハナリ或人ハ此目
的ヲ以テ一種ノ支持裝置ヲ製造セシモ其効少ナキカ爲メ實地上採用
セラル、ニ到ラス

喉頭鏡ハ其位置傾斜セルヲ以テ鏡裡ニ映スル喉頭各部ノ影像前後ノ
方向ヲ爲サスノ却テ上下ニ現ハル即チ喉頭ノ前部ハ鏡裡ニ於テハ上
方ニ後部ハ下方ニ位ス是レ第百十五圖ヲ對照スルハ一見瞭然タル
ヘシ又此現象ハ詳細ノ説明ヲ要セサルヘシ又該圖ニ由テ見レハ患者

第一百五十圖
喉頭各部ノ
鏡像位置
〔イ〕右〔ロ〕
左自然大

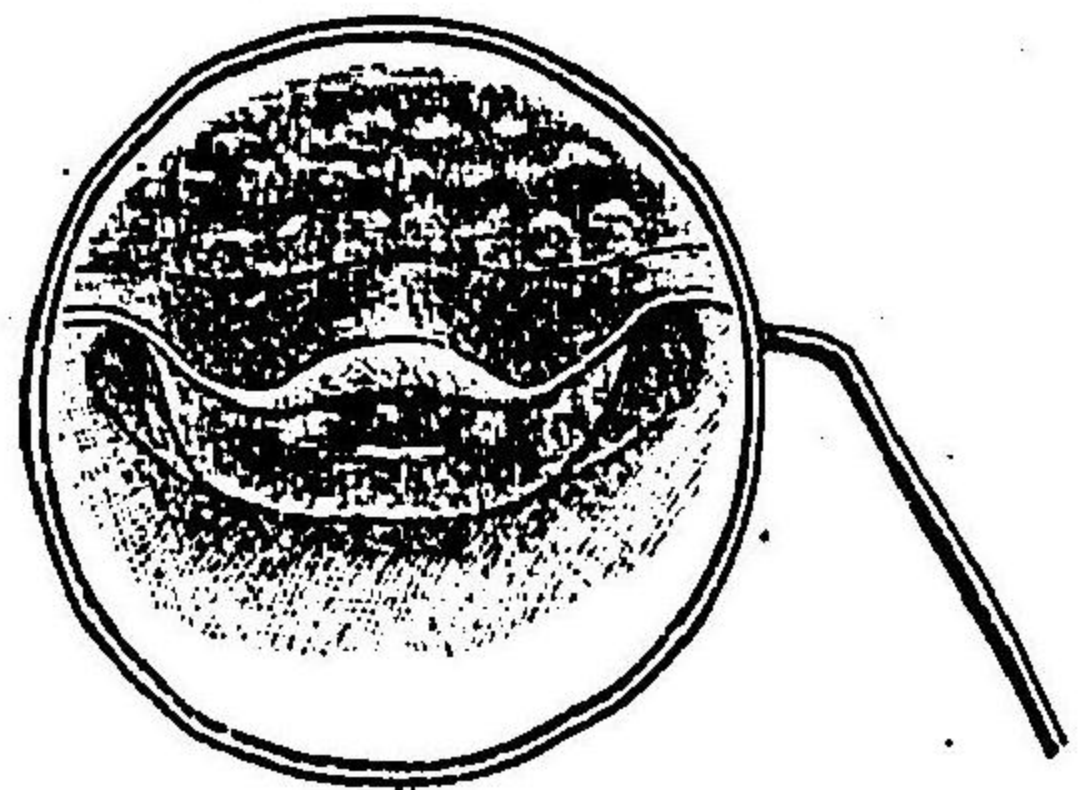


ノ喉頭ニ於テ右側或ハ左側ニ在ルモノハ鏡像ニ於テモ亦其位置全ク
同様ノ關係ヲ爲スモ檢者ハ患者ニ對向スルカ故ニ猶兩者四肢相反ス
ルカ如ク鏡裡ノ映像亦醫ノ右側ニ現ハル、ハ患者ノ左側、左側ニ現ハ
ル、ハ右側ニ屬ス
喉頭鏡ヲ以テ漸次ニ前方ヨリ後方ニ進ムルハ左ノ影像ノ鏡裡ニ現出
スルヲ見ル即チ〔一〕舌根及輪廓様乳嘴、會厭前面及中會厭繫帶並ニ兩側

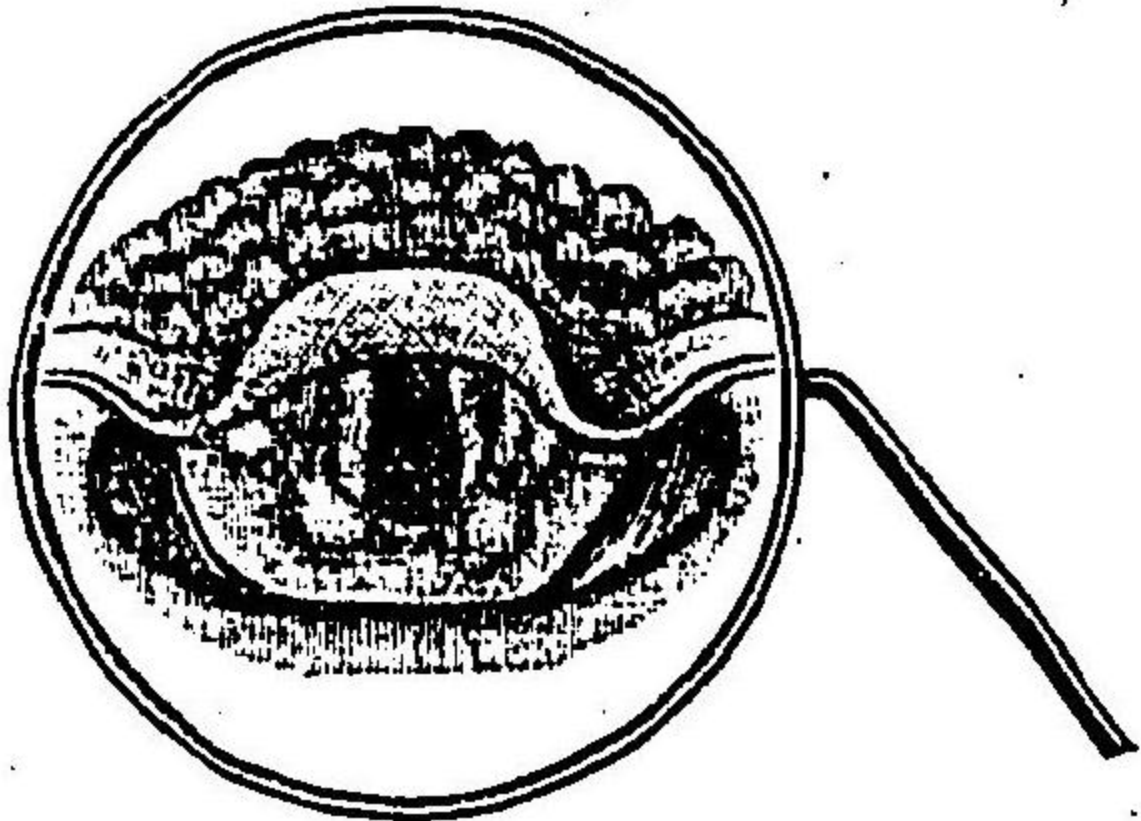
舌會厭靱帶、會厭繫帶兩側ノ小窩、會厭上縁、兩披裂軟骨及「サントリニー」氏
軟骨〔第一百十六圖〕〔二〕會厭内面ノ最上部、披裂及「サントリニー」氏軟骨、ウリス
ベルグ氏軟骨、披裂會厭靱帶、眞及假聲帶ノ後半部〔第一百七圖〕〔三〕眞聲帶
ノ前半、前聲帶、附看部、假聲帶、モルガニー氏竇、會厭内面ノ下部、會厭結節〔第
百十八圖〕〔四〕聲門十分開大セルルハ氣管〔第一百十九圖〕及〔五〕氣管、分岐部並ニ
氣管枝ノ始部〔第二十圖〕是ナリ

喉頭鏡検査ニ使用スル光線ハ懸垂垂ノ上部ニ落射セサルヘカラス是
レ此部ハ検査間喉頭鏡ヲ安スルノ部位ナレハナリ而シテ日光陰光若ク
ハ人光照輝ハ共ニ光線トシテ用ユルヲ得ヘシ
諸光線中日光ヲ以テ最モ優レリトス蓋日光ヲ以テスルハ喉頭ノ各
部自然ノ色澤ニ於テ現ハル、ハ姑ラク措キ人工光線ニ在テハ決シテ日
光ニ等シキ光力ヲ得ル能ハス然レモ日光ハ天候ノ如何ト太陽ノ位置

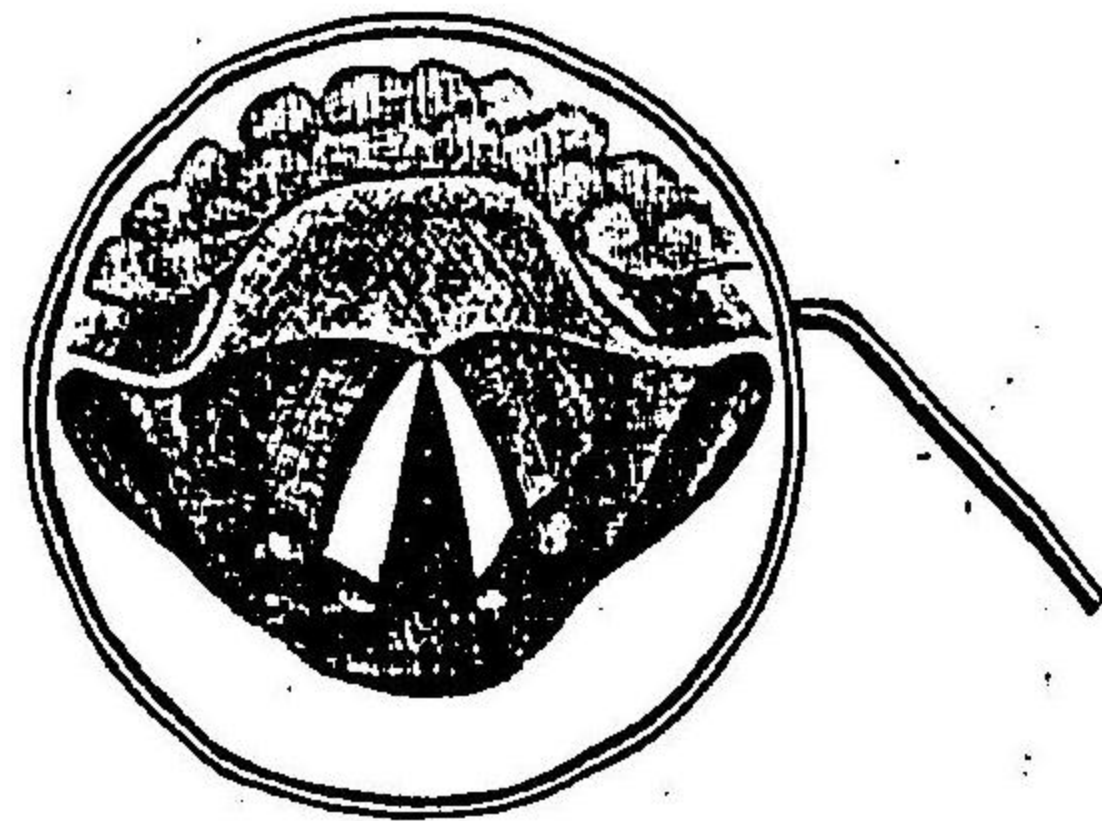
圖六十百第



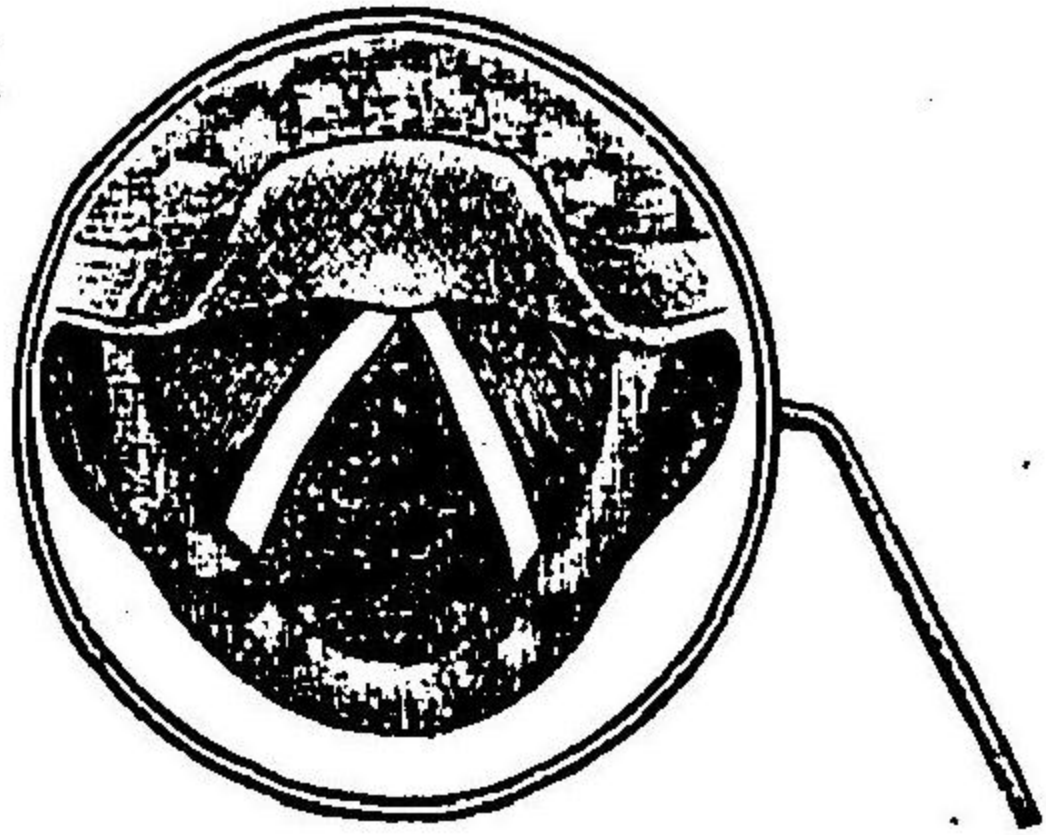
圖七十百第



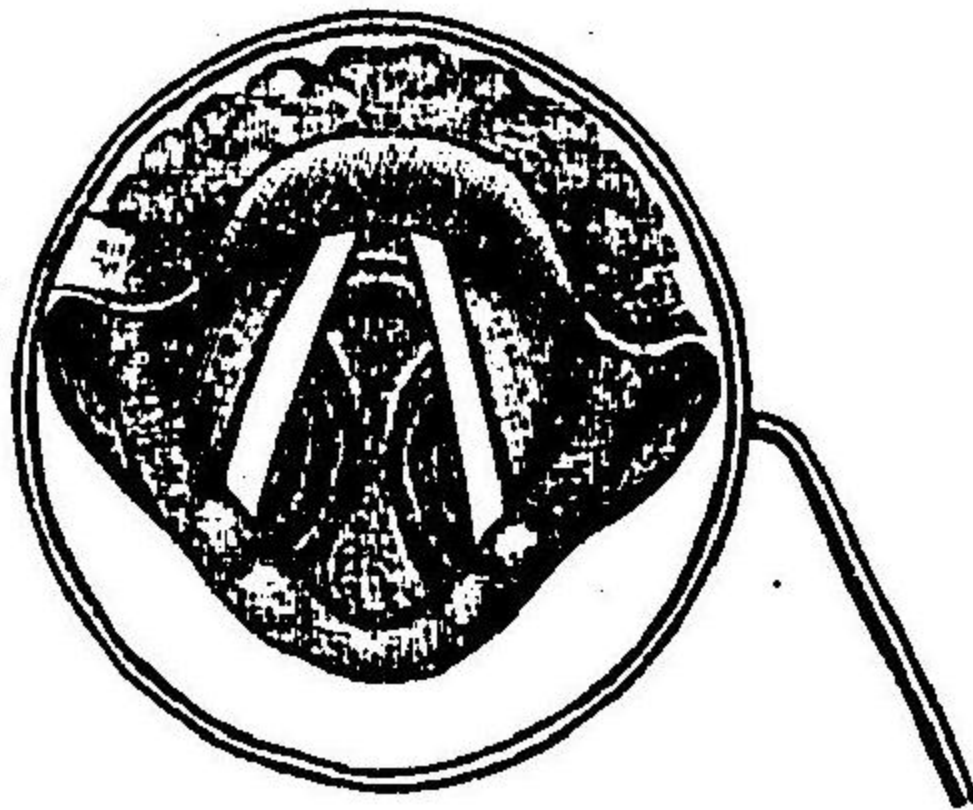
圖八十百第



圖九十百第



圖十二百第



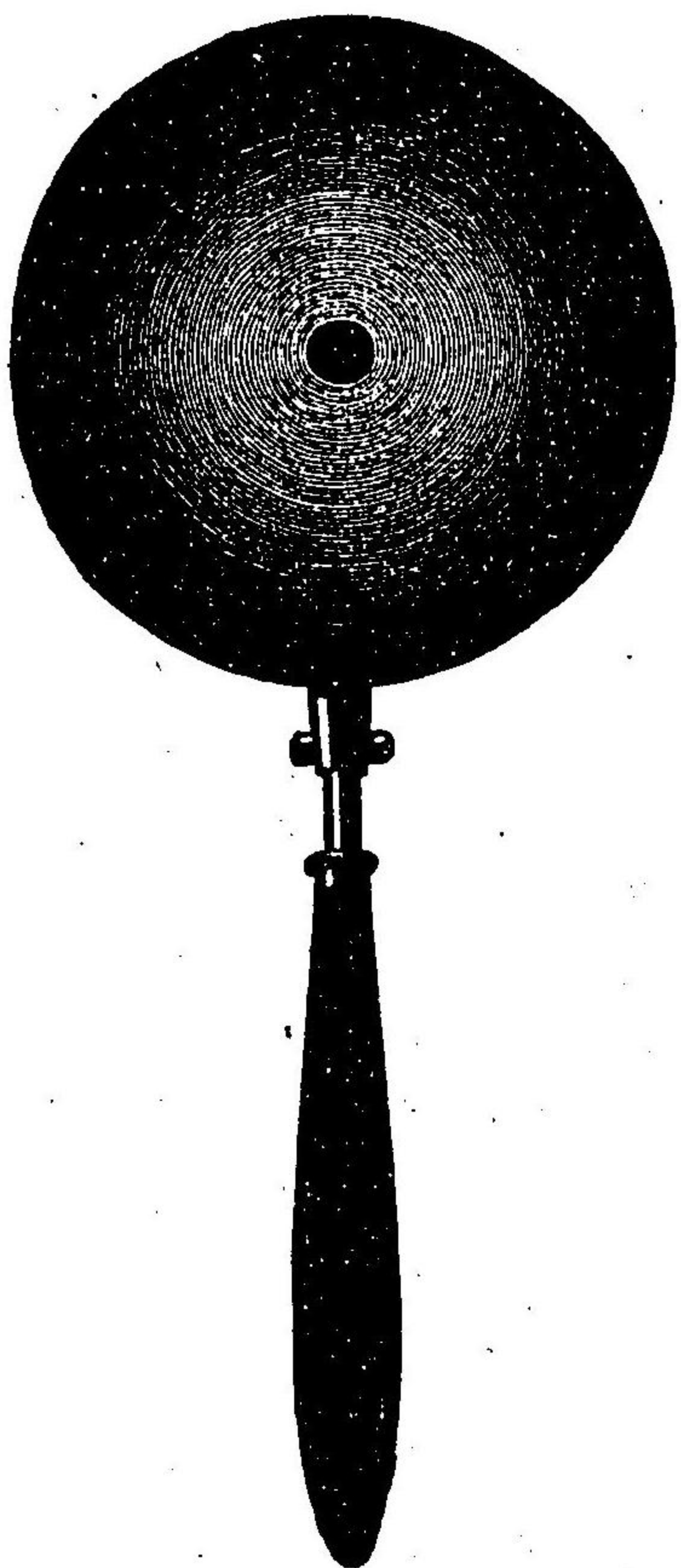
前方ヨリ
後方ニ至
ル喉頭鏡
映像ノ列
序

トニ大ニ關係アルカ故ニ實際之ヲ用ユルハ不便ナリ何トナレハ正午ノ光線ヲ被檢者ノ懸垂垂ニ直射セシメントスル片ハ患者ヲメ頭部ヲ強ク仰向セシメサルヘカラス是レ音ニ患者ヲノ困難ヲ感セシムルノミナラス醫亦之カ検査ヲ遂クル能ハサルヲ稀ナラス若シ又大陽ノ變位ニ關セスノ日光ヲ使用セントスル片ハ窓ノ近傍ニ裝置セル廻轉平面鏡ニ據リテ光線ヲ口腔内ニ反射セシメサルヘカラス加之若シ日光ヲ以テスル片ハ曇天ニ於テハ全ク検査ヲ行フヲ得サルナリ
日光及爾他光源ニ據ル検査法ハ直接及間接ニ之ヲ行フヲ得ヘシ就中日光ニ依ル直接検査法ニ在テハ患者ヲ顔面ヲ大陽ニ向ハシメ而シテ眩暈ヲ避ケンカ爲メ眼目ハ全検査間之ヲ鎖シ次テ廣ク口ヲ開張シ以テ日光ヲ直チニ口腔内ニ射入セシム又醫ハ決メ検査ニ臨ミ大陽ヲ凝視スヘカラス何トナレハ大陽ノ強キ光線ハ眼ヲ眩惑セシメ爲ニ暫時

検査ヲ猶豫セサル可ラサルヲアレハナリ其他患者ノ前面ニ當リ稍側方ニ位置ヲ占ムヘキハ固ヨリ視易キノ理トス何トナレハ否ラサルハ醫其背面ニ由リテ光線患者ノ口腔内ニ射入スルヲ妨止スレハナリ日光中ニ於ケル間接ノ検査ニ於テハ醫ト患者ノ位置全ク之ニ反スルモノトス即チ之ニ在テハ患者太陽ニ背面シテ醫ニ對向シ而シテ口腔ハ鏡面ヨリ反射セル光線ニ由リテ間接ニ之ヲ照輝スルナリ
 日光ヲ攝集スルハ十五乃至二十センチメートルノ燒距ヲ有スル凹面硝子鏡ヲ以テスルヲ最モ適當トス此硝子鏡ハ其目的ニ由リ反射鏡ト稱スルモノニシテ木柄ニ固定セラレ且蝶番關節ニ由リテ前後ニ或ハ球窩關節ニ由リテ隨意ノ方向ニ廻轉セシムルヲ得又鏡ノ中央ハ或ハ全ク穿孔セラレ(第百二十一圖)或ハ唯リ後側ノ鏡蓋ノミ穿孔シ硝子ハ此部ニ於テ錫被ヲ缺ク但乙種ノモノハ貯藏上稱用スヘキモノニ非ス何

第百二十一圖

前方ヨリ後方ニ
 廻轉スヘキ蝶番
 關節ヲ有スル凹
 面反射鏡二分一
 大



第百二十二圖

「セルマーク」
 氏ノ口腔支持
 器ヲ有スル凹
 面反射鏡



トナレハ塵埃直チニ鏡盒ト硝子トノ間ニ集積シ鏡ヲ汚損スルニ至レハナリ而シテ鏡ヲ使用スルニ當テハ中心孔ヨリ透見セシムルヲ適當ナリトス是レ反照力ハ鏡ノ中央ニ於テ最モ強キヲ考フレハ容易ニ解シ得ヘシ又患者ノ口腔内ニ於ケル火傷ヲ避ケンカ爲メ懸垂垂ハ恰モ反射鏡ノ燒點ニ當ラシメサルニ注意セサルヘカラス故ニ反射鏡六ツァールノ燒距ヲ有スルモノハ鏡ヨリ懸垂垂ニ至ルノ距離六ツァールヨリ僅ニ上下ニ在ルヲ要ス

此種反射鏡ノ應用ハ醫ヲノ空手ナカラシメ從テ全ク器械ヲ使用スルヲ得サラシムルノ弊アリ是ヲ以テ「ゼルマーク」氏ハ地平軸ノ周圍ヲ廻轉スル反射鏡ノ鏡柄ヲ地平ノ木柄ニ螺定シ醫自家ノ齒列間ニ木柄ヲ固持スルノ法ヲ案出シ且之ヲ實施セリ(第百二十二圖)然レモ此裝置ノ實用ニ適セサルヤ論ヲ要セサル所ニノ醫齒隙ヲ有スヘカラサルノ不

便アルハ姑ク措キ検査間醫患者ト談話シ患者ニ検査上必用ナル示命ヲ爲スヲ得サルナリ之ニ反シ「クラメール」氏帶若クハ「ゼメレーデル」氏眼鏡基ヲ用ユルハ此弊害ヲ避クルヲ得ヘシ

「クラメール」氏帶ハ廣幅ノ紐帶ヨリ成リテ中心孔ヲ有スル凹面硝子鏡ハ其前部ニ固定セラレ球窩關節ニ由テ隨意ニ檢者ノ眼前ニ於テ移動セシムルヲ得ヘク而シテ全帶ハ扣子ニ由リテ前額及頭圍ニ固着セラル(第百二十三圖)此裝置ノ使用法ハ今記載セルモノニ由リ自ラ明カナラノ即チ檢者攝集セル光線ノ患者口腔内ニ落射スルニ到ル迄反射鏡ヲ眼前ニ廻轉シ而シテ中心孔ハ鏡像ノ視察ニ用ユ

「ゼメレーデル」氏眼鏡基ハ堅牢ナル眼鏡匣ニシテ其孔前ニ球窩關節ニ由リテ諸側ニ廻轉シ得ヘク且中心ニ穿孔ヲ具フル凹面反射鏡ヲ固定ス(第百二十四圖)若シ醫家眼球ノ或ル疾患ノ爲メニ眼鏡ノ使用ヲ廢スル

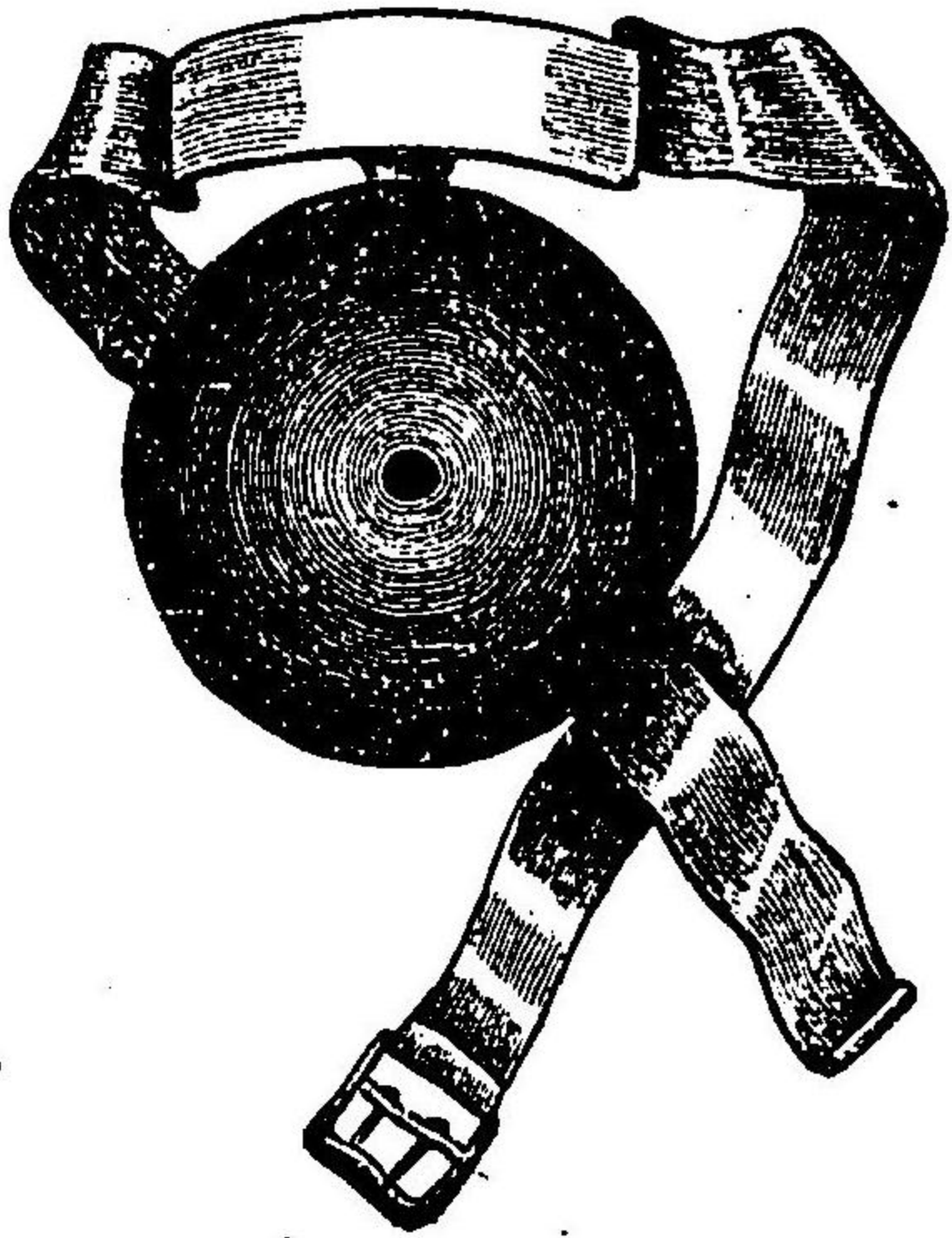
能ハサルキハ自家慣用セル眼鏡ヲ「ゼメレー」氏眼鏡匣ニ装スルヲ可トス而シテ遠視ナルキハ常ニ喉頭鏡検査ノ際補正眼鏡ヲ要スルモ近視ナルキハ之ニ反シ近視ノ度 $\frac{1}{10}$ 四曲光力以下ナルキハ之ヲ要セサルハ亦注意スヘキノ點トス又近視ノ度 $\frac{1}{10}$ — $\frac{1}{17}$ 度(二—四曲光力)ノ間ニ在ルモノハ氣管枝分岐部ヲ視察セントスルキ唯リ眼鏡ヲ缺クヘカラサルモノトス

「ウヰントリツヒ」氏ハ喉頭鏡検査上ノ照輝ニ陰光ヲ使用セントシ簡ニシテ適當ナル一種ノ装置ヲ工夫セリ即チ暗室ヲ以テ検査ノ用ニ當テ窓戸ニ直徑凡ソ五センチメートルノ圓孔ヲ穿チ以テ灑散セル陰光ヲ隔障スルキハ圓孔ヲ透過シテ落射スル光線ハ十分鮮明ニシテ直接并ニ間接ニ喉頭腔内ヲ照映スルニ足ルナリ

若シ暗室ナキカ爲メ直ニ陰光ヲ喉頭鏡検査ニ應用セントスルトキハ

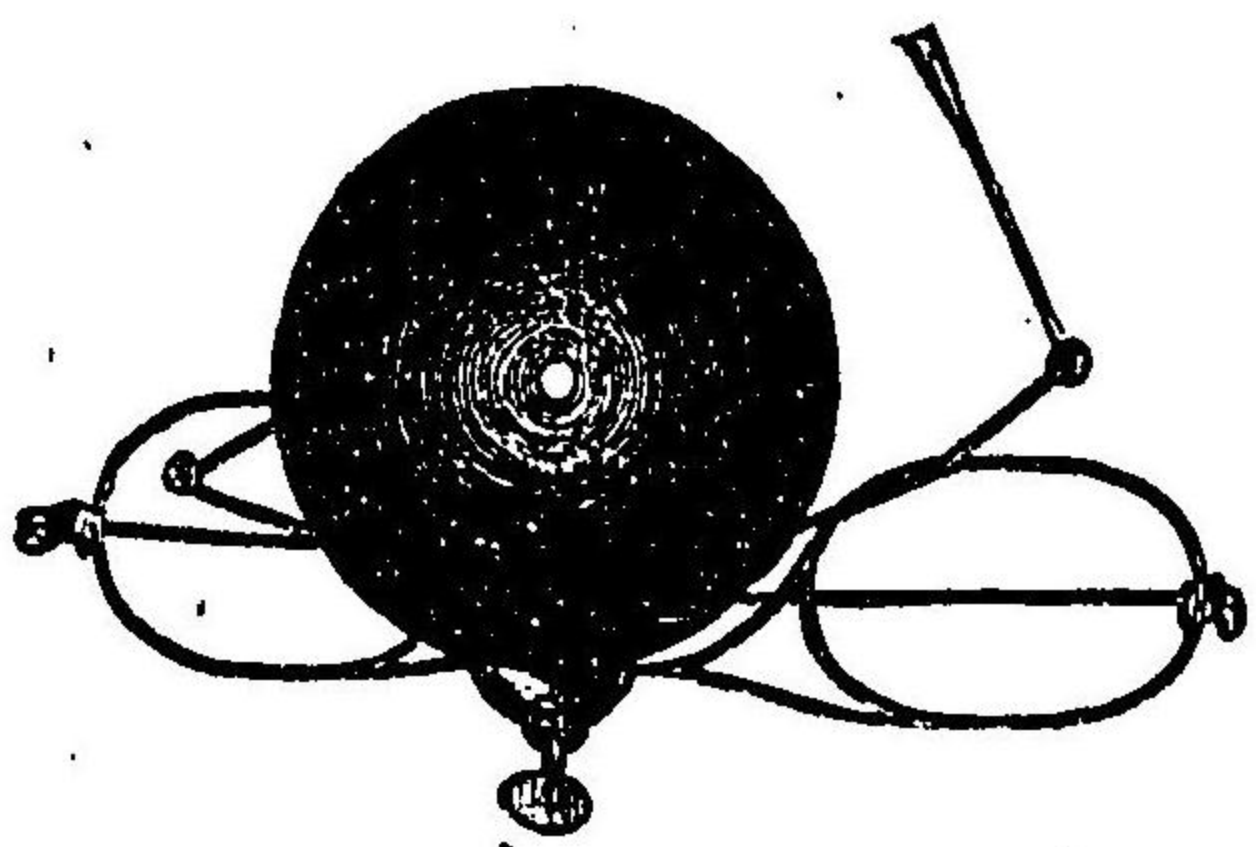
第百二十三圖

「クラーメル」氏帶三分一



第百二十四圖

「ゼメレー」氏眼鏡基三分一

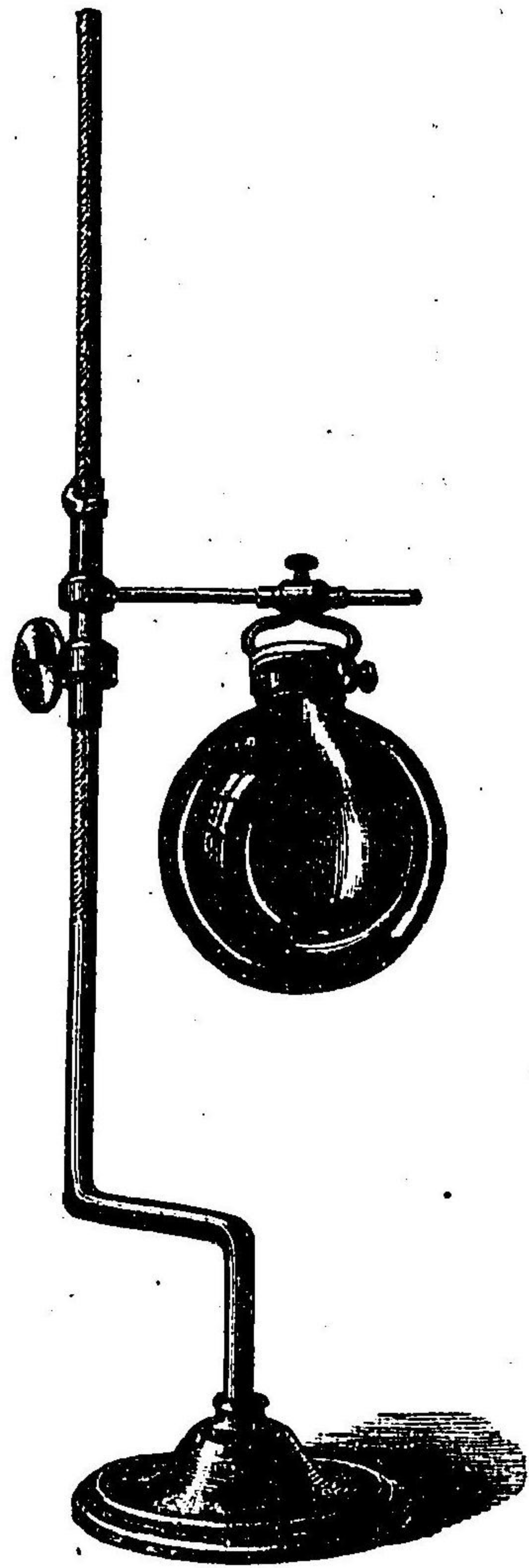


患者ヲ室ノ深處ニ導キ窓ニ背キテ坐セシメ次テ反射鏡ニ依リテ窓ヨリ射入スル光線ヲ口腔内ニ反照セシムヘシ
 人工照輝ヲ用ユルキハ天ノ陰晴毫モ喉頭鏡検査ニ關係アルヲナシ而
 ノ人工光線中最モ卓越セルハ燃燒平等ニ照輝力ノ殊ニ強劇ナルモ
 ノ是ナリ炬火ハ決シテ喉頭鏡検査ニ用ユルヲ得ス之ニ反シ電氣的炭光
 ハ其光力頗ル強烈ナルヲ以テ喉頭鏡検査ニ應用セントシ學說上之カ
 考案ヲ回ラスモノ少ナカラス輓近「ホール」氏ハ電元ニ由テ白熾セル白
 金線ヲ使用シ或人ハ麻痺涅矢亞光ヲ稱用セリ又「フオン」ブルンス「氏ハ
 酸素及燃燒瓦斯ノ燃燒流ニ由リテ白熾セル加爾基圓柱ノ明光ヲ用井
 タリ其他「フオン」チームゼン「氏ハ同一ノ原理ニ基キ酸素及水素ヲ應用
 セリ「ドラモンド」氏ノ石灰光
 然レモ斯ノ如キ照輝ハ其費用ノ多キヲ以テ實地上ニ於テハ通常燭光

油光若クハ石腦油光ヲ使用ス但瓦斯光ハ稱用スヘキモノニアラス何
 トナレハ瓦斯ノ燃燒スルヤ其光力鮮明ナリト雖モ通常光輝ニ明暗ア
 リテ且常ニ震盪シテ止マサレハナリ
 燭光ハ其光力最モ微弱ナルヲ以テ唯止ムヲ得サルノ際用ユルコ過キ
 ス然レモ燭臺ニ固着セル黃銅製反射器ニ依リ光線ノ一部ヲ濃集シ直
 接若クハ間接ニ患者ノ口腔内ニ射入セシムルハ頗ル其光力ヲ増加
 セシムルヲ得ヘシ
 油燈ト石腦油燈トノ兩者ニ就テハ乙ハ其光輝ノ鮮明ナルヲ以テ甲ヨ
 リ優レリトス然レモ凡テ人工照輝ヲ使用スルハ喉頭内常ニ實際ニ
 於ケルヨリ赤色ニ現ハルハ宜シク注意セサルヘカラス
 往時ハ燈火ノ光線ヲ濃集シ之ニ由テ光力ヲ増加セシメントセリ
 最モ簡易ニ且最モ舊製ノ裝置ハ「チユルク」氏ノ稱用セシ「シユス

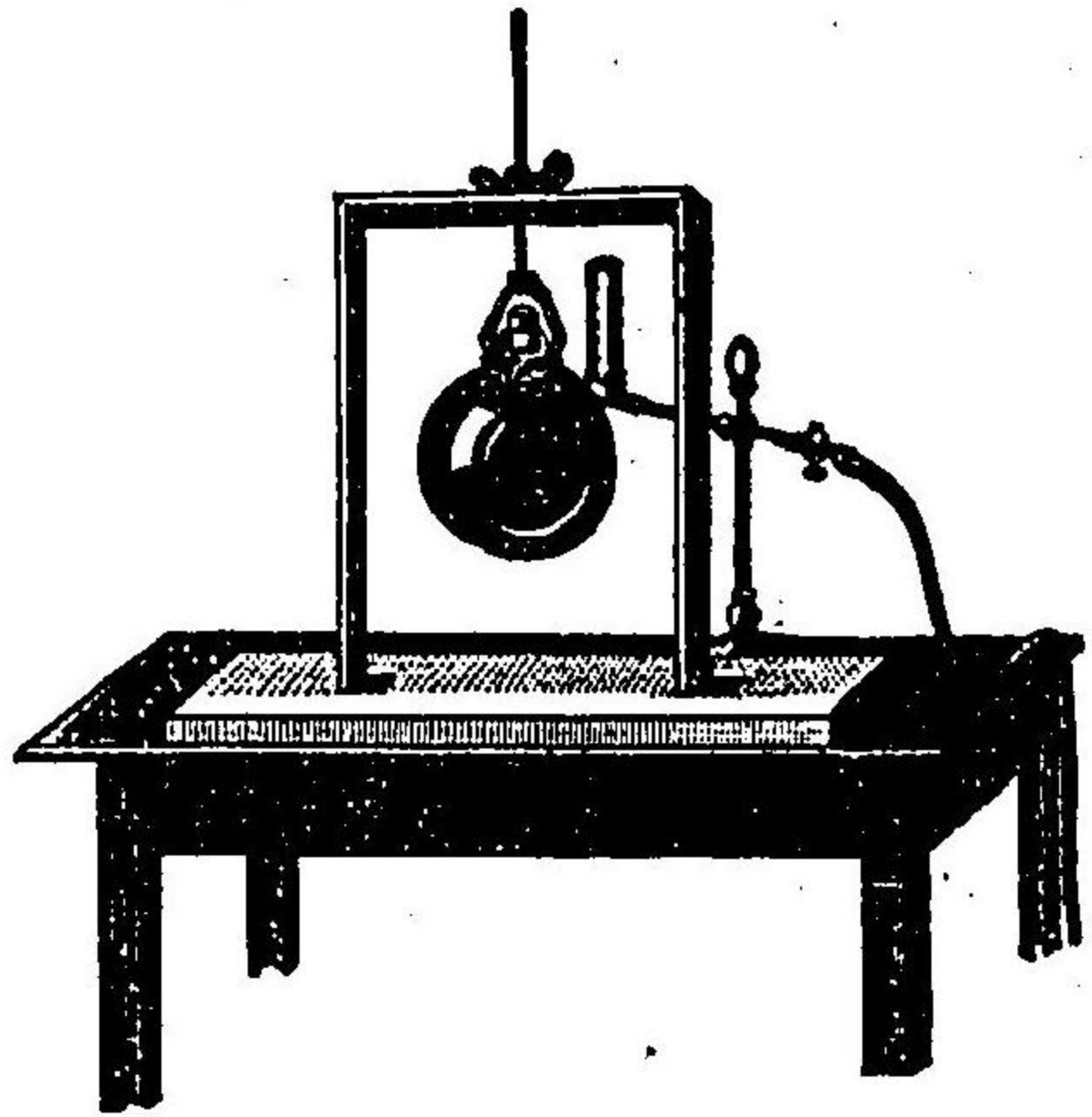
圖五十二百第

「シユステル」
球ニ用ユル
「チユルク」氏
装置



圖六十二百第

「シユス
テル」球
ノ輝照装
置



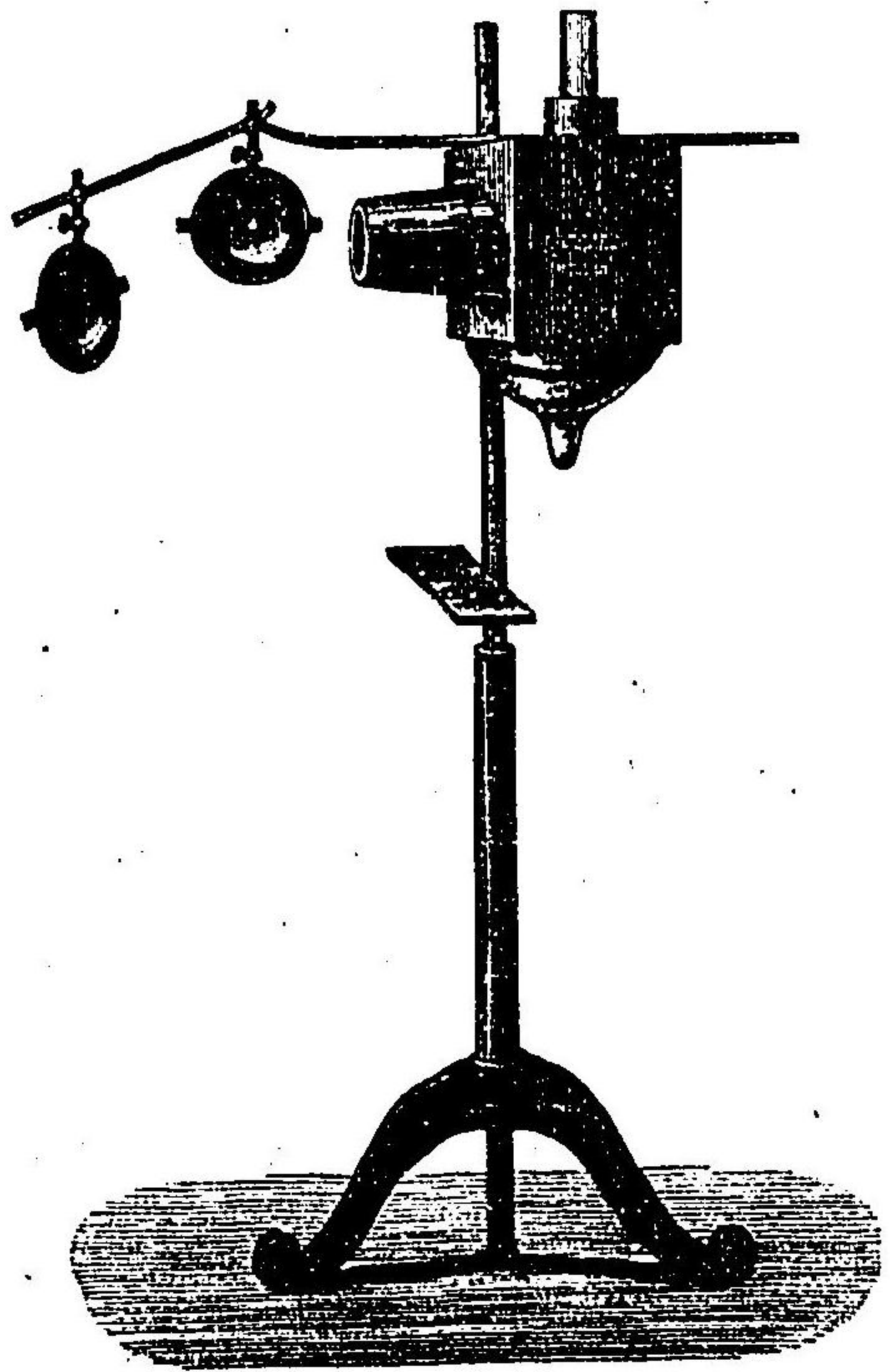
テル球トス是レ無色ノ硝子ヨ
リ成レル空球ニ充タスヨ水
ヲ以テセルモノナリ而シテ「チユル
ク」氏ハ此硝子球ハ猶ホ光源ノ
如ク検査ノ際患者ノ口腔ト同
一ノ高位ニ來タサシメンカ爲
メ之ヲ堅牢ナル支撐器ニ装シ
螺旋ニ由テ隨意ノ高サニ固定
セシムルヲ得セシメタリ(第百
二十五圖)又硝子球ヲ適當ナル
木閣ニ装セルモノハ之ニ比ス
ンハ一層簡便ナリトス即チ之

ニ在テハ硝子球、上横桿ニ於テ螺旋ニ由リテ上下ニ昇降シ得ヘシ
(第二百二十六圖)

這般ノ裝置ニノ兩凸連斯ヲ併用シ得ルモノハ其光輝頗ル鮮明ナリ而
ノ伯林府「レウキン」氏ノ製造セルモノハ此種ノ器械中最モ舊製ニシ且
恐クハ亦實際ニ適ナルモノナラン是レ四輪車ノ燈籠ヲ模倣シ構製セ
ルモノニシテ其患者ニ對向スル側面ニ於テ一箇ノ兩凸連斯ヲ具有シ
光線ヲ直接或ハ反射器ニ由リテ間接ニ患者ノ口腔内ニ射入セシム(第
百二十七圖)此裝置ハ「レウキン」氏始テ製作セシ以來諸醫漸々其外部ノ造
構ヲ變更シ其極喉頭鏡検査ニ從事セル醫ハ殆ト各自ノ考案ニ成レル
裝置ヲ有スルニ至レリ但是等ノ諸變更ヲ一々記載スルハ實ニ煩雜ニ
漸ルノミナラス亦此書ノ目的ニ添ハサルヲ以テ暫ク之ヲ茲ニ擱カン
三箇ノ兩凸連斯ヲ併用スルノ法ハ始テ伯林府「トボルト」氏ノ稱用セル

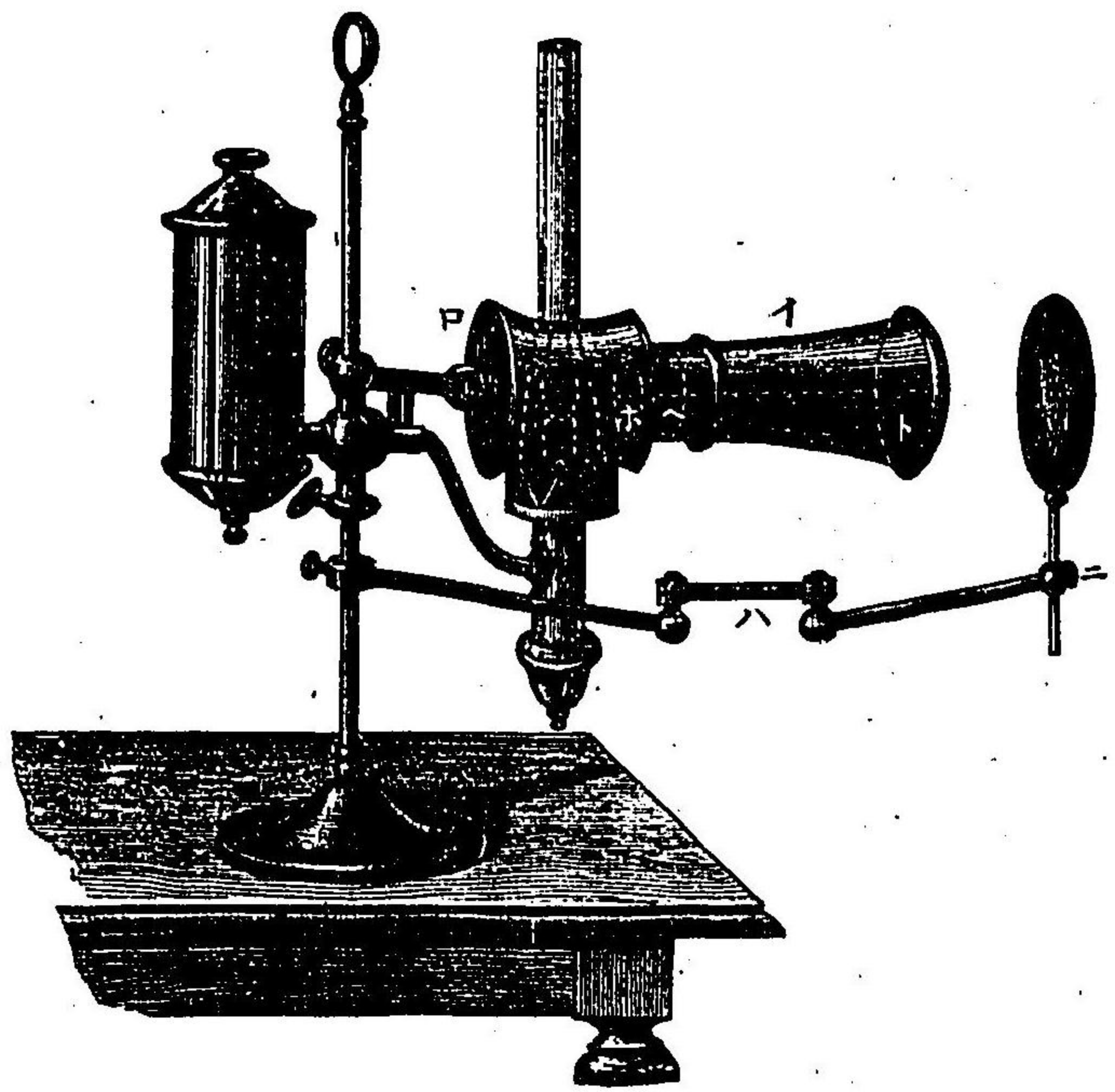
第二百二十七圖

「レウキン」
氏ノ
照裝置



第百二十八圖

「トホルト」
氏喉頭鏡ノ
輝照装置

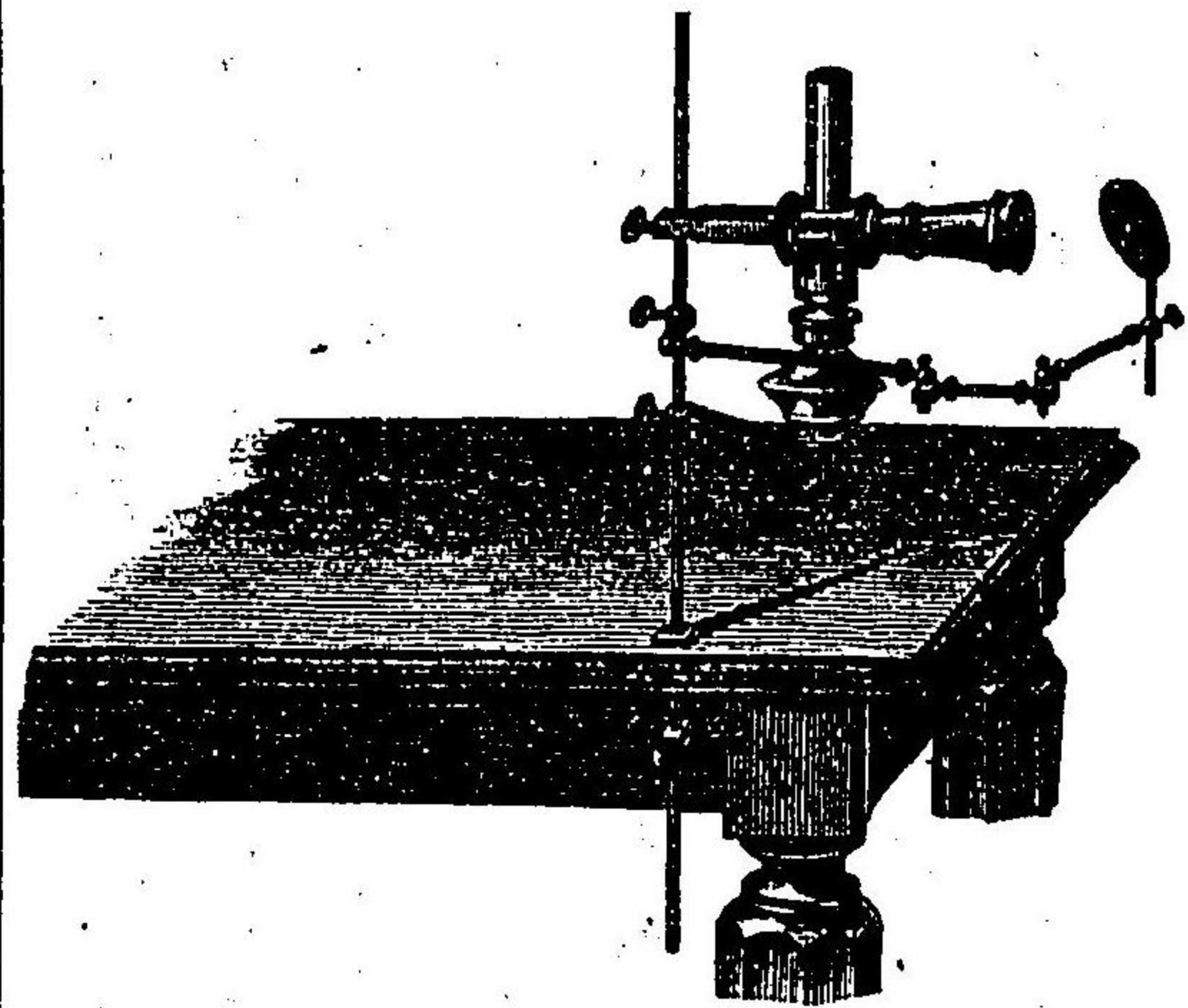


モノニソ氏ノ装置ハ其簡易ナルト使用ノ便ナルトニ由リ大ニ諸醫ノ稱賛ヲ得實地上最モ屢使用セラル而シテ其便益ナルハ洋燈ニ固定シ得ルヨリ見ルモ既ニ明カナリトス故ニ茲ニ之ヲ略述セン(第百二十八圖)

抑モ此装置ハ洋燈ノ火室上ニ裝シ地平臂ニ由リテ撐柱ニ螺定セラレタル黄銅管ヨリ成レルモノニソ管ハ螺旋(ロ)ニ由リテ前後ニ運動セシムルヲ得ヘク以テ火室ト撐柱トノ距離ヲ調節シ兼テ兩凸連スヲ火室ニ接近セシムルヲ得ヘシ而シ黄銅管(イ)中ニハ三箇ノ兩凸連スヲ嵌裝シ就中其二箇(ホ)及(ヘ)ハ曲光力同一ニソ各一「リ」ニ「ヲ」隔テ、密ニ火室ノ前際ニ位シ爾餘ノ一箇(ト)ハ大ニソ前者四分三ノ曲光力ヲ有シ管ノ前端ニ在リ其他反射鏡ハ三箇ノ關節ヨリ成レル黄銅製ノ定位装置ニ固定セラレ隨意ニ其位置ヲ變ス

第百二十九圖

トボルト氏ノ
照燈裝置



ルヲ得ヘシ殊ニ螺旋ニシテ運用
スル片ニ然リ
頻回喉頭鏡検査ヲ行フノ醫ニ
在テハ全裝置ヲ常ニ特別ノ洋
燈及支臺ニ固着スルヲ適當ト
ス若シ然ラズノ用ニ臨ミ裝置
セントスル片ハ之ヲ器械ノ使
用ニ熟練セル者ニ託スルヲ要
ス其他ノ詳細ニ就テハ第百二
十九圖ヲ参照スヘシ
トボルト氏ノ裝置ヲ使用スルニ當
テハ黃銅管ハ連斯軸ト炎心ト相合

スルニ至ル迄之ヲ昇降セシメサルヘカラス而シテ連斯軸ト炎心ト一直
線中ニ在ルヤ否ヤハ前側ノ連斯ヲ窺視スルニ其位置宜シキヲ得タル
片ハ光輝燦然タルニ由テ知ルヘシ又前側連斯ノ前際ニ暗色ノ物體ヲ
保持スル片ハ炎火物體上ニ邊緣銳利ナル鮮明ノ圈線ヲ投射ス而シテ反
射鏡ハ其中心孔恰モ連斯ノ軸ト一直線ヲ爲サ、ルヘカラス之ヲ要ス
ルニ凡テ喉頭鏡検査ヲ爲スニ當テハ先ツ注意シテ照輝ヲ整成スルニア
ラサルヨリハ決シテ検査ニ着手スヘカラス其他全裝置ハ黃銅管醫ニ對
坐セル患者ノ口腔ト其高サヲ等フシ以テ稠集セル光線患者口腔ノ平
面ニ落射セシムル如ク裝スヘキハ固ヨリ論ヲ要セス

トボルト氏ノ初メ其裝置ヲ構製スルヤ氏ハ三箇ノ連斯ヲ併用ス
ル片ハ光線ヲ濃集スルノ力單一ノ集光連斯ヲ以テスルニ比スレ
ハ遙ニ強烈ナルヲ唱ヘリ此說タル後世「ワヰル」「フレソケル」及「ヒ

ルシベルグノ諸氏カ數學的ノ検査ニ據レハ大ニ非議ヲ免レサル所ニシテ往時唱ヘシ連斯ノ効力ハ概ネ皆謬見タルヲ免レス然レモ此非難ニ拘ハラストボルト氏ノ裝置ハ猶汎ク世ニ行ハル

夫レ喉頭鏡検査ハ假令器械學ノ原理ニ通曉スト雖モ直チニ實施シ得ルモノニ非スノ必スヤ多少ノ熟練ナカルヘカラス而シテ此熟練ハ固ヨリ書冊及説明ニ據テ達スルヲ得サルヲ以テ余ハ茲ニ二三ノ實地上ニ樞要ナル點ヲ掲ケテ止ントス但以下載スル所ハトボルト氏ノ裝置ヲ用ヰテ試驗セルモノト假定スヘシ

既ニ上文記載セル如ク喉頭腔ヲ検査スルニ臨ンテハ每常先ツ注意ノ光源ヲ調整セサルヘカラス

喉頭鏡検査ハ之ヲ坐位ニ於テ爲スヘキヤ將タ立位ニ於テ行フヘキカハ素ト各人ノ習慣ニ關スルモノニシテ實地上差異アルモノニ非ス若シ

甲位ニ於テ之ヲ行ハントスルキハ患者ヲ喉頭鏡検査裝置ノ側方ニ坐セシメ醫ハ患者ニ對坐スヘシ其際醫椅子ヲ甚シク前方ニ進メ之カ爲メニ患者顔面ヲ反射鏡ニ接近スルノ餘地ヲ剩サ、ルニ至ルコトアリ是レ通常見ル所ノ過失トス故ニ醫ハ患者ヨリ若干ノ距離ヲ隔テ、椅子ヲ据ヘ反射鏡ヨリ透見スルノ際ハ體ヲ稍前屈位ニ保ツヲ要ス而シテ患者ニ命スルニ全検査間端坐スルヲ以テシ決メ體ヲ偃僂シ且顧盼セシムヘカラス又顔面ハ稍上方ニ向ケ兼テ口ヲ成ルヘク濶ク開張シ舌ハ之ヲ遠ク前方ニ挺出セシム凡テ這般ノ操作ハ力ヲ要セスノ十分ニ行フヲ得ヘク若シ醫ノ命スル所其度ヲ超ユルキハ却テ時ニ下顎ノ脱臼ヲ來タスノ恐アリ已ニ「グイニール」氏ハ曾テ之ニ關スル一實驗ヲ報告セリ又舌ハ喉頭鏡ヲ送入スルノ際退縮スルヲ防ク爲メニ其前部ニ手巾ヲ包纏シ之ヲ左手ノ拇指及示指間ニ保持スヘシ蓋初回ノ診查ニ際シ

ハ醫自ラ手巾ヲ固持スルノ利アルカ如シト雖モ熟練セル患者ニ在テハ之ヲ患者ニ委ヌルヲ得ヘシ諸喉頭鏡検査家ハ患者ノ位置殊ニ頭部ヲ固定センカ爲メ支頭器ヲ具ヘタル椅子ヲ稱用スルモノアリト雖モ世之ヲ贅物トシ汎ク行ハル、ニ到ラス之ニ反シ患者ヲ廻轉椅子上ニ坐セシメ位置ヲ上下ノ其口腔ヲ恰モ醫ノ眼目ト同高ニ達セシムルヲ得ルホハ頗ル便ナリトス

上記ノ準備ヲ終ルノ後全装置ヲ患者口腔ノ高サニ裝シ反射鏡ハ懸垂ノ上半鮮明ナル照輝ヲ呈ハスニ到ル迄之ヲ廻轉スヘシ而シテ検査ニ慣レサル患者ニ在テハ喉頭鏡ハ力メテ緩徐ニ送入スルヲ適當トス又上記ノ口位ニ於テ若干時間徐々ニ深呼吸セシメ鏡ノ送入後ニ於テモ亦然クシ且數回反復ノ母音就中「ア」ヲ發聲セシム若シ患者諸般ノ準備ノ爲メニ私カニ恐惶ヲ懷ケルホハ豫メ喉頭鏡検査法ノ如何ナルモノ

ナルト及喉頭鏡ノ送入法ヲ了解セシメ殊ニ其手術ニアラサルヲ示シ安堵セシムルハ頗ル要用ナリトス

喉頭鏡ノ加温送入法位置及順次鏡裡ニ現出スル喉頭ノ映像ニ就テハ既ニ上文粗之ヲ記載セリ而シテ喉頭ノ映像ハ検査問患者ヲ「a ae」若クハ「i」ヲ發聲セシムルトキハ之ヲ檢出スルヲ殊ニ容易ナリトス何トナレハ披裂軟骨及聲帶ハ其運動ニ際シ殊ニ著明ニ現ハルレハナリ

始テ喉頭鏡検査ニ從事スルモノハ検査ノ困難ナルカ爲メ單ニ披裂軟骨及聲帶後部ノ視察ヲ以テ検査ヲ終ルヲアルハ屢見ル所ニシテ此ノ如キ不完全ナル検査ノ決メ足レルモノニ非サルハ論ヲ要セス蓋診斷ハ喉頭ノ各部ヲ精檢セルホ始テ決シ得ルモノナレハナリ故ニ醫ノ喉頭腔ヲ診スルヤ初ヨリ一定ノ方式ニ從ヒ順次ニ舌根、會厭前面、披裂軟骨、披裂會厭襞、假聲帶、モルガニ、氏竇、真聲帶及會厭ノ内面ヲ檢スルニ慣

レサルヘカラス
 器械ヲ使用スルニ當リ運手ノ正確ナランカ爲メ豫メ模型ニ就テ演習
 スルハ大ニ適當トス而シテ茲ニ屬スル各種ノ裝置中、エルテル^{フランドム}及、ミンヘ
 ン^ン府、イーゼンシユミド^氏ノ考案ニ成レルモノハ之カ最タルモノニ就
 中、イーゼンシユミド^氏ノ模型ハ重疊シ且移動シ得ヘキ二條ノ金屬管ヨ
 リ成リ下管ハ鉛直ノ突起上ニ固定シ得ル如クス而シテ上管ノ開口上ニ
 ハ口腔ヲ表スル一小盒存シ内ニ赤色粗絨ノ突出物アリテ舌及軟口蓋
 ヲ彰ハセリ又上管ハ横截痕ヲ備ヘ喉頭内ノ生理的及病理的現象ヲ表
 セル畫圖ヲ挿入セシムルノ用ヲ爲ス余カ嘗テ學生ノ演習ニ供セシ裝
 置ニ於テハ採映殊ニ十分ナルヲ得タリ但其映像陰光ヲ以テ檢スル片
 ハ頗ル赤色ヲ帶フルモ燈光ヲ用ユルハ自然ノ色澤ヲ現ハシ轉真ニ
 逼ルヲ覺ヘタリ要スルニ此種ノ模型ニ據テ演習スルハ當ニ運手ノ

妙ヲ得ルノミナラス亦診斷的ノ眼光ヲノ鋭敏ナラシムルヲ得ヘシ
 醫檢査ニ習熟セルモ患者ノ之ニ慣レサルカ爲メ喉頭檢査甚ク困難ニ
 シ熟練家ト雖モ成効セサルヲアリ蓋許多ノ患者ニ於テ咽頭粘液膜ハ
 甚ク過敏ニシテ輕ク軟口蓋及咽頭ノ近部ニ抵觸スルモ猶烈シキ絞扼
 運動ヲ喚起スルヲアリ然レモ這般ノ障害ハ懇ニ患者ニ忍耐スヘキヲ
 諭シ且患者自ラ意思ヲ制スルハ之ヲ抑止シ得ルヲ稀ナラス之ニ反
 シ時トシ初回ノ檢査ヲ歇止シ爾後日々喉頭鏡ヲ送入シ以テ漸次粘液
 膜ノ知覺機ヲ減殺スルヲ試ミサルヘカラサルヲアリ若シ初回檢査ノ
 際暴ニ之ヲ遂ケントスルハ却テ知覺過敏ヲ増強セシムルハ往々經
 験スル所ナリ又粘液膜ノ知覺機ヲ鈍麻セシムルカ爲メ知覺鈍麻藥^嘔
 囉仿謨、依的兒、包水格魯刺兒、莫爾比涅^ノ塗布ヲ稱用スルモノ屢之アリ
 ト雖モ少量ニ於テハ効ヲ奏セス強テ多量ヲ用ユルハ中毒ノ危險ア

リ余ノ經驗ニ據レハ「ワルデンプルグ」氏ノ稱用セル臭素加里ノ虞利設林溶液(五ト二五)ハ咽頭ノ塗布ニ最モ適當ナリ然レモ十分時ヲ經ルニ非サレハ知覺ノ鈍麻ヲ發セス近世「プロ」氏ハ強單寧溶液(三ト一〇〇)ノ吸入ヲ稱用セリ其他「コカイン」一〇%塗布亦効アリ

喉頭鏡検査ノ第二ノ障害ハ口峽ノ狹窄殊ニ扁桃腺ノ肥大トス蓋之ニ在テハ喉頭鏡ノ小ナルモノヲ擇フカ然サレハ喉頭鏡検査ニ先チ扁桃腺切除術ヲ行ハサルヘカラス

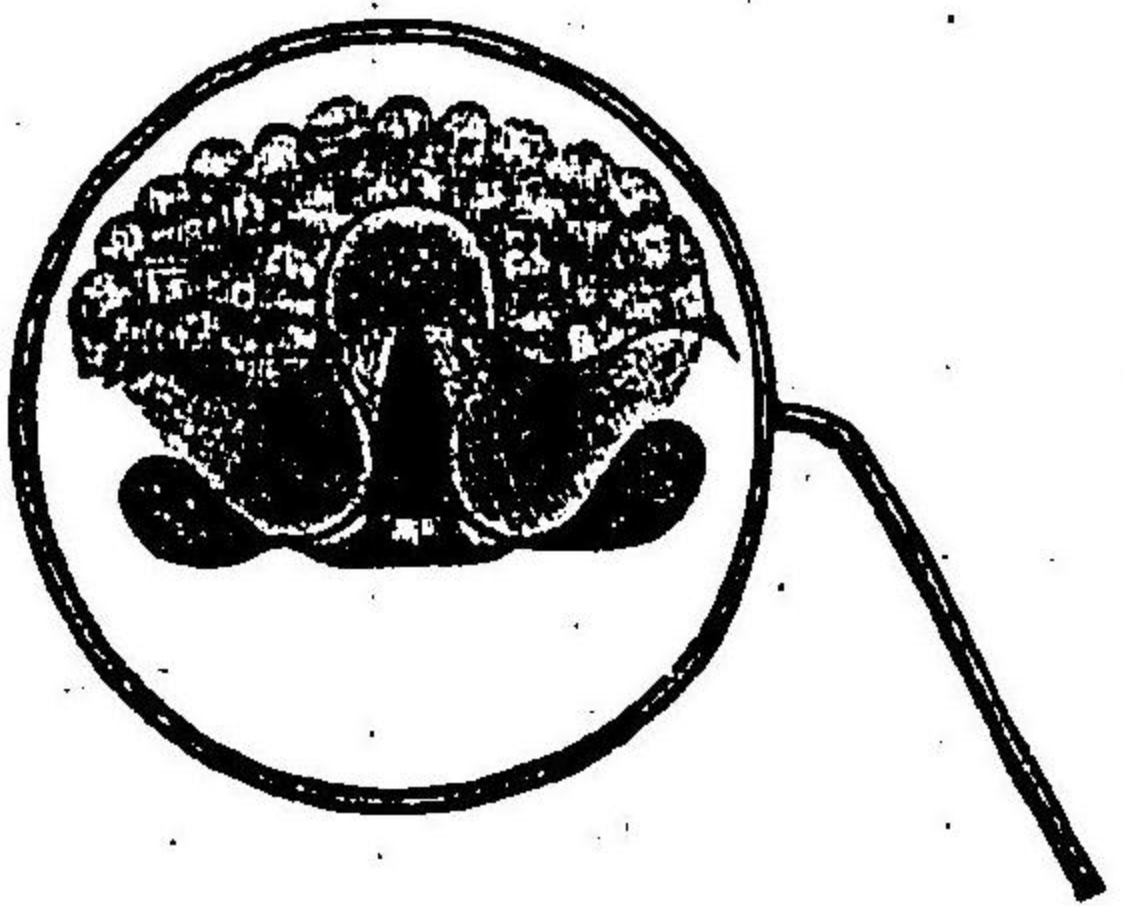
舌ノ保持及位置モ亦喉頭検査ニ頗ル障害ヲ來ス「ア」リ何トナレハ許多ノ患者ニ於テ舌根高ク隆起シ喉頭鏡ヲ蓋ヒ爲ニ検査ヲ遂クルヲ得サラシムル「ア」レハナリ此障害ハ検査ノ際「ウ」ヲ發聲セシムルニ由リ避クルヲ得ル「イ」往々之アリ此際舌根著ク扁平トナルハ各人自己ノ舌ニ就テ容易ニ證シ得ル所ナリ然レモ此法ヲ以テスルモ障害依然存ス

ルキハ喉頭鏡ヲ送入スルニ先チ舌子ヲ以テ隆起セル舌根ヲ壓抵セサルヘカラス

口腔内ニ於テハ喉頭鏡検査ノ障害存在セサルモ會厭ノ位置及形狀ノ爲メニ喉頭腔ノ視察困難ト成リ或ハ全ク之ヲ遂クルヲ得サル「ア」リ之ヲ經驗ニ徵スルニ會厭軟骨強ク後方ニ位シ多少喉頭入口ヲ蓋フニ到ルハ往々見ル所「イ」世ノ醫家斯ノ如キニ際シハ好シテ會厭扛舉器ヲ使用セリ而シテ此器ハ其種類一ナラス「ウ」或ハ鑷子ヲ使用スルノ法ニ從ヒ會厭上縁ヲ把握シ之ヲ舉上シ或ハ會厭ノ上縁ニ穿孔シ糸ヲ貫キ又或ハ會厭繫帶ヲ穿通シ糸ヲ以テ固定スルモノナル「ア」リ然レモ凡テ此等ノ器械ハ危險ノ惧ナキニ非サルヲ以テ寧ロ廢棄スルニ如カサルナリ其他會厭ノ遊離縁ヲ鈞舉スル結節狀消息子アリト雖モ稀ニ用ユルニ過キス往々患者ニ命シテ高聲ニ「イ」ヲ發セシムルニ由リ會厭ノ

第三百十圖

馬蹄鐵狀ノ會厭
軟骨ヲ呈スル喉
頭鏡ノ映像



敬立ヲ得ルコトアリ其際發聲愈緩徐ナルキハ從テ會厭愈上向スルヲ見ル若シ此等ノ方法ヲ以テスルモ尙其効ナキキハ検査ヲ他日ニ讓ルヘシ蓋會厭後轉位置ノ變化シ易キモノタルハ屢喉頭鏡検査ヲ行フモノノ經驗スル所ナリ
時トシテ會厭馬蹄鐵狀若クハ「オメガ」狀ヲ爲スコトアリ斯ノ如キ會厭ハ聲帶ノ一部ヲ全ク隱蔽シ或ハ著シク暗黒ナラシムルヲ以テ喉頭腔ノ検査ニ甚シク困難ヲ與フルコトアリ(第

百三十圖)茲ニ於テモ亦高聲ニイテ發セシムルキハ會厭上舉シ検査ヲ容易ナラシムルコト稀ナラス
小兒ニ於ケル喉頭鏡検査ハ非常ニ困難ナルモノニシテ不安、恐懼及喉頭口ノ狹隘共ニ之カ障碍ヲ爲ス
喉頭鏡裡ニ映スル喉頭腔ノ理學的變化ハ數般トス即チ色澤、實質缺損、腫瘍、狹窄、異物及喉頭各部ノ移動性モビリティヒカイ是ナリ

色澤ノ變化

Veränderungen in der Farbe.

健康體ノ喉頭ニ於テハ眞聲帶ハ純白朥樣色ヲ呈シ其後附着部ノ近傍ニ於テ往々長圓形ニシテ帶黃色ヲ帶ヒタル小斑ヲ徵ス是レ「ゲルハルド」氏ノ始テ記載セル所ニシテ氏ハ之ヲ以テ披裂軟骨ノ膨隆トセリ又爾餘

ノ喉頭腔内面ハ粗同調ノ蔷薇紅色ヲ帶フルモ會厭ハ通常帶黃色ヲ爲シ且諸處ニ於テ著シク潮紅充血ス
 萎黃病及貧血患者ニ於テハ喉頭ノ粘液膜亦蒼白ト成ル殊ニ日光ヲ以テ檢スルキハ其貧血頗ル著明ナリトス
 喉頭粘液膜過度ノ潮紅ハ加答兒ニ於テ屢發見スルモノニ其際眞聲帶ハ固有ノ白色ヲ失フ帶紅色ノ觀ヲ呈シ若シ充血及腫脹高度ナルキハ肉塊ノ狀ヲ爲スニ到ル而シテ各血管ノ充實ハ往々著明ニ單ニ肉眼ヲ以テスルモ聲帶ノ表面ニ於テ其經過ノ一部ヲ檢シ得ルヲアリ但加答兒性潮紅蔓延ノ廣狹ハ各原因ニ從フモノナルハ固ヨリコノ其濃淡モ亦然リトス即チ急性加答兒ニ於テハ通常鮮紅色ヲ爲スモ慢性炎症ニ於テハ粘液膜灰白紅色ヲ呈ハス
 時トノ喉頭ノ炎症ヨリ溢血ヲ招來スルヲアリ(出血性喉頭炎)通常多發

性ニ往々喉頭鏡検査ノ際検査ノ眼前ニ發生スルヲアリ
 喉頭格魯布患者ニ於テハ「フォン、チームセン」氏ハ始テ試験セル如ク灰白色膜様ノ沈着物喉頭粘液膜ヲ覆フヲ見ルヘシ然レモ實際之カ検査ハ頗ル困難ナルモノトス是レ雷ニ患者ノ小兒ナルカ故ノミニアラヌノ兼テ患兒呼吸ノ困難ナルト窒息ノ危険アルトニ據リ甚シク煩悶スレハナリ
 「ゲルハルド」及「フォン、チームセン」氏ハ顯著ナル蒼身症例之氣腫或ハ先天性ノ心臟病ニ於テハ喉頭ノ粘液膜亦青色ヲ呈ハスニ注目セリ又「チームセン」氏ハ黃疸ニ於テ聲帶ノ黃染セルヲ見タリト云フ